

駒場唯一のコミュニティマガジン

月刊

# 恒河沙



☆ 駒場祭以来の解放派をめぐる  
緊要特集  
一連の事態について

☆ 一周年記念 恒河沙たたき

No. 10

巻頭言

昨日と同じような今日  
今日と同じような明日

その積み重ねから

去年とは違う自分が見つけれられる、

これほど嬉しいことはありません。

また試験の季節がやってきました。

こいつを乗り越えると又春がやってきます。

去年とは違う春の息吹きを感じたい、

そう思います。

目次

巻頭言

特集

駒場祭以来の解放派を

めぐる一連の事態について

1

4

この間の異常事態について 駱駝喜多郎／青白騒動に  
 ついてラジカルな一般学生の意見 森 三郎／大学  
 自治を守れ 石野真子／推感 日世田俗人／「暴力」  
 と「反暴力」のあいだ 岡本啓文／暴力集団に対する  
 一考 山本長史／状況にて LIEDRIAN／嗚呼  
 民青殿 坂井 圭／目黒区駒場3-8-1東大明寮17S気  
 付解放派の皆様へ 末久須上圀場／現学館委員が明か  
 すコマバの色んな話 中村／解放派諸君を批判するの  
 はいいけれど 飯田民男／F君の手記 F

○ ある微笑ましい光景

諸邑 峯威

○ 編集部『解放派 大学の自治そして我々』

一周年記念 恒河沙 たたき

35

恒河沙考

山部宗輔

恒河沙への一提言

葦舟

恒河沙は淋しい存在である 落ちこぼれ

駒場祭に見られる学生映画の状況(2) 宮台 真司 39

物理倉庫問題によせて 後藤 嶺 44

結婚しちやおうかな 小野 孝子 46

オモロイことはないのかね? N氏のらくがき帳 3の1 48

雑感... SHO 51

書評 ぱれおろがす 茶坊主 53

行きあたりばったりディスクレビューとロック編? 56

同人誌座談会『今我々が書くということ』 58

◆ 人物クローズアップ 33

◆ コラム 時代錯誤家 「びつびつ...」 34

クロスワードパズル 55

クロスワードパズル 前回解答 52

# 派をめぐる

## 一連の事態について

はじめに 編集部

周知のように、昨年の駒場祭以来解放派をめぐってさまざまなことが起っており、駒場は騒然としている。解放派による昨年11月21日の明察17Sバリケード封鎖から、今年1月10日の警察力の導入、解放派の寛恕罰委員会襲撃までこの間多くのケガ人が出たり、機動隊が導入されたり、事態は起伏に富みながらめまぐるしく変わっている。事態の進行と並行してそれに対するさまざまな対応がなされているが、その多くは自治会執行部をはじめとして、今までどういふことにかなり深くかかかってきた人々の意見や行動であつたようだ。だが、今度の一連の出来事はこれまであまり「活動的」でなかつた多くの人々をもいろいろな面で巻き込むだけのものではあつた。例之ば個人名の立看がいくつか出たりもした。だが、その立看も「デマ」だとか「恠喝」だとかいわれ、何が本当なのかさっぱりわからないようないような状態であつた。そんなことでは良心的な相互批判の場は皆無になってしまう。また、出たとはいへ、そういう小さな一人一人の意見というものは十分に出尽くしているとは到底言いえず、討論は全く不十分だと思われ、編集部ではこの問題に関し駒場で生活する多くの人の声を集めてみた。また不十分ながら編集部の見解も併載する。

# 駒場祭以来の解放

## 緊急特集

一)の間の異常事態について

駱駝 喜多郎

12月10日4時から緊急自治委員会議が行なわれた。私はこの間の緊急事態の重要性を感じて専門の授業を抜け出して参加した。教室にはいつもの自治委員会と同じくらいの学生が参加していて関心の高さを感じたが、いつもと違うのは野次の子がただでなく、一般学生の積極的な発言が多かったことだった。だれもがこの間の事態を解決する必要性を感じていた。しかし一部の黒ヘル系の人たちは機動隊導入を非難し、民青攻撃を行なうのみでなんら生産的討論をせず無用な混乱をもちこんだ結果になった。(彼らの問題提起は評価するけれども) また、このような時こそひびきをつけ合わせたい討論とコンセンサス作りが必要であったのに、7時すぎに時間がないうと言つて、委員長の行動提起で終わつたのは残念だった。(時間的制約は認めるが)

△警察のねらいをみることに▽

警察・機動隊は二面性をもった存在だと思ふ。一面は階級支配の道具として「暴力機構」としての側面で、歴史を見れば明らかなことと思ふ。もう一つは普遍的に「悪」と考えられる殺人・盗みなどを取り締る体制の違いを越えた側面と考へてよいと思ふ。したがって原則として警察が入ることが許されない大学では、事実上、暴力や盗みが野放しにされる可能性がある。(階級的利益が同じで自由な学園において、暴力は自分と違ふ意見を圧殺しようとするだけではなく、今回のように負傷者がでるようになる。相手の生命・存在をおびやかすものとして許されないことと思ふ) しかし、安易に警察力にたよることは、自治破壊の既成事実化につながるし、二面性をもつ組織としてスパイ行為が行なわれる可能性もある。したがつて暴力等に対しては大衆的世論による包囲(クラス決議・集

会など)とそれでも解決できない場合に負傷者がでないと思われ  
ながら整然とした実力行動(6月9日・11日21日のように)が必要に  
なる。しかし騎察中や12月の事態は実力行動をするには危険であ  
った。(金属性の凶器をもっていたり、出口が一つだったため)さら  
に革マル派がもぐっているのだから自治破壊行為である内ゲバに手  
をかけることになった。ここに至って残された道は二つになると思  
う。一つは学生自らが防衛のためのヘルメットをかぶり多少の危険をおか  
して排除行動にでること、もう一つの道は、きびしい監視の下に  
警察力の導入を要請することだと思う。現実以前者をとるにはコン  
センサスがほとんどできていなかったので、緊急事態に後者をとる  
ことはやむをえないと考える。

ここで警察の意図を考えておく必要がある。その前提として、過  
激派を警察等は利用しているという事実を見ておくべきで、(反体  
制勢力を一つに団結させることは支配者にとって危険だし、内ゲバ  
をやらせれば捜査範囲を拡張できて越権行為も行なえる)その上で、  
警察は全国にはりめぐらされた情報網の穴である大学でスパイ行為  
をしたいであろうし、学内常駐化もしたいであろう。すなわちそれ  
は自治破壊行為にはかならない。その口実となるのが内ゲバでの殺  
人または負傷事件といえると思う。また学内での「秩序が失われ  
た」事態であろう。(多少一面的な見方ですが)

△今回の機動隊導入について▽

私は今回の事態で内ゲバを回避し、すみやかに「秩序」を回復す  
るために警察を導入してある意味で利用することは必要であったと  
思うが、それは当然きびしい監視が必用であったはずだ。しかし事  
実をみると、防衛が手かずで、なんと学生が最もいない時期の土曜  
の午後と日曜に行なわれたことは納得できない。当日の明瞭では  
放送が行なわれなかったこともまずかった。

もし機動隊を学内に入れる時は、手荒き上自治会正副委員長の承  
認という慣例を守り、機動隊の人数をしっかりと決め、学生が学内に

いる時期で、私服を含めきびしい監視のもとに捜査をしてもう一つ  
の最低限の条件だと思ふ。この点で自治会執行部が受身的になり  
行動も後手にまわってしまったことは責められるべきことかもしれ  
ない。

また、「後に残ったもの」は何かということも考えておく必要が  
ある。一つは機動隊導入という事実が残ったことで、自治破壊の業  
が残ったとも言える。したがってこれは自治を守る学生のことから  
の運動にかかってくる。また寮占拠の事実がなくなったことが二つ  
めと思ふ。もちろんこれは解放派が路線変更しきものをしたこと  
もある。以後彼らの暴力の対象は民衆と自治会執行部のみに向けら  
れ、ある意味で党派闘争ともなったが、それだけですまされないこ  
とであろう。これから、内ゲバや「暴力」に反対する根強い運動  
が望まれる。

△「暴力」について▽

今まで私は「暴力」について容易に書いてきた気がする。理  
在の私の考えを言う必要を感じるのだが、あまりまとまって言えそ  
うにない。とにかく私の視点を提示してみなさんのきびしい批判を  
待ちたい。

暴力を語る上で広い視野でみれば、階級社会であること、暴力を  
独占した「国家権力」の存在、セクトや党派の關係、目的実現のた  
めの戦略の問題、単純な人間行動としての、力の問題などの重要な  
ポイントがあり、相互に関連しているのが当然一面的にしか語れな  
い上大学内の問題であるという特殊な状況が入ってきて(階級的に  
は同一・政府等による自治破壊攻撃の存在、大学当局に対する認識  
のちがいない)複雑になってしまふ。

そこでまず言いたいことは、相手の存在(生命)までも否定して  
はならないことで、怪我や殺人をしてはいけないし、別な視点から  
は我々が反対するのは相手の行動であり、政治的役割のみであるこ  
とを明確にする必要があると思ふ。

第二に「正当防衛」としての「暴力」であるが、相手が存在までおびやかす「暴力」をふるって来た場合も、その後の事態を考慮に入れることが大切だと思う。それが泥沼のようななぐり合いになつてしまつてはしようがない。また、バリケード封鎖という行動に自治の「正当防衛」として怪我人を出さないようにある意味で「暴力」的行動に出たのだと私は解釈している。しかし、何を「正当防衛」とするか着つめる必要はあるでしょう。

第三に単純に怒りのあまり暴力をふるつてしまふ場合だが、それは自分の内的欲求のみで外的環境を無視した行動と言るので、「おさない子供のようない」行動であり、行動が政治的役割をもつ以上やめるべきであらう。だが、その怒る理由を見て理解しようとする態度を我々は忘れたくない。またそのくらいのことでは「暴力集団」と叫ぶのは言いすぎで、反「暴力」キャンペーンに利用されるのもされる方だが、する方もする方と言うしかない。

第四に「暴力集団」ということばだが、それはその集団が暴力しかふるわないで、その他の事は何もしないというイメージをもたせることばで、彼らの問題提起なども否定してしまつておそれのある危険な言葉だと思ふ。(確かに今回の解放派のしたことは「暴力集団」「ニセ左翼」と言われてもしかたがないことは認めますが)我々は一面的な見方は避けるべきで「暴力集団」の言うことに聞く耳を持たない。

第五に、現在、暴力をふるうことはマイナスの政治効果しか生まないことを見る必要がある。その例が、敵であるはずの全学連選対候補の圧勝に「貢献」したことだ。

あとは先日号の江古野氏が述べていることに基本的に賛成するのでそれを見ていただきたい。

とにかく我々の行動は自己の内的な思想・欲求だけでなく外的な環境や予想される結果という空間的時間の広がりのもとで規定されるもので、その行動は基本的な権や自由や人間性に反するものである

つてはならないでしょう。今まで一面的な考えを述べてきましたが暴力についてはこのくらいであります。

私としてはこれからセクト的にならず大学の自治と自由を守るため、内ゲバや暴力に反対していくつもりです。(53しⅡ)

## 青白騒動についての

### ラジカルな一般学生の意見

森 三郎

最近解放派と革マル派の動きが激しさを増してきたせいか、民青の「暴力集団」に対する攻撃もこの二派にしぼられていた。しかしこの「暴力集団」なるレッテルはつい先日まで、文学部闘争をになう人々や反原理共闘の人々にもはられ、またクラ活に対して「暴力集団」を擁護するのとかと非難の論拠となつていたことを忘れてはならない。解放派革マル派問題が一段落すればまたこの攻撃は始まるだろう。

「暴力集団」なるレッテルはこのように、変革をめざす団体で民青をあらからさまに非難している団体に対し民青がつけていたようだが、その「暴力」の規定はきわめてあいまいで民青を批判したら全て「暴力集団」になりかねない。まず解放派や革マル派のやっている内ゲバはその目的、方法共に許しがたいことは私の意見としてはつきりさせておきたい。しかし文闘争や反原理をになう人々はどうだろうか。確かに彼らは実力行使をすることはある。がその背後には内ゲバとはまったく相反する目的がある。その目的に異議があるならその土俵で争えばいいので、実力行使をすること自体を攻撃しても始まらない。そもそも民青は実力行使をしないのだろうか。解

放派のバリ封を排除したのは実力行使ではないのか。寮や学館の入口の検問を置いたのは実力行使ではないか。そして何よりも警察を導き入れたこと。自らの力によらず権力によって最も卑劣な実力行使ではないか。

こう言うと民青の実力行使の背景には一般学生の支持があると反論されるだろう。確かに「一般学生」は解放派、革マル派の排除は支持しているだろう。しかし民青の方針を支持しているのではない。民青も日本の変革をめぐっているのであり、そのために革マル派、解放派を排除するのだから、一般学生の支持は排除だけなのではないだろうか。すなわち民青が駒場、一般学生の支持を選挙等で得ているというのは、自民党が国民の支持を選挙で得ていると言った。またのと同じく本末転倒である。

私は解放派や革マル派の内ゲバを非難するが、これは彼らを駒場から排除する理由にはならない。駒場から排除しても内ゲバをやめることにはならないし、何より「学外者集団」として排除するのは特権意識である。だから我々には彼らの内ゲバを直接阻止するすべはない。我々のなすべきことは彼らのことをうんぬんすることではなくて、自分たちは何をやるのかをほつきりさせた独自の運動をしていくことだろう。それができたところに内ゲバの入るすまはないし、できなかつたところに内ゲバが生じた。また、できないから他者の非難に終止するのではないだろうか。(79 II)

## 「大学自治を守れ」考

石野真子

11月20日の深夜に解放派が明寮門Sの寮生A及びKの導きで、明寮門Sの部屋に強力なバリケードを作って不法占拠(解放派の寮施設利用は昨年の2・9総代会、つまり寮の最高議決機関で禁止する

事が決定されていた)を始めた時は、半ば興奮状態となり、これから先いつたいどうなるかと真暗な気持ちになったのを今でもはっきり覚えてる。なにせ僕は、解放派に「日共民青スターリニスト」と攻撃を受けている寮委員会のメンバーなので、前途の多難さの前に「タマンネエヤ」というのが正直な感情であった。

高校時代は、友だちが「民青」というようわからん所へ入ったという事を小耳にはさんだばかりは全く政治などとは無関係な生活を送っていた。そんな平和な田舎から花のお江戸に上ったのが89年の4月。中寮前の桜の花が満開だった頃だった。ところが入寮直後に中寮の引当のマル研という革マル派が活動拠点としていた部屋が火事になり中から鉄パイプが多数発見されるといふ大事件がおきたのである(この火事は、放火の可能性が非常に大きかったが、消防署は原因不明とした)。駒場寮には自主規律三原則というスバラシイ規則がある。「一、寮内に武器を持ち込まない。二、寮内でテロ・リンチを行わない。三、不法占拠をしない」といふのがその内容である。

鉄パイプ、しかも三段式の伸縮する鉄パイプを持ち込んだマル研室員に対して寮委員会が退寮処分を決定してしまった。ところがこの決定は全く権限を超えたものだったのである。革マルなんて名前も聞いたことがなかったし、民青がどういふ団体なのかも知らなかったのだ。寮の総代会で、革マルの人と寮委会の人とかやりあつたのを聞きながら、すごい寮へ入っちゃたなというのが実感であった。そして6月にはマル研への他セフトからの早朝襲撃があり、朝の6時半に襲撃のものすごい音で目をさまされたが、恐ろしかったのでベットの中で「誰か殺されたのかな」と思いながら、又くたつて

いた。7月には革マル派の中村という東大生の人かゲバで殺されたのを新聞で知り、10月にはマル研室員三名に対する退寮処分、及び寮委会の決定した退寮処分決定が越権行為であるという懲罰委員会判決が出た。11月には判決に従わないマル研室員3名が外出中に中の荷物をすべて運びだし退寮処分を執行した。(この直前に友だち

に勧められて何の展望もなしに寮委員になった。12月8日の深夜には解放派と寮生二百人程が衝突、ケガ人多数が出、翌12月9日には機動隊が駒場に入ってきた。2・1の代議員大会の日には革マル派と解放派が一触即発のゲバルトの危機、4・4には解放派のAとSが入寮せると寮委員に暴行、6・9には解放派を多くの学生力で追い出した事件等々、想い出せるだけでも教限りなく物騒な事件が起きている。

77年の12・9は、解放派が革マル系の運動をしていた兵頭君を虐殺し、他一名に重傷を負わせた日。78年の12・8は寮生と解放派が衝突し翌12・9には機動隊が導入された。二度ある事は三度あるではないが、今年はいったい何かおこるのかと思っていたら、案の定、12・8と12・9の二度にわたって機動隊が導入されるというオゾマシイ事態になってしまった。そして1月10日には明寮前にたむろしていた解放派を私服警官が多数入ってまで連行、すぐに釈放はされたがその後、寮の懲罪委員会に襲撃をかけた11人が救急車で病院に運ばれ、中には打撲で24時間絶対安静という人までいた。

まさしく「タマラネエ」が正直な所で、とても奴らにはつきあつていけない。

しかし、やっぱり駒場の中で現実におきている事態に対して「タマンネエ」が済ますわけにはゆかない。一連の問題を自分の問題としてとらえなおして、実際にこの現実に対してどういう立場で「参加」をしていくか決定していかなければならないだろう。

僕が考えるに、一連の事態によつて駒場の自治及びその自治を支えるべき我々駒場生一人一人の自治に対する態度が問われているのではないのか、と思う。解放派を駒場から追い出して、それでパンバンザイ、ハイオシマイという訳にはいかない。確かに解放派が連日暴行を繰り返しているような状況では正常な自治活動は考えられない。まして彼らが駒寮にいきなりそこを出撃拠点とするならば、

駒寮を内ゲバ戦場化するのみならず、駒場の「暴力支配」(僕はこの言葉を聞くたびに背筋に寒けがくるのですか)まできたしてしまふであろう。そうならもう自治も自由もとても期待できない。そうならからでは遅すぎるのだ。

しかし解放派がいなくなれば全ていいという訳ではない。11月の代議員大会は3年9ヶ月ぶりに成立したが、多数の議場委任をやつと成立したというオソマツサである。自治委員会はセクト対立の修羅場と化し、ヤジと怒号が全く不愉快極まりない。自治会執行部の出すビラに対しても「又、民者が……」という拒絶反応を起す人が沢山いるが、それに対して理論的に反論する人もセクトの間以外にはほとんどいないのが現状である。選挙のたびに全学連選挙が大差で勝つが、それも積極的に従来の執行部の政策を支持しているわけではなく「民青にやらしときやいいだろう」というのが多数なのではないのか。全く駒場の自治なんてお寒い限りだ。これが「天下の東大」の自治会員かと思つと情なくなつてしまふ。

「解放派の暴力から大学自治を守れ」「駒場寮を守れ」という自治会執行部がよく使う文句は、一面全く正しいのだが一つのおとし穴があるのでないのか。「守る」という言葉は現状の維持をしか意味していない。現状の自治会を守ろうなどというスローガンを繰り返している。現状が満足すべきものであるように思えてきてしまふのがおそろしい。現実の東大自治会はみるも無残なものである。代議員大会が成立しないのに何の不思議も感じない、解放派が自治委員長がアジツている所へ暴行を始めても「関係ないね」といった風に生協前を通り抜けていく。この二つの根は同じである。解放派の暴力は学園から一掃していかねばならないが、それは駒場の自治を守るためではない。駒場を活性化し、駒場の自治を創つてゆく為である。

大学の自治というものが成立するためには、二つの事が必要だと思ふ。一つは外部からの圧力に対し、その圧力をはね返し独立を保

つこと、今一つは内部の意見交換、論争が活発に行われ内部的に自治が活性化していることである。去年の11・20以来、解放派は多数の外人部隊の導入により外部から、又内部討論の基礎となる発言、意見表明の自由を暴力による封殺する事で内部から、二重に駒場の自治に対して破壊を行つてきた。特に後者は全くもつて許しがたい。駒場が生活する我々が活発な自治会動をするにあつたこの障害は

沢山ある。解放派の暴力支配をねらう活動、警察権力の学内への侵入、学部当局の学生自治への介入、干渉、そして内部的には駒場生全体の自治への無関心及びその結果としての、内部における意見交換、討論が活性的に行われていないという状況だ……。どれも大きな問題である。しかし、今現実には駒場の自治に対する最大の攻撃は、解放派による暴力支配をねらう策動である。自治会や寮委員会には軍隊があるわけではないので解放派が自治会や寮の規則を暴力によつてふみにじつてきたとしても、力で対抗する事はできないのである。結局、彼らの暴行を止めさせる為には、多くの学生の声の力で彼らを追求していくしかないであらう。この点、駒場寮の期間中の自治会の方針は一定評価されてしかるべきであらう。その後の警察権力の導入は残念なことであるが、解放派の暴力がエスカレートする中で、反暴力の抗議集会にも人の集まりが悪くなり、集会をやるたびにケガ人が出るという状況において、解放派の駒場「戦場化」を既成事実化することは何としても避けねばならなかつたのであり現実的、政治的な判断としてはやむを得ないものであらう。

我々はもう小学生ではないのだから、言いたい事は言いたいし、やりたい事はやりたい。この基本的な権利を守る機構として駒場の自治会がある。現在、駒場の自治会は矛盾が山積されているが、自治会は人の為にあるのではない。我々が今、学生団体として発言する場は東〇自治会をおいてほかにないのである。この自治会を「民青」の一言で片づけても何の得にもならないし、そもそも、アంతが大将なのである。

この間の解放派の問題は、我々に東〇の自治とは一体何なのか？という問を我々につきつけている。今こそ解放派の問題、警察の問題、駒場の自治の問題を各自が自己の問題としてとらえ返し、討論意見交換を活性化していき、新たな東〇自治会を創つてゆく時があると思つて。

## 雑感

日世田 俗人

以下述べる事は、今回の事態に遭遇し、執行部系の集會・デモに参加することを通じて感じた事、考えた事の若干の覚え書きです。充分な論理的・一貫性に欠いていゝと思われませんが、読者の皆さんの批判をお待ちしています。

僕のいままでのまた将来にわたる行動の指針からいへば、結論的にいって、現在の民青系自治会執行部の人々とある緊張関係を保持しつつも、行動をもたにしてきたしこれからはもちろつていゝこととです。ある緊張関係を保持しては若干の留保付きでという事であつて、何故かごとコミットができないのかと言えは多くの、多少物事を深く考えている人が言うように、まず暴力一般という概念を取りだして語ることはできないだらう、という争があるからです。もちろんそれは正当な抵抗権の行使において物理的な「暴力」を使用することもありうるわけだし、いわゆる「暴力」とは「状況語」なわけですから、ある集団に「暴力集団」なるマイナスシンボルを附与し、封じこめ、あるいは排斥する事は、党派の論理を優先させ、かつ「一般学生」の安直な日常性に訴えた、ある意味で危険なものだからです。そしてあの「学外集団」ということは、これもあまりに安直に使用しすぎるのではないか。「学外者」だから「出ていけ」という論理は成り立たないことは、明確だと思ひます。東大の学生の「排外」意識に訴えた軽率なことばだらう。また「学外殺人

者集団」なる名称には、彼らがまるで、僕らとは異次元の、すなわち「狂人」でもあるかのようなニユアンスが感じられます。確かに彼らが一方的に話し合いの姿勢を拒否し、物理的「暴力」、手段に訴えて来た以上仕方のない事はそうなのですが、やはりギリギリのところでは、彼らと僕らと同じ人間であり、説得の可能性も残しておくべきだといえないでしようか。

しかしながら、ということになります。以上の事は僕は結構正論だと思ふし、反民青系の「活動家」の人々がいうことでもあるのですが、確かに民青系の人々の行動に対する一定の批判になり得ても今日の事態に対して何も言つた事になっていない。特に社青同解放派の人々がひきおこしている「異常な状態」に対して何ら積極的な回答を与えてはくれないし、自らの姿勢に対しては余りに無批判的であるからです。「確かに君らのいう事はもつともなところがあるし、機動隊の安易な導入に対しては批判の余地がある。しかし君らは今回の事態に対して何らかの積極的かつ主体的な解決の姿勢をとっていないじゃないか。君らが民青系の人々の言動に納得できないならば、それをあの事態の中で提示し乗りこえつつ問題の解決を図るべきであつた。それをやらないで、おいて機動隊導入批判などできないだらう」と僕は反民青系の人々の一人に意見をぶつけましたが彼は、今回の事態は決して異常なものではない、民青系諸君の「アジテーション」によって故意に事態が誇張されたといつてしまえば、民青系諸君と解放派との「党派斗争」にすぎないといつた話でした。やはり随分バカにした話だといえないでしようか。まず駒場寮に關していえば、実際、乱斗が起つたわけだし、あのまま駒場寮委員を始めてとして多くの学生が駆けつけ抗議を行なわなかつたならば事態はますます拡大したといつていいだらうと思ふます。寮生の生活を最低限守るために決められた寮則を、公然と無視し「不法」占拠を行つた抗議にいけばなくられる、といった事態を、正常だといえないだらうと思ふます。しかし、両派が多数で武装対峙し、それを

前にして、集會が何の効果もちえなかつた時、確かに虚脱感とともに、一抹の疑念がござしたことも確かだ。が、しかし、だからといって沈黙することは許されないだらう。そして、両派に対する駒場の学生である人間の当然に行われるべき抗議までにも党派性をよみとり、民青の人々の過大なアジテーションと見ることはできないと思ふます。民青系の人々に対する不満と、解放派、革マル派の危険性として、後者を圧倒的に重く見るべきだと思ふ。彼らに対して沈黙してしまふことは、彼らの駒場に対する支配権を公然化させてしまふ事につながる。ひいては（例えば早稲田大学のように）彼らによるスターリニズム的支配（まづたく彼らの方がスターリニストという名称を与えるのにふさわしい。）をまねくものにもなるのだと思ふ。

両派が武装対峙する同じキャンパスを、アベックが楽しげに歩いている。こんな光景が、この「異常」事態の中でも常に見られた。依然として学生の多くの部分は学内の状況に無関心のままだ。しかし、そんな巨大な日常性でもいつたものに、そう簡単に異を唱えることは僕にはできません。人々はそれぞれの内面、個々人の一回性を有して豊富だからだ。だからたとえ駒場寮の売り上げのびないからという理由で、自分の日常生活とは多少とも異質なものに対して排除の理論をもちだすといふのも、完全には否定できない。自分の私生活への「愛情」から出発するのでなければ恐らく何でもウソになつてしまふだらう、という感じが僕にはあるからです。しかし、それでは余りに即自的すぎはしまいか。この事態をバネにして、大学の自治をとらえなおすことから始めて、自己の存在を見つめ直す、今はそういう意味でよい機会だといえないでしようか。まづもつて「売り上げのびないから」といふ事。前号の恒河沙にもあつたように、現在の駒場寮は「学問・文化の祭展」という面ももちろんありますが、多くの模擬店を支配しているのは「モウケの論理」だといふ気がします。いわば資本制の物神化の網にからみと

られてしまつてゐる。とでもいつたところでしょうか。そして「守るべき大学自治」、「東大生の良識」これらのごときは、その意味あるいはそれに関する自分というものを不断に問ひなおしてこそ、真に意味あるものとなるものでしょう。それが無反省的に前提されてしまつてゐる。あるいは前号にも指摘があつたとおり、「暴力反対」、「大学自治を守れ」等々のスローガンのもとに行動することによつて、その陥穽はますます拡大されていきます。こういつた即自的段階をつきくずす契機、それが、事態をへる中で生まれたことも確かだと思ふ。恒河沙の企画もこんな意味で随分意義あることだと思ふ。「排除の論理」確かに学外に排斥したところで事態の本當の解決にはつながらないだらう。そしてまた「デモクラシイ」の理念からいつたら（そして僕はこの理念を尊重したいと思ひますが）極右も極左も、あるいはこの理念を否定する者までにも、政治的自由を最大限許容することが求められると思われ。にもかかわらず「出ていけ」といつたスローガンに一定の有効性があると思ふのは、もちろん解放派に対して恒常的な拠点を許すことが、事態を非常に悪化させるということがありますし、こちとらの日常生活を破壊するものには反対するといつたこともありすが、やっぱり彼らの言動自体間違つてゐる。というよりも許せないという事があるからです。僕は去年の駒場祭前の案「武装解除」に参加しましたが、彼らとの口論の際、「君たちは障害者の解放云々をいうけれども、人殺しを平気でやるような神経でもつて本当にそんなことがでさるのか？」となじりましたが彼らの解答は「人を殺して何が悪いのか？」でした。確かに、人命の尊重などは、歴史相対的なもので、理ツメに考えていけば随分あやしいものですが、最低限こんなことはいえらると思ふ。やはり「人を殺す」ということは、それを最小限に止める内的緊張関係がなければならぬ。それを失つて「人を殺して何故悪い」と解きなおつてはダメだ。そこからはもう何も生まれてこないだらうということ。そしてさらには、意見対立の解決の道は、理性的

（これも随分曖昧なコトバですが、厳密に定義しようと思つたらできないことはいくらもありません）な討論の上に開いておく可能性を残すこと。威嚇やら、物理的暴力へまづは一般的な意味で）ましてや、他の人間存在の抹殺にゆたわてはいけないう事です。この点で彼らは失格でしょう。話はそのますが、現在の日本において、何らかの変革主体を「志す」者は、右の条件を欠いてはならないのではないかと思ふ。ブルジョワ社会においてすら上記の条件は（不完全とはいへ）保障されているわけだし、過程において右の条件を否定する論理によつて自己正統化をした結果に悲劇的なものが生まれることは歴史的に明らかだからです。

大学の自治によつて大学の内部は、治外法権が保障されるわけではないが、また完全に国家の法体系に組みこまれるわけではない、ある特殊な規定性を帯びたものなのでしょう。「真理の探究」を唯一の結節点とし、それ故、異なる価値体系は許容する、さういつた組織であり、だから本来的にそれを否定するものは許されない。武力でもつて一定の価値観外に立つものは弾圧するなどということ、大学にはそもそもあり得ない事なのです。これはブルジョワ法学的な地平に立つた話で、産学協同とか学生同盟員規定までいろいろと議論はあるのでしようがそれは一応置くとして、とにかく僕のいいたいことは、彼らのような赤裸々な demands に対し、大学はもとも無力な存在なのだということ。無力だと開きなおればそれまでなのだが、賢則やら一定の良識に従つて共通の了解のもとに、それを逸脱する者に対しては集団の力で制裁を加えることも許される。民青系の人々がいう「全構成員自治の力で云々」という言葉もあながち間違ひではないと思ひます。でもそれも限られた範囲の話であつて解決不能な問題、特に一般刑法に抵触する行為に対しては権力の導入を求め、自治への介入に対しては警戒しなければならぬとはいへ、仕方がない事だと思ひます。ごく現実的な話にもどせば、解放派の占拠、これを解除させることが第一義的に重要で

あったということが出来るでしょう。彼らに活動の拠点を与えてしまふ事、これが革マル派による大量動員をもつた介入に口実を与え事態を大きくしてしまふわけです。(そうでない限りは、彼らは一応、交互に現われてくれるようですから) 今回の状況をどうだつたか、やむを得ない、まあ妥当だったという意見です。しかし、もし学生にとって守るべき自治があるのだとしたら、それに対する何らかの共通な了解が求められてしかるべきではないだろうか。先にも述べたように、この事件をきつかけとして、大学の自治といったものにもっと根源的な思考がなされなければならぬという気が致します。

今回の「異常」事態を「痛み」としてうけとめ、そしてまた自らがこの状況を主体的に切り拓かねばならぬ立場に自らを想定してみても、できる限り誠実に生きるとしたら、ぼくには以上のような方向にそつて行動していく他ないでしょう。民青系の人々の誤りあるいは党派性が優先していると思われぬ点を自覚あるいは指摘しつつ、いわば「内側にあつて内側を越える」両派に対して批判を加えていくというのが今考えられることです。

## 「暴力」と「反暴力」のあいだ

岡本 啓文

「暴力一掃」というのは、入学以来我々が幾度となく聞かされてきたスローガンである。このスローガンの主要な担い手である民青系の人たちは、左翼諸党派(日本共産党以外の)はすべて「暴力集団」、反日共のノンセントも「暴力集団」、「暴力」は権力を抹殺してより大きな「暴力」を引き出す、資本主義が悪いのも「暴力と抑圧」があるからで、社会主義になれば「暴力」はなくなる(ここで「暴力集団」、「暴力」といふ「」をつけたのは、その概念規定がどうもよく理解できないからなのであるが)、といった具合に

見事な一貫性をもって「暴力一掃」を叫んでいる。しかしながら、この二年ほどの向の駒場の状況を見ても、こうした「暴力」に関する議論はいつころに進展せず、党内諸団体の対立関係には改善の糸口さえ見られない。この辺で紋切り型の「暴力一掃」の主義に根本的な反省を行なわねばなるまい。私はここで、いくつかの視点から、この問題への再考を提起していこうと思う。

### Ⅰ 駒場襲撃前後の事態について

民青系執行部諸君の、駒場襲撃破壊の危機、という宣伝とはうらはらに、解放系・革マル派が学内に留まり続けたにもかかわらず、駒場襲撃は「破壊」されなかった。これはごく当然のことだろう。まず第一に、解放系・革マル派は自らの駒場襲撃企画を実行しにやめて来たのであり、その彼らが駒場襲撃を破壊する方針を立てて行動するななどということはあるはずもない。また、仮に破壊を目うんだところで、数千人の学生の参加する駒場襲撃をどう簡単に破壊できるはずもない。もし、駒場襲撃中止、という事態が起こりうるとすれば、それは状況を利用した当局の一方的弾圧が実施され、また、学生によつてぼつとやる気がなかった場合だけであろう。明らかに「駒場襲撃破壊の危機」など存在しなかったのだ。むしろ駒場襲撃にとつて妨害となつたのは「暴力反対」のデモおよび集会のほうだ。た、というのが事実である。

しかも、「解放系の暴力」なるものも、よく考えてみると、きわめてあやしいところがある。当時、解放系に対して先に手を出した(殴つたとかけたとかそういうことではなくて)のは明らかに民青諸君のほうであり、確かにあからやまな暴力は振るわなかつたにせよ、「ますます狂暴化しています。野獣と化しています」などとくりかえし、殺人集団は出ていけなどと言ひ放ち、そうした中で解放系のいる部屋へ大挙押しかけた彼らのほうがより攻撃的であつたのは否定しようのない事実である。すなわち事実経過としては、「

暴力反対なる主張をかかげた行動が対立を柔化させ、事態を混乱させ、暴力を誘発した、というほうが正しい。こうしたことのくり返しの過程で「暴力の事実」が積み上げられ、巨大なフィクションの構成物としての「暴力」なるものが形成されてい、たのだ。

## II 民青系執行部の態度の向題

しかも、民青系執行部の諸君は、「暴力」の問題に関して一貫して不誠実な態度をとり続けている。反日共の活動団体のひとりがたまたま誰かを殴れば、団体すべてが、「暴力集団」であることが実証された、と考える。「暴力集団」のやることには、その内容が何であれ反対する。自らの暴力はすべて「正当防衛」として居直る。「暴力集団」を追い出すためならば、警察とも当局とも手を握る。

そして、「暴力一掃」が実現しなければ、「世論のもりあがり」が足りない、と、自らの誤りの可能性をはじめから除外して考える。反対意見が出ると、「暴力が自由にふるえる東大にしよう」とたくらんでいる「学生の意見だ」と勝手に解釈する。これでは議論が前進するはずはない。

## III 「暴力一掃」論の党求の本質

民青系諸君のいう「暴力集団」という概念規定は、実のところあまり一貫したものではない。すなわち、彼らは一般学生向けには「暴力集団」と言うが、自分らの機関紙では「ニセ左翼暴力集団」と言い、さらに共産党の公式パンフレットには「トロツキスト暴力集団」という語が使用されている。これらが同一の諸集団を指していることは言うまでもない。つまり、彼らは一般学生には「暴力に反対する」という一点のみで宣伝し、参加を呼びかけていながら、その裏には「トロツキスト」など、日共以下の左翼組織を解体しようという一貫した意図（少なくとも幹部候補生たちは）を持ち、一般学生をその党求的意図のために利用しようとしているのである。

暴力反対運動」とはまさしく党派間の争いの一形態。しかも、党派斗争を、その本質をかくして自治会運動上の課題として表いながら押しすすめる、という悪質な運動形態なのである。

反日共系の左翼諸党派として、無意味な暴力を好むはずもないし、ましてや民青系諸君の言うように暴力を主要な目的とする団体などであろうはずはない。ただ、日共と主張を異にし、日共とは異った方針・形態で運動をすすめているというだけのことである。もちろん彼らが暴力を用いることのあるのも事実だが、そのことは本質的な対立点ではなく、むしろ日共のほうが「暴力一掃」の論理をもって、理論上・運動方針上の論争を回避している、というのが実態なのである。

## IV 暴力一般を否定できるか

以上で「暴力」をめぐる問題点はかなり整理されるのではないかとと思うが、そこで究極的な対立点として残るのは、暴力一般を否定できるかどうか、という問題である。

私は、暴力一般を否定することはできない、と断言してさしつかえないと思う。確かに暴力なしで現実の社会問題がすべて解決できるのならばそれにこしたことはないが、議会制民主主義が形骸化し、司法が反動化し、その一方で社会の矛盾が激化し、さきさまの問題が噴出している現在、権力も金もない我々市民としては、情況によっては坐り込み（民青系諸君の言う「不法占拠」）、悪質権力者の追究行動（「つるし上げ・暴行」）などを含めた運動を行なうことはむしろ必要なことではないか。例えば極端な場合、軍国主義・独裁の到来、ということになれば、圧制者に対して暴力をも含めた出来る限りの抵抗をする可能性を留保することは当然であろう。でなければ、権力者の側の暴力を放置して、市民の権利を自ら奪り去るしかない。いざれにせよ、自分のおかれた状況とはかかわりなしに「暴力反対」の大前提を観念的に先行させるのは誤りであり、与

えられた状況の中で弾圧に抵抗する市民・学生の選取する運動形態の可能性のひとつとして暴力は承して全否定されえない、ということである。

X X X

いろいろ試みて、これまでの「暴力」をめぐる議論はただ攻撃的なばかりで、対立の本質を見きわめ、我々のおかれた状況のなかでとらえるという観点が欠落していたと言つてよいだろう。全学学生、特に民青系諸君のこの点への反省が望まれる。

## 暴力集団に対する一考

山本 長史

### (一) 暴力集団の行動と目的

昨年の11月20日以来、解放派・革マル派はこの駒場のキャンパスで様々な策動を行つて来た。それは現在でもなお続いている。彼らの具体的な行動は自治会とか寮委員会のヒラにある通りであるが、こゝでちよつと注意してもらいたい事がある。

まず第一に、解放派の暴力が日を迫うごとにエスカレートし、又その方向も変わったということである。方向が変わつたというよりも、本質的な方向が明らかになつたという方が適切であろう。最初に対革マル派という「ボーズ」をとり、一般学生に対しては暴力を控えていたが、学生の間には「反暴力」の世論が高まるにつれてその暴力の鋒先は抗議集会に参加した一般学生にも向けられるようになり、1月10日には寮自治の一翼を担う懲罰委員会の破壊を行なうに至つている。この日は実に11人もの学生が救急車で病院に搬送込まれたのである。

第二に、革マル派は駒場のキャンパスでは比較のおとなしくしているが、他大学では自治会の暴力支配を行つてゐるという事である。

その大学では革マル派を非難するような集会を開けないのはもちろんの事、どのような集会に対しても革マル派のメンバーがその内容をチェックしているであろう。革マル派とは、このように言論の自由を束縛し、又学外では反対勢力の中核派を襲撃するような暴力集団なのである。

以上の二点からもお分かりになると思ふが、第三に注意してもらいたいのは、解放派・革マル派の目標はこの駒場のキャンパスに拠点を築き、自治会の暴力支配を行なうことだ、という事である。神奈川大学の自治会は解放派に牛耳られてゐるそうだが、自治会費はほとんど解放派に流れてゐるという話もあるし、解放派が使つていた工具箱には「神奈川大学自治会、禁持出」と書かれていた。そういう金銭的・物品的問題も重大だが、最も問題になるのは、言論の自由・学問の自由が束縛或いは剝奪されるという事である。そうならば長い間培れてきた伝統は崩れ去り、学生の勉学意欲は激減してしまつたろう。我々は絶対にこのような状態を許すことはできないし、このような状態をひきおこす解放派・革マル派の態度も断じて許すわけにはいかない。

### (二) 警察と自治との関係

この間解放派が行なつて来た事(人に暴行を加へる事・学部の退去命令を無視して居坐る事・寮委員会や学部の封鎖してある部屋に勝手に入る事)は、明らかに社会的犯罪行為であり、現存の法規に抵触する以上いくらキャンパス内であるからといって、そういった社会的犯罪行為が許されるわけではない。そういった意味においては、警察が学内に入つて来るのも已むを得ないわけである。しかし、学部の再三の要請にもかかわらず出動をしぶり、また中途半端な取り締りしか行わなかつた警察の態度は非難されるべきであるし、又、実際に警察が学内に入つて来た時には我々は整然と監視行動を取らなければならぬ。

そもそも警察が学内に入つて来るということは非常に異常な事態であり、本来あるべきではない状態である。このような異常事態を生み出した暴力集団に対し、僕は異常なまでの憤りを感じている。

ここで警察と大学の自治と暴力集団の関係について考えてみたい。今、警察が学内外に於て暴力集団を徹底的に取締るとしよう（警察の学内常駐を意味するのでは決してない）。そうすれば、解放派だつてそう簡単には暴力をふるえなくなるはずであり、自分と相入れない考えを持つてゐる人に対して、暴力ではなく言論を武器として攻撃をしていかざるを得なくなるはずである。そうなれば、大学の自治はほとんど民主化が進むはずである。ところが逆に、警察がいかがんな取り締りしか行わない解放派・革マル派等の暴力集団は学内での悪行を恣にするであろうし、そうなれば大学の自治は暴力支配の危機に瀕するわけである。つまり警察がきちんと取締るという態度を常に示していれば、学内暴力は起らないようになるであろうし、その結果警察が学内に入る必然性がなくなつてしまひ、大学の自治への警察の介入といった危惧もなくなるであろう。

### (三) 今後我々はどのようにすればよいのであろうか。

まず第一に、我々は『反暴力』の立場を貫き、『反暴力』の世論を全学に広めたいかなければならない。この駒場のキャンパスの七千の学生が『反暴力』の立場で立ち上がったならば、たかが数十人の解放派に何かできるというのだ。孤立して何もできなくなるに違いない。そついで、世論を高めるためには、全学のクラス・サークルで様々な角度からの討論が行なわれなければならない。（そついでと本当の意味での一致点は生まれないのである。）

第二に警察が取締らざるを得ないような状況を作り出す事が必要であらう。たとえばどんなささいな暴力に対しても被害届を出すとか、学外にも広く事態を伝えて社会的な声を作つてゆくとか……。いろいろな方法があるとは思ふけれども、とにかく警察が取締らざるを

得ない状況を作り出さないと、解放派などの暴行を押えることはできないのではないだろうか。いくら僕たちが『反暴力』の声を張り上げたところで、僕たち自身『反暴力』と同時に『非暴力』という立場に立つてゐる以上、あつては暴力集団に対しては声だけでは立ち向へないのである。

今、思いつくのは以上であるが、これらはいずれも当面の対応策的な性格のものであり、本質的な解決策とはいえないと思ふ。以上の二点を当面行いながら、我々は本質的な解決策を常に模索していかなければならない。あらゆる機会を利用して全学で討論を行い本質的な解決策を求めていかなければならない。そついでと激しい闘争とつがの間の平和が交互にやつてくるという非常に好ましくないパターンが繰り返されることになるだろう。そうならない為に、全学の各人が問題意識をもつてこの問題を見つめてほしい。絶対にそついなければならないのだ。

### (四) 最後に

くどくどといろんな事を言つてきたが、結局僕が望んでゐる事は『コマバから暴力集団が消えてしまふ事』、『この世から暴力集団が消えてしまふ事』なのである。別に解放派や革マル派の考え方に介入しようだなんて気は全くないが、自分の考えを通すためには手段を選ばないという態度には断固反対する。あまり思考能力が進化しておらず、ほぼ本能にのみ従つていた原始時代ならともかく、現代のように人間の思考能力の進化がある程度認められる時代において、あのような悪行を行う事は、常識を逸脱してゐると言わざるを得ない。自分の主張が正しいと思ふのは勝手だが、その正しさを論理で証明するのではなく、（論理で証明できないからかどうかは知らない）暴力で押し通さうとする態度は断固非難されなければならない。実際、ある解放派のメンバーは「学生の支持なんか得られなくてもいいんだ」と口走つており、そんな奴らに、この駒場のキャン

パズど好き勝手な事をやらせるわけにはいかない。  
全學・全国の学生と連帯して、暴力集団を学園から、いや日本から一掃してこの国ではありませんか。

状況にて。。。

LIEDRIAN

内ゲハ三派は誤る天使である。純粋に尖鋭化した政治的情熱は破壊的なる必然性を持つ。社会に確固たる信念を深く根がさつとす時、曖昧な態度は許さぬ。核心をめざして一直線に突っ走るフアンティシズム、それはより暴力的、より独断的、より排他的になることにより、牙を、心の固い、表面の滑らかなる光沢のある結晶に仕あげることを欲する。

あまりに沈練さいてしまったその牙は、味を試すべく獲物を求め呻吟する。ところが現実には彼らの期待する程の皮膚の張り、肉のたゆたさを所有する敵など、何処にもいないのだ。そこで彼らのドラマは内攻し、陰湿に腐蝕し始めるのだ。

彼らは腐るくらいなら死を選ぶ。死を完全ならしめる介錯人は、腹を同じうする極左である。死んで彼らはその純潔の証しをたてこる。カバ棒と血とヘルメットと色彩られたドラマは暗いエロティシズムか匂うようだ。

はんばな天使は悪魔に必ず敗北する。そして敗北することを自ら望んでいふことを知りませず彼らは攻撃する。僕らにできるのは、折れこしま、たかハ棒で、彼らの墓碑銘と為すことだけである。

しかし、彼らを眺める時と同じひややかさをもちて自己を批判してみるがよい。何も無いのじゃないか。デザインの結構いけるシャープペンシルってことろじゃないのか。

何も知らないのじゃないか。そして知ろつともしていいない。天使に憧れることも地獄に墮れることも無い。プラスチック製のしとり

ツクの中で明るい瞳と、笑わぬ笑いを与えられただけだ。

原点に立ち戻らねばならぬ。古之の哲学者が空を仰いで黙想する時の神秘、異国と存亡を賭つときの血のたぎり、火にはじめられた時の怖えと火を管理できるようになった知恵、そして、本足の初めて立った時の不安と雄々しさに。

時代が閉塞しているといわれる。が、本当に塞がれているのは僕達の感性と創造力である。  
(教育学部進学内定)

嗚呼 民青殿

坂井 圭

まず年頭にあって一言、ドツボに救いはあるかという恒河沙的疑問だが、よく個人的に言えれば救いなどあるう善がなく、今年も正月から激動の中にまぎとされ、忙しいと評判な管の教養学科からはや落ちこぼれている。三、四日前には見田宗介氏から「あの芝居をアトシアター新宿でや。た意気を買おう」と横辞をいただいた芝居を打ち、駒場から朝帰りをしてきた所である。登校してくる皆様を横目に井の頭を逆方向に乘ると奇妙な感じがする。実際一週間程駒場を留守にすると久々に戻ってきて何だか異様だった。その向どこに居たかという。これは他大学を歩き回っていた。internationalならぬ intercollegiate を実地でやっていると、許されないかなあためか。

ところで、近頃の駒場の状況である。駒祭前後からの寮付近のあわただしさ、わたしが初めてそれを観たのは11月21日の事だった。我がサークルも例にもれず駒祭準備で忙しく、部屋は明窓17Bという事態であった。角材と、階段にまではみだしてきている占拠派たちをかきわけ部屋に到着する。午後一時ごろ学部当局から退去命令が出たらしい。二時前から集団抗議行動にはいる。当然授業はサボって観ている。恒河沙のおとうさんはこの世にあらぬ様な複雑な顔

まして腕組みして観ていた。四時前にバリケード突入。後日に比して民青のアジはこの日が一番激しい様に思われた。彼らは狂暴化しています。我を忘れていたのは民青の方ではなかったか。追い出されてきた人たちが語ろうとしているのを、わたしは聞きたかった。決して弁護しているのではない。民青のアジ暴力が虚しく聞こえる。後日に革マルが来た時もそうだった。革マルの論法が巧妙な扇動であることはわかっているのだ。ただやはりそれに対する納得のいく説明と方針を語って欲しかった。ただ、扇動にまどわされず冷静にと繰り返してシムプレヒコールを続けるばかりではなくて、実際あの時のシムプレヒコールがどれだけの意味を持っていたのか。解感デモクラシイ、共同心のおもしろさに酔っているような場合だったのか。

そうしてあとから彼らは、〇百人の団結による抗議集会の成功と言って、あれら集まった人々を民青宣伝行為の一環に組み入れてしまうのか。

集会を横目で見ながら行き過ぎる者達を、シムプレヒコールにあえて手を降ろし笑って立っているわたしを、無自覚、無用心と彼らは言うのだろうか。尤も、銀杏並木を通りながら、声に立ち止っては、何だか後ろめたさを感じてしまう私なのだが。

「集団抗議行動」に夢想のような憧れを感じなくなつてすいぶんになる。と同時に「大学自治」という政治現状にうんざりするようになってからも、一番大きな理由は、その偏狭性だった。堅固な組織のかたまりだった。現実にも多くの政策をこなし業務をこなしてゆくにはそれはしっかりとした組織の方が良いのだろう。だがそういうテクノクラシイは、日本の行政の縮図を見ている様な気がしてうんざりする。それが民青支配であろうと自民党支配であろうと、一方では自民党支持が増え、他方では民青自治会が支持を得続ける。東大とは何でも良いから保守であれば良いのか。立派な政策をどこもかかけるけれど、金と実行力があればそこに全てをゆだねられる

のか。立派の立派なタタキ文句を見てもどうしてもそれが体裁ばかり美しい常套句でしかないと感じざるを得ないのだ。政治的な、或いは経済的な状況は確かに我々にとってまがいもない現実だろう。だがそれが我々の日常から遊離しているときか思えないのは何故か、もっと他の、我々の現実がある筈なのに、それは民青の、解放の、革マルのアジビラには見られない。

セクトしかないのかな——一介の駒場の学生が、どの組織にも組み込まれずに、状況とわたりあってゆくことは不可能なものなのか。いろいろと東大以外の学校に遊びに行ったりして時に感じるのは、駒場の政治状況と文化状況との完全な分離だ。別に文化大革命でもやれといっているわけでは全然ないけれど、実際私達が一番近い現実といったらそれはもっと文化的なものであるように思える。

某先輩が、歌と踊りの民青と自治会を評していたが、実際空元気のシムプレヒコールばかりが連帯の手段としてしか考えられないのだとしたら、虚しい。

駒祭の準備の最中で正内前で集会を行なっていた時、傍らでは全然無関係にバンドが音合わせをしていた。そういえばシカゴが昔、マクガヴァンの応援コンサートをやったのだな、などと何となく思い出し、80年代のいまさらシカゴでもないけれど、それにしてもいまだにこんな事を思い出すとはわたしもそれなりに古いな、と苦笑した。

(53) Ⅱ・教養達

誠に突然ですが...

謹賀新年・時代錯誤社

目黒区駒場 31811 東大明寮 175 気付

# 解放派の皆さんへ

未久須上田場

拝啓、解放派の皆さん。寒風吹き荒れ、青いヘルメットやニットの帽子は、もう駒場生協周辺の一つの風景として定着した感じもありますね。お変わりありませんか。

昨年四月、オリターから、ヘルメットの色とセクトの名前を教えて頂いてから、一番近しくお目にかかれたのが皆さんでした。以来十ヶ月が過ぎようとして、今でも、残念ながら私は皆さんの向題意識、主張等をよく理解していません。ですから、私は全く手前勝手に言わせて頂けば、皆さんのことをあまり嫌ってはおりません。ただ、全然無意味(いや、無意味とはいえないかもしれませんが)でも私には納得できません」と思われる暴力を使うということを除いて。

本当に勝手な推察?をすることをお許し下さい。というのは、私は皆さんを見ていて、内面的統一を必死に追い求めている。自己の内面と激しく戦っている。そんな風に感じることが、しばしばあるのです。こんな風に書いたからといって、私が皆さんを甘ちゃんだと思っているなんて決して受け取らないで下さい。更には恥ずかしながら、私もその点については皆さんの同志なのです。刃分、学習などは相当痛んでいらっしゃるのかもしれませんが、それでも自分の中の不安、そして時折變て来る空しさ、そんなものを拭い去ることは中々困難なことだと思います。では、それを一体どのように解決していくのか。その方法に暴力が用いられているとしたら、(そして私にはそう思われるのです)納得できないのです。暴力による革命が確乎たる理論によつて裏付けされるのかどうか、そんなこ

とは私にはわかりません。でも少なくとも皆さんの今使っている暴力は、裏付けされた類のものではなく、自分の内面を押し隠すための暴力、自己陶醉(いや、刃分、そういう自分に気がついていらつやることと思えます)に宛えます。たまに、酒を飲んで大トラになるくらいなら、可愛げもありますが、人に傷をおわせたり、まして殺したりになると、どうも私の思考回路では処理しかねます。

皆さんの社会を変えたいという気持ちか本心なら、もっとしっかり自己を見つめ直して下さい。暴力に一時的なゲロを求めるようなことはしないで下さい。他にもっともっと自己統一を進め、変革の真の原動力となつていくような方法があると思います。私だって、社会変革いや革命を頭ごなしに否定するものではありません。しかし、私は当面の向、道を学問と、地道な実践活動に求めていくつもりです。

何か勝手に展開してしまつて、私はピエロになつてしまつたかも知れませんが、でも最後にこの言葉を贈らせて下さい。ウェーバー自身はどういうつもりで言ったのかよく知りませんが、私の心には強く響きます。

「どれだけ耐えられるか、それを私は知りたい。」  
それでは、失礼なお手紙をさし上げることをお許し下さい。  
さようなら。

一九八〇年 一月七日 外し

## 現学館委員が明かす

### コマバの色んな話

中村

本日は匿名で書きたい記事なんですが、内容を読めば分る人には一目で誰が書いたか分かつてしまうので、予め正体を明かしておき

まずと、オ32期生協選出学館委員で、31期、32期の学館運営委員で、79年度生協総代（理Ⅱ）で、58期、59期自治委員で59期常任委員で58期学友会総務で59期学友会評議員で、オ30回駒場祭委員である人間です。

という訳で、千二百字もの原稿の半分は肩書きだけで埋まっ、てしまいましたが、最初に書くのは駒場祭以来有名になつた解放派の話にしましょう。何しろ駒場祭委員は一人残らず殴られた。という位すごい連中でした、こんな記事を僕が書いた事が分つたら、又ちろ人で困んで僕をこづき回すんじゃないかと思いますが、多分彼らは教養程度が低いので恒河沙なんか誂んぞないし確信して書くんですけど、とにかく明察阿呆の騒動の時、僕は先頭に立つてバリ解をやったんですが、いや仲々破壊的欲求が満たされて面白かつたですよ。まあ階段で半分逆さぶりみたになつたり随分ひどい目に会つたことはさておき、後で考えたらおかしかつたことは、連中の殆どが極悪暴力分子という顔をしてるくせに背が随分低いんですよ、本当に。僕の顔を見上げて（本当に見上げてですよ）襟首をつかんでつめよるんですよ。流石にあの時はパニックでも笑う余裕なんかありませんでしたが、その後再三連中につめられた時はとうとう笑つてしまいました、「こいつ不真面目だ」という訳で又殴られてしまいました。学友の皆さん、背が低くて陰險な顔付きの人間にはくれぐれも御注意を。

さて、二つ目の話はオソマツKFCの一席でも。とにかくKFC、初めは結構やりましたが、青解が来たらからというものの全く無展望に民青同盟系の指導部に盲従した人が殆どで、色々企画の皆さんに御迷惑をおかけしたと思います。委員の一人として心からお詫びします。とにかくみんな自分の仕事だけぞ疲れ果てていたものだから、頭の回転が異状に低下していません。同盟系のやり方が間違つてるとまでは言いませんが、少くとも一定の事務処理能力のある人間を残した上で、KFCから人間を徴収すべきでしょう。それに

委員長の沢大君（現自治委員長です）は實際は身体が弱くて到底任務を全うできる筈もないのに、政治性だけで委員長にすえられてしまつて、気の毒な様な……の様な。そういう経緯もあつてKFC規約問題も充分な討議のないまま同盟系の案に押し切られてしまつたんですが、あの規約案、無意味とは言わないまでも無能なものだつたことは御存知の通りです。それに制定方法も全くナンセンスで、学館委員会規則を参考にしたなどと言われては、学館委員の一人としてムカッ腹が立ちますよ。あ、もう千二百字だ。

解放派諸君を批判するのはいいけれど

飯田民男

昨年十一月二十日深夜に唯物論研究会、社青同解放派の諸君が明察阿呆にバリケードを築いて以来、何やら駒場は「騒がしい季節」を迎えている。この間、解放派の諸君はとにかく人をよく殴つた。このこと自体は決して許されるものではない。彼らなりの「殴る論理」はあるのだろうが、それでも彼らの「殴る」行為自体は許せない。勿論、筆者は「全ての暴力に反対する」というように暴力一般を否定する気はさらさらない。しかし、彼らの無益な暴力を肯定することは到底できない。

ここで、一つ確認しておきたいことがある。筆者は人に殴られるのは絶対にいやである。そして、人を殴ることもできるだけ避けた。また、人が殴られているのを見るのも実にいやなことである。この素朴な感情だけはどうしても確認しておきたい。

さて、どうして筆者が解放派諸君の「殴る」行為を許せないのかと言え、やはりその根拠は基本的には今確認した「素朴な感情」にある。だが、「冷静に」彼らを批判しようと思えば、それは充分にできる。何よりも彼らは粘り強い討論をしない。彼らは、自分と

意見の異なる者、自分と議論の上で同じ土俵に立つとしない者に對して「平和的な」討論を根気強く求めることをしない。そして往々にしてそういう者に対して「手を出す」のである。これは、相手との自由な意見の交換の場を余りに早く放棄し、実力行使により相手の自由な発言の場を一方的に封鎖することであり、安易に許されることでは決してない。たとえ相手が討論を拒否してきたとしても、相手に再度討論を求め努力を粘り強くすべきである。こうした努力を怠ってきた解放派の諸君に、それを率直に自己批判することも望みたい。

ところで、「手が早い」解放派諸君を批判することはたやすいが彼らに手を下させる方はどうなのだろうか。解放派諸君に対する批判はこのくらいにして、これからは、彼らに対する「抗議行動」の先頭に立つてきた自治会執行部、及びその大部分を占める民青同盟系諸君（以下、便宜上「民青系諸君」と略す）の行動を批判的に論じていきたい。

まず第一に、民青系諸君の解放派諸君に対する態度である。彼らの行動を見てみると、「解放派諸君との話し合いなど到底あり得ない」ということを大前提としているように見受けられる。解放派諸君が駒場に現われれば、解放派の宣伝カーの横にとつともなく大きなトラメガを二つ置いて「学外者殺人集団解放派はたち」外に立ち去れ」とアジリ（この「学外者は立ち去れ」のスローガンは実は、大学を閉鎖的なものにしかぬないとんでもないものだ。彼らの「大学観」がはからずもあらわれれているところであろう）。たまに「一般学生」大衆の結集が得られれば「暴力一掃」「青解出てけ」のシュプレヒコールをあげる。民青系諸君が解放派諸君に、彼らとの同等の立場での討論を求めたことが一度だってあったらどうか。解放派諸君に公開討論を申し込んだことがあったらどうか。答えは「否」である。解放派諸君に対して「殺人者暴力集団」という彼らの全存在を否定するようなことだけを言い、それで彼らが手を出せば

「殴られた、殴られた」と騒ぐだけである。勿論、筆者は解放派諸君の「殴る」行為を許すものではない。しかし、筆者には民青系諸君の態度も同時に許せないのである。彼らの態度に人間を人間とも思わないようなところを感じるのには筆者だけだろうか。解放派諸君の姿を見れば「出ていけ」と言う。まるで解放派諸君がこの世に存在すること自体がいけないかのようである。彼らの思想、行為を批判するのではなく、彼らの存在自体を否定する。これでは何の解決も得られないのではないだろうか。解放派の諸君と違って、彼らを一人の人間として認めさえすれば話し合うことはできる。実際、筆者は友人二人とともに解放派のメンバーA君と話し合う機会をもったことがある。話し合いは結局、互いに何の一致点も見出せないまま終わったが、A君が筆者達に殴りかかるなどということは勿論なかった。これは、A君と筆者達が互いに相手の人格を認めあつた上で話し合いを行ったからである。と筆者は考えている。こういうこともあるのだということも民青系諸君にも知って欲しい。そして、これまで解放派諸君との討論の機会を初めからないものと決めてかかってきたことを率直に自己批判し、今後の行動を改めて欲しい。

第二に、民青系諸君の警察権力に対する考え方は全く許せない。要するに、考えが甘い。解放派諸君の行動が自分達の手に余ることかわかるや（ああした対応の仕方では手に余るのも当然であるが）、警察に取り締りを要求する。目黒署に抗議に行ったり、果ては実際に警察権力が学内に導入されると「あれでは取り締りが足りない」と言わんばかりの宣伝をする。ここまでくると、ただ呆れるばかりである。

当り前のことだが、警察権力というものは非常に恐ろしいものである。警察権力には、普段見かける「おまわりさん」とは違つた治安政治警察という面があることを忘れてはならない。あれは、はっきり言って「合法的」な暴力装置である。彼らがどんなに無法なこ

とを行なおうとも、それは全て「合法活動」として免罪されるのである。そして、彼らの無法に対して抗議行動を起せば、「公務執行妨害」で両手が後ろにまわる。

警察権力がいかにムチャクチャなことをするか、一月十日の事件に即して少し並べてみよう。一月十日は駒場東の懲罰委員会が予定されていた日で、その日は昼頃から解放派の諸君が駒場に現われていた。午後六時頃、私服が教十名駒場に侵入し、明察前にたむろしていた解放派の諸君を裏力で拘束し、連れ去った。その頃、筆者は教人の友人と学館にいたが、「解放派が私服に連れて行かれる」という知らせを聞くや、すぐに外に飛び出した(野次馬根性丸出し!!)。結局、友人の一人が解放派諸君を連れ去る警官を追跡し、駒場公園にはいったのを確認、その知らせを聞いたX君と筆者は直ちに駒場公園に向かった。

我々が駒場公園に到着すると、公園の入口には護送車が数台、楯を持つ制服警官が教十名、いや、百名をこえていただろうが、制服警官は解放派の諸君を取り囲んでいたようである。楯が何かにぶつかる音が聞こえていた。恐らく、解放派の諸君が暴行を受けていたのだろう。我々は少し離れて警官を見守ることにした。解放派諸君の姿は全く見えない。暫くして、警官が二、三人我々の姿を見て近づいて来た。

「君達、何だね」と警官の一人、何だ、いいじゃないか。大体彼らにそんなことを尋ねる権利などないはずだ。

「一体、何やっつてんですか?」とX君。

「いや……」警官は答えようとしなない。「君達、東大の学生?」そんなこと、おまえらに何の関係があるんだ。

「ええ……まあ」こう答えたのがまずかった。

やつらズに乗りやがって、

「君達、大学で何やっつてんの?」とくる。

「勉強してますよ」と筆者。

それから、やつらはほくらのことをやたらと聞きまくった。しまいに身分証明書の提出を求めやがった。こうした時に学生証を持ち歩く程馬鹿ではない。それにやつらにそんなことを求める権利などどこにあるというのだ。

「ここにいちや、まずいんですか?」結局、X君はそう尋ねた。

「うん」やつは肯く。

「どうしてです?」

やつは答えない。

「何か、ヤバイことでもやるんですか?」

「うん」とやつ。

「ヤバイことやるんですか?」驚いて再び尋ねると、

「うん」とやつは言う。

その後、いろいろとやりとりがあつて、結局、我々は「署」に連れていかれるのもいやだったので退散した。

しかし、「ヤバイことをする」から立ち去れ、とは一体どういうことなのか。やつらが我々に見せられないようなことをやっていたのは確実である。ヤバイこと? 冗談はよしたまえ。やつらに「ヤバイこと」をする権利があるのか? やつらが「ヤバイこと」をできるのは、やつらが「合法的な暴力」を持っていて、他ならぬい。こんなことが許されていいのだろうか。

以上のように、警察権力というのは無法を「合法的」にやっつける暴力装置である。こうした警察権力の学内への導入を安易に認めるのは言語道断である。今回は解放派の諸君だけがやられたわけだが、次は自分達が狙われるかもしれない。勝共、原理がスパイした情報を流す先は目黒署ではなかったのか。警察権力の恐ろしさというものをしっかり認識し、彼らの無法を厳しく監視していかなければならない。大学の自治など守れるはずがない。以上のことを民青系諸君はどう考えるのだろうか。

筆者は「人が人を殴る」ということに非常な嫌悪を覚える。従つ

てこれまでの解放派諸君の行動を許すことは絶対許せない。しかし、彼らを批判する時に、彼らも人間でないかのように扱ったり、警察権力に彼らの取り締りを要求するようなことをしても、何の解決にもならないのである。学内の全ての人々がもう少し冷静になることを望みたいものである。

(79Ⅱ)

## F君の手記

新左翼の台頭は東大闘争当時であるが、つい最近までは、多くの東大生にはまったく関係外、関心外の事であったろうと思う。駒場には四年前の著者の入学時より「学生会議」と呼ばれる革マル派（マル学同革マル派、千葉の勤労がこの傾向が強い）とどこかの新聞に書いてあった様に記憶する）の組織があった。その主要メンバーの一人（48年度入学といった駒場に長い人物であるが）が著者と同じクラスであり、オリエンテーション・コンパの時、隣にすわってさかんにゆるぎなく酒をすすめてくれた事をおぼえている。けっこうしたしみやすい口調で話しかけてくる人物であるので、いまだに悪感情はもっていない。残念ながら？革マルには入らなかつたが、そういった状況の中で、結構、学生運動に興味をもつ様になっていた。革マル派というのは衆知の様に、今現、駒場に革マルにとつて替つた存在となっている社会同解放派（「反帝学評」）又中核派と血で血をあらう抗争を繰り広げている団体で、著者の在学中だけでも学内で二度「内ゲバ殺人」が公然と行なわれている（やられたのは革マル派）、一度は警察に呼び出され、事情聴取をうけ（兵頭氏襲撃の時）二千五百円もらつて帰つた事もある（中には五千円もらつた人間もいるそうだが）。

現在、駒場の自治団体のモットーは「平和と民主主義にのつた学生自治活動」であるから、この様な団体（革マル、反帝学評、

等）の駒場における活動はゆるされるものでないという考えが当然出てくる。そこで自治会を先頭として「反暴力キャンペーン」といった形で攻撃が行われるわけである。

さて、こういった背景の中で、去る11月21日の明寮17Sにまつわる事件が始まるのである。

反帝学評が駒場にその姿を現わしたのは（本格的に）昭和53年の11月末である。青ヘルに竹ざおに赤い旗、まだあの時の印象は強い、彼らはいままで駒場新左翼の中で最有力であった革マルからその地位をうばったのである。その年は、中寮における火災といった事件から、寮室より鉄パイプ、ヘルメット等が寮委員会により押収され、革マル派が懲罰委員会の手により寮より追いつき出され、かなり勢力を弱めていた時であった。ただけになかなか劇的でもあった。その時点まで暴力といっても、革マル派もほとんど一般学生には手を出さなかつたが（著者の友人であるKオリ委員長はシャツをやぶかれたりしたが）、反帝学評については、バターンがかなりちがった。昭和53年12月8日深夜、明寮の仮宿部屋を当時の自治会委員長選挙の選対部屋として使用していた反帝学評に対し、武器持ち込みを理由に退去行動（スクラムをくんで「でてけ」のコール）に出た。二百名ほどの寮生、一般学生に対し、無差別的に一人ずつごぼうめきにして、ひきすりまわす、なぐる、けるの暴行を行ったのである。それ以来、彼らが駒場にあらわれると（団体と宣伝カーでやってくる）なぐられぬものがないという事はなかつたのではないかと思われるほどであった。たいてい暴力がふるわれると自治会が緊急抗議集会を開いて、いろいろと行方が、それにとどまつた。おまけに最近はその集会までおそれられる様であるが、しかし、その抗議集会も段々とエスカレートに、「原理」に対する様に多数でとりかこみ、追いつきに出るといった事も何度か行われた様に覚えている。さて、そういった経過の中でオリエンテーション、駒場寮への反帝、革マルの参加という問題が出てきた。54オリエンテーションの時、当時、複

雑な背景のもとに、むりやりにオリ委員となった著者は当事者であつたのでかなりくわしくおぼえているが、一番重要と思つた事は、彼らが電話で「おまえたちは平和と民主主義とにのつとつた活動をしているんだらう、おれたちはちがうんだよ」と言つた事、そして暴力に対し「これは我々の中にあるいかりの表現だ」と言つた事である。これでは平和的な反暴力活動はまったく無力であるとはいえない。結局、オリ委員会は参加を拒否したのであるが、彼らはむりやり参加(非公認)した形になつた。しかし、あまり重大な事件はおこらなかつたのは幸いであつた。しかし、駒場祭の時はかなり状況がちがつていた。反帝学評もその態度がかなりかたくなになつてきたのである。

11月21日2:00 P.M. 著者が明寮前を通ると、もうすでにそこには多数人が集つていた。その中で初めて「反帝学評が明寮17Sにたてこもつた」という事を知つたのである。なんらかの形で駒場祭へ参加してくると思つてはいたが、こういう形であらわれるとは予想外であつた。なおかつ、部屋を提供したのが同じクラスのア氏であるからそれ以上にびっくりした。K.F.C. (K子さん) Q.E. (Q氏ではない)には当時非常に多くの友人がおり、又、駒場の自治活動でも中核(中核派ではない)をなしつつあつた著者は、かなり困りの状態であつた。最先頭にたつて抗議を開始した。そして、17Sの前でどこでどういふことになつたのかはおぼえていないが、17Sのとびらをむりやり開放して中にある反帝学評を追い出すことになり、それを寮委員が行うことになつた。しかし、寮委員の手際が悪いことに業をよした著者は自ら先頭にたち、土建や顔まけのバリケードを解体のプ口的様に解体していつたのである。この当時の心理はのべるのにやぶさかではないが、人格の問題もあるのでここではふせておく。ただ、まわりの人間によれば「喜々として、とりこわしていた」ということである。これがよくなかつた。このため、当時がらかたくなになつてゐる反帝学評からねわれ出したのである。駒

場祭当日はそれほど危機感はなかつたが、その後数多くの自治会執行部の人間がなぐられ恫喝をうけたという話をきき、その中で著者が「キョウカイ派のF」として「革マル同様の責任をとつてもらう」(一様にこのおどし文句をつかう)ことになつてゐることを話され、その後、異常な身の危険を感じたのである。登校前には学館にTELを入れて、情勢判断をする。正門、銀杏並木はできるだけ通行しない。その対策はとつたものの、一度なぐられ、二度目はなぐられはしなかつたものの、まわりをとりかこまれて、いろいろいわれたのである。「どういふつもりで17Sを襲撃したんだ」「お前日共だろ」「お前ゆるさないからな、責任とつてもらうからな」その時点で著者はかなりつかれはてており(心的に)、又、現在行なれてゐる「反暴力キャンペーン」の無意味さを考え(後述する)。

この事態からにげたため、自ら自己批判を提案したのである。あの自己批判の内容は、彼らと話し合つた末の内容であり、残念ながら(?) 恫喝をうけて書いた自己批判というのでもなかつたのである。しかし、この自己批判の提案というのも簡単にできるものではなかつた。「反暴力キャンペーン」を行い、又それにより暴行をうけ、大怪我をした人々はほとんど著者の友人であり、ここで反帝に対して自己批判するといふ事は、その多くの友人を裏切る事になるからである。しかしあえてそれにふみきつた理由は、ちゃんどあつた。

それは前述した「反暴力キャンペーンの無意味さ」であつた。ただしこれは一般論ではなく著者の主観論である。たとえはここに一つの暴力があるとする。今現在、駒場ではそれを多くの人間で包圍し、暴力を行かせないようにしようといふた運動が行われている。しかし、反帝学評に対してはそれは一面的な力としかなりえず、ほとんど無力なのである。根本的に学生運動の方法に対する考えがちがうのに、力になり得ようか。我々のとる道は彼らの行動を理解するか(容認すること同義ではない)、それが又はまったく無視し

カでつぶすか（つまり彼らのいう革マル的立場をとる）しかないと考え。駒場祭当日、又それ以降、暴力をうけ怪我をした学友を目前にして多くの人々は「暴力反対」とさげふだけである。それで暴力をふせぐ事になろうか。逆に挑発になり、より多くの人間が怪我をする事になるのであろう。著者はこれ以上怪我人を見るのもなぐらわれている人（知人）をみるのも、又自分がそれになるのもいやであるし、又かといって今現在暴力的に反帝学評に敵対する、又される理由もイデオロギー的ではない（部落問題ではかなり正しいことを彼らは言っている）以上、中途半ばに攻撃することはやめて平和的に彼らの行動を理解してみようと思う。なにもわからないのに、相手の理解もしていないのに、ただやみくもに「暴力反対」では話のすじが通らないではないか。これが「Fの自己批判」の真実なのである。あの文面はその意味ではま、たく著者の所感である。

【編集部註】

F君の自己批判書について

自己批判書

(F君の立て着より転載)

主文I 私は去る11月21日2時より約2時間に渡り、明寮17Sのサークル部屋に対しワイヤカッター等を持ち出し壁紙を  
行ない暴力的に17Sの破壊を行った事を自己批判する。

ある徹夜大ましい光景 諸邑峯威

その時にまたま私は学館で開かれていた、時代錯誤社の編集会議に加わり、私か来るまに話し合った事柄の概略を聞き終わり、さ  
て次の議題に入ろうとしていた所だった。知る人ぞ知る事だが、わ  
が時代錯誤社の編集員は非常に集まりが良く、全員が定刻通りにピ

そもそも私は審判員でもないのに当局の煽動をまにうけ、その際における部屋の自主的活動を無視し、17Sを不法占拠したし、17Sを暴力的に破壊しました。本来、この様な行動はゆるされるものではないが、当時一部の煽動に「血迷った」私は以上の様な行動に反革命的にも出たのです。

主文II 11月21日におけるこの様な行動が12月8、9日機動隊  
導入による自治破壊の要因となったことに対し自己批判し、  
又この様な権力導入に対し、断固反対することを表明する。

主文III 私は今後この様な唯物論研究会等の活動に対し反革命的  
的敵対を行わないことを表明する。

F  
Fが、いわゆる日共、民青、革  
マル、中核、民学同等であると  
いうことは、F以外のなもの  
でもない。

以上

タツと集まる。集まりが悪い為には議事が進まないのか、つりに自然  
散会などという事はありえない。いやそれは決して期待される編集  
員像のどけではない。そうあらねば、いや、現実のはずなのだ。幹部  
の面々でさえこうなのだから、使い走りの私はもちろん定刻通りに

到着する。遅れた事など一度もない。さう、一度もないのだ。

ともあれ我々は次の議題に移ろうとしていた。そこに遅れて到着した「<sup>1</sup>」氏が、私の方を、「あれ、珍らしく俺より先に来てやがる」という腹付きでチラッと見たのち、おもむろに切りだした。

「わえわえ、今、解放系がパクられたぜ。」

「エ？エ？、俺キツキキたばかりだけど、サッキみんなでたき火してたぜ。なんか衆しげに火を囲んでギターでも奏いてんのかと思っただけ解放系だったんでビックリしたんだ。」

「ウン、ヒッた今なんだよ、何か変なミットモナーイおじさんがなんかいっばいいる方、と思ったら、ワツと確びかかってつれてつたよ。」

この言葉を聞いていた、我が時代錯誤社のメンバーは、一瞬間を見合せていたが、

「まだすぐそこにいるよ。」

この言葉に、ワツとはかり確び出していった。

言わなくともわかっていただけたらと思うが、決して、野次馬根性丸出しというわけではない。そう決して見物に行っただのではない。報道人としての使命感から、真実を見きわめに行っただのだ。時に一九八〇年一月十日、午後六時をまわった頃のことである。

出てみると、解放系のお兄さんお姉さん達一人一人に、ギョッたねえコート姿の私服が、三人づつぐらいからみついでちようど壁紙の前あたりを引きずっていくところだった。なんと親切なおまわりさん達だろう。あのゴッつい制服でみんなをびくりにさせてはかわいそうだと考えて、わざわざ私服を着てくるなんて、それに、ただつれていくだけでは、まわりで見ている人達がつまらないうらうと、盛んになぐったりけったり、まるで本気でやっているような演技力、なんてケービス精神が旺盛なんだろう。もちろん令状をチラつかせ

るような事はしないし、警察手帳をフキつけろ様権力的な事はしない。もちろん本来ならば令状がなければ連行や逮捕は出来ないし、要求されれば警察手帳を見せるのは義務である。しかしタテマエはあくまでタテマエ、そんなものにこだわって行けば善良な市民を守れない。解放系などは市民に入らないのだ。えっ、どうやって区別するかって、それは警察が自分で判断する事だ。何しろ人民の公僕である。悪い判断をするはずはない。尤もわが榮えある自治会の諸君は自分達が要請すれば当然公僕が出勤すべきと考えている様である。我々学生の権利・人権を守るべき自治会としては、国家権力の手先まで使ひこたせれば、素晴らしい。そうなのだ。民青の人の言う通りだ。警察権力の介入？大学の自治、それは確かに文切だ。他セクトの侵略が行われようとしているのに、そんな事は言っていられない。なにとケチ方考えではない。学友が危機に陥しているのだ。そうなのだ。断じて覚醒略略などではないのだ。民青の支配権いや学友の安全の爲には解放系の人権など知ったことか。令状？証拠？何故そんなものが必要なのだ。早く逮捕してしまえ。これなら我々学生は安心してられる。人権だの自治だのややこしいことより、面倒がなければそれでいいのだ。自治会の方。

ともかく私服に身を包んだおまわりさん達は、いやがる解放系の学生を、それぞれ2、3人ばかりで引きずって、裏門から出て、門の外に一列に並べた。カメラのフラッシュが何度も光る。編集員一同そろって器用にクルツと後ろを向く。ベツにおまわりさんに写真を撮られて困るわけではない。さう別に悪い事はしていないし、おまわりさんだって別に写真を撮るのは肖像権を侵害して、フラッシュクリストに掲せようなどと悪い事を考えているわけでもない。親切にも記念写真を撮ってくれていいだけなのだ。我々が後ろを向いたのだから、ましかって我々の顔がファインダーに入ってしまった。カメラやレンズが破壊されたり、フィルムが無駄に焼いたりした方がいいようにという心づかいからである。私だけはその心配はないが。

道には、私服のおじさん達の乗ってきたらしいマイクロバスが止まっていた。裏面の辺りは解放系の学生十数人に、私服が30人位、それに我々を含め野方馬も結構いて、ゴつた返している。おまわりさんは解放系の人達には、ことのほか親切で、さかんに遠慮しているのに、一人ブファツスでポートレートを構ってあげていた。当然任意扱いで、ふしないうように両側からしつかり体を押えてあげているという具合だ。制服のおまわりさんも何人かいて、とてもマイクロバス一台では乗り切れないな、と思つてみていた。そもそもどういう理由で逮捕するのだろうか。逮捕がなければ逮捕出来ないのはもちろんのこと、もし逮捕令状をとるとすると、人を確定しなくてはならない。いくら警察でも、構内にいる解放系の身元を完全に把握して、しかも全員が罪を犯しているという事態はあまりありそうにない。そうすると、警察が全員に対して強制力を發揮できるのは、東大構内への不法侵入に対して退去を求めると、現行犯による逮捕だけのはずである。やはり親切なおまわりさんが、学生を守るために出動し、逮捕してくれたのだろうか。しかも今までは警察がくるとサツと消えていた解放系が、今回は、裏面にも見張り置いていたにもかかわらずつかまっせましたか、やはり警察の方が一枚上だったのか。

そんな事を考えていると、機動隊のダシネミ色の装甲バスが向かいに止まり、カマボコをもった警官が30人ほど降りてきた。ああ、キツとあれに乗せて連れていくんだな、と思つた。

一人一人の両側に、ヤッぱり253人ブツ私服がくつついたままで、全員がひとがたまりになる。抵抗すると、やさしくなでてあげてくれたようだ。そのまわりを、ぐるっどカマボコでとり囲み、動きはじめた。ヤッぱりみんな逮捕されるらしいな。しかし何の容疑かなあ、でもおまわりさんが怒りことするわけはない。令状もないのに強制的に連れていけない。

まあすぐ帰つてもしかたがない。いっちゃんまで見てよう、とい

うわけだみていたら、向とこの集団は、バスへ乗る信号は獲らず、そのまま真つ、すぐ歩いていってしまった。おかしい。逃げられることと互心配してあんたに嚴重に取り囲んでるのに、まさか歩いていくはずはない。それとも健康の事を心配して、運動不足にたたりよう歩かせてるのかなあ。それで後がらぶらりと歩いていって行くことにした。

道は天下の公道である。誰が歩いてても自由ではしたが、ものの二百メートルも行かないうちに、おまわりさんが2人よって来た。親切にも、キツと道に迷わないよう教えてくれようとしたのだろう。さかんに彼らの行く方向と直つ方向に行くよう勧めたけれど、怒心なおまわり、おどしてまで向きを変えさせようとしたが、私は、彼らかどに行か知りたかったので、「こっちに行きたいけどいけないのと聞いて、いやかまわない」と言つたが、私が道を間違えて、彼らと同じ方向に向かわないよう、ずつと、しよについてきて、絶えず本当にその途でいいのがと願き続けた。おまわりさん達と、囲まれた解放系は、何と、あのま、暗な駒場公園で止まったのだ。私ちも、と見ていたが、たが、例の2人が、「この道を離れんだろ」とどんどん背中を押してくるので、あまに親切なので、ついそのまま進んでしまった。熱心にも、ウターとしないよう、道の端っこにずつと待つていたので、仕方なく學校に戻つた。

すぐに壁の取柄をしたかやっぱり同じ、近くに行けずに終わってしまった。でも向であんな所にいつたんだらう。結局一人を除いて逮捕はされたが、たみだいたから、彼ら解放系は、任意でおまわりさんについていったわけだ。だつてさうじゃなかったら逮捕されてるはず、でもなんでもわざわざ入目のない、暗い所へ連れてったのか。我々の権利を守ってくれるやさしいおまわりさんか、人権を無視して無利益利連行しちゃって、「きをつけよう……」って場所を連れださなはすはない。いくら解放系の人か、「私共の解放系で……」なんていって訴える事出来ないからって、(531E)

# 解放派

## 編集部

# 大学の自治

# そして我々

## 実は自分たちが問われている

---

解放派をめぐる一連の事態について、編集部では討論を重ねてきたが、問題が複雑でなかなか意見が一致しなかった。それでも、どこにかある程度のところまでは整理することができたので、ここに座談会形式でまとめてみた。座談会形式にしたのは、ある程度まとまったとはいえず多様であった編集部員の考えをできるだけ盛り込もうと思ったからである。御一読いただき、率直な批判・意見を寄せていただければ幸いである。

(編集部)

---

□ 許さない解放派のやり方

**A** 駒場祭以来、駒場では解放派をめぐっているいろいろなことが起っているが、この事態について話し合いたいと思う。まず率直な印象をざっくりばらんに出しあってみよう。

**B** 詳しいことはよくわからないが、ああいうのはひどい。むやみに人をなぐったり、けったり、ものを壊したり……。

**C** そう。たしかに彼らなりの論理はあるだろうが、ああいうやり方は絶対に許せない。

**B** だいたいあのヘルメット姿というのが

……  
C いや、ヘルメットそれ自体が悪いのではないだろう。

B だが、少なくともあれが威圧的なイメージを与えている。

C ヘルメット自体は妨御のためのものだ。妨御のためのものだとしても、それは暴力というものを前提しているのではないか。

C たしかに暴力を前提しているし、それがいいなどとは思わない。言いたいのは、我々が彼らを見る時、そのヘルメット姿だけから一面的なイメージを作り出し、彼らの全存在を断じてしまうことが危険なことなのではないか、ということだ。でも今彼らのやっていることがひどいのは確かだ。

A ヘルメットは暴力を暗示しているかもしれないが、ヘルメットをかぶっているかいないかということが問題なのではなく、彼らの今やっていること、やり方が問題なのだ。

B 1月10日の駒場寛徳罰委員会に対する解放派の行為など、けが人もでていり、批判されるべきだ。

A 駒場寮に関しては「2・9総代会決議」というのがあって、革マル派、解放派には寮内施設の使用は認めない、となっている。駒場寮前の明寮門Sバリケード封鎖に対する退去要求も、それが根拠になっている。(以下参照)

C だが、その決議は「解放派だから」「革マル派だから」ということになり、思想・

信条の自由を認めないことになるのではないか。

A たしかに原則的にはみかしいが、この決議の背景には、当時寮内で、武器持ち込みによる解放派と革マル派の抗争が死傷者を出すほど激しく、一般の寮生の生活がおびやかされているという背景があった。ただ、この種の決議は、そののもつ制限性をはっきり打ち出さないと、一般化し、Cの言ったような原則に抵触するようなことが起ってしまう。

B その決議の持つ欠陥はともかく、現に寮生の中には解放派の行為によって生活をおびやかされている人もいり。

A とここで、先ほどから「暴力」といっているのは「なぐる・ける」のことを言っているのだから、このように直接物理的な力で相手を封じこめることがなせられないかというところ、それが相手の自由な発言や行動、ひいては相手の人格を認めないことを意味するからだ。考之の遣いは当然あるわけで、そこでお互いに耳を傾け、意見をたたかわせて何らかの展開を期すためには、自由な判断に基づく自由な行動が最低限保証されなければならぬ。この点が重要だ。相手の言うことに耳を傾けねばならないということは我々自身についても言えることだ。

C ことは今起っている目にあまる行為にとどまらないのではないか。というのは、彼らがおおむねこのことを続けていくうちに、皆

# 事実経過

- 11.20 解放派、明寮門Sに鉄柱、ブロック、鉄板など搬入。バリケード構築。寮委員会解放派の退去を命ずる。
- 21 学部当局、解放派に退去を要求。寮委員会、29総代会決議に基き門Sのバリケードを解除したところであったら名を寮外に退去させず。
- 22 解放派、一時的に明寮門Sへ侵入。
- 23 解放派、23教室を占拠。
- 24 解放派、寮の一室を襲撃。
- 25 解放派と革マル派の内ゲバ起こる。両派とも駒場から去る。
- 12.1 駒場寮委員会、明寮門S室員2名を懲罰委員会に提訴。
- 4 解放派、明寮門Sを再占拠す。そのさい革マル派と小ゼリあり。革マル派9名は明寮門Sへ逃げ、解放派に閉じ込められた形となるが、当局の仲介で学外へ退去する。
- 解放派、一ノ瀬君にリンチを加える。
- 5 内田中央委員長、解放派に襲われ、4針ぬうケガ。
- 6 学部、解放派に退去命令。4名限の講義中止される。この数日、革マルは正門前で武装して集会を開く。

の中に「つきあいきれぬや」というように、正面から抗議していかうとする意欲が失われ、ていつてしまつたからだ。それによつて彼らにあらあいうやり方が通用する場をなし崩し的に与えていくと、我々の言動が著しく制限される可能性がある。

A そついうことも含めて、今、やはり我々は彼らのやり方に対して明確に抗議していくべきだろう。

□ 「遺憾」でない?!

A 一連の事態に関する自治会執行部の対応についてはどうだろう。

C 12月8日9日、1月10日と警察力が導入されてきた。これは大学自治という観点からはたいへん困つたことだ。自治会執行部はあれを当然のことと言っているが、それはおかしい。

B いや、やはりあれだけひどい状態だったのだから仕方なかつたのではないか。

C 仕方ないではすまされないのではないか。日頃「大学の自治」を語る自治会執行部がああいう無節操な態度をとつたのはどう考へてもおかしい。

B 原則はそついかもしれないが、実際に多くのケガ人が出たり、寮生の生活がおよびかされたりしているのだから、やはり、あつて現実に対し、あれ以外の対処のしかたはなかつたのではないか。

たのではないか。

C あれが唯一の対処の仕方であつたかどうかはともかく、みんな警察力の導入に対してあまり鈍感なのではないか。こんなことは当然のことだが、警察の力というものは我々が日頃懸つてゐるのとは比喩ものにならないほど大きいもので、そついう力が外部から働けば、大学における自由な学問と、それを保証する上で不可欠な大学の自治は破壊されてしまう。みんなそついうことを頭でわかつていても、感覚的にはちつともわかつていないのではないか。

B 警察といつても普段感じているのは「町のおまわりさん」ところだろう。

C 警察にはそついう市民警察という面もあるが、同時に治安政治警察という面がある。1月10日に解放派がおおぜいの私服刑事につれていかれるのを見ていたが、すこいものだった。「暴力」「暴力」というなら、あれだつてたいへんな暴力だ。

B だが、そついう面はあまり目に入らない。

C そんなこと、車の免許をとれば誰にもわかるよ。(笑)

A 警察のもつ二面性ははつきり認識しなければならぬにせよ、話を自治会執行部の対応に戻そう。

B 繰りかえしになるが、ああいう事態に對しては仕方がなかつたのではないか。

8. 革マル、正門前で兵頭君の追悼集会開きその後解放派と対峙、3時半学外退去。

3時55分、令状を持った三百人の機動隊学内に入り17Sを捜査。伸縮鉄パイプの本、竹ざお30本、ヘルメット20個押収。解放派はこの直前に学外に退去。寮委会17Sのバリ解除を始めた所に解放派が襲撃をかけ17Sを再占拠す。深夜、解放派明寮10Sを完全に破壊。

9. 機動隊、学部の要請で再度導入されるも又もや解放派は直前に退去。寮委員会と学部の両者により明寮10S、17S、OBの三室が封鎖される。

13. 内田中央委員長、解放派にリンチ受ける連日、解放派現れ、暴行事件続発。

18. 寮の懲罰委員会、解放派の乱入で流会す。26. 大沢委員長、解放派の暴行で倒れる。

110. 明寮前にいた解放派を私服警官多数が拉到、駒場公園へ。一名逮捕の後全員釈放される。その後、寮の懲罰委員会に解放派襲撃をかけたケガ人30人、12人が救急車で病院に運ばれる。この襲撃の途中警察が導入される、最終的に6名の解放派が逮捕される(内東大生一名)。

11. 懲罰委員会再開され結審す。

14. 第一懲罰委員会、明寮17S室員之名に退寮判決を下す。

18. 前記判決確定する。

C あの場面では仕方がなかったにしても、問題にしたいのは、その前後の執行部の態度だ。つまり、大学の自治という視点からすれば、警察力の導入ということは「遺憾なこと」であるはずなのに、執行部は警察に早く来てくれと頼んだり、いざ来たら、まだ足りないと言ったりしている。少なくとも「あの事態にさいし、十分の努力をしたがやむなく警察力の導入ということになった。我々としては誠に遺憾である」くらい言っておきたい。

□ 実は我々自身の問題だ

A ただ、ここで1つ言っておきたいことがある。

あの場合、あれしか対抗の仕方がなかったかどうかは置いておく。というのは、原則は確かに重要だし、忘れてはならないが、あれだけの人が出たりする事態を前にして原則論ばかりぶつけていても意味がないからだ。

だが、大学の自治というのは執行部の専売特許ではなく、実は我々一人一人が自治意識を持って作っていかなければならぬものなのだ。ああした事態を前にしても実に多くの人が黙って通り過ぎていってしまうということが問題なのだ。つまり、我々自身が何をし

たかということだ。

B みんなの中には「あれは寮の問題だ」という考えがあるのではないか。

C そういふ面はあるようだ。寮は学校の中にあるのに。

B 新聞で読んだり、朝きて「ラを見ても「またやってるのか」くらいしか思わない。自治会というものが我々から非常に遠い存在になっている。自治会執行部のピラを見ても「あ、また民青か」という感じを持つ人が多いのではないか。そもそも自治会は自分たちのものなのだから「民青でいやだ」なら実際に声をあげればいい。が、みんなそこまでやらない。

A だが、例えば駒場祭の前日のように、自分の企画に影響があるくらい迫ってくればみんながたくさん集まることだってある。結局、否応なく自分に問題がふりかかってこない限り重い腰をあげないということだ。

C つまり、みな大学を自分の生活する場としてとらえていないということだろう。そういう意識がなければ「大学の自治」なんて空文句に終わってしまう。自治会執行部も、警察にお願ひに行く前に、重い腰をあげない我々「一般学生」をある意味で「叱る」くらいの覇気があつていいのだ。

B たしか去年の6月9日に銀杏並木で解放派が何かをやるうとして当高の人間をなぐったりした時にずいぶん人があつまったこと

があつた。ああなれば、解放派も簡単に手は出せない。駒場祭のときもそうだ。

A 解放派にああいうやり方を認めさせないために、ともかく多くの人が声をあげていくことが必要だ。声をあげ、行動していくことを恐れてはならないし、めんどつくせがってはならない。例えば、何かごちゃごちゃやっていたら足を止めて現実を見る。どこが出す情報にせよ、それがおおむね正しい情報だとしても、情報は体験にはならない。

B 現場において、自分の体で感じ取るのと「ピラを誹むのでは全く違う。

A 例えは解放派が明瞭の前でたき火をしてたむろしていて、自分が明瞭に入る用事があつたらためらわれないで入っていけばいい。彼らも通りかかると人をなぐることはないだろう。

C そういふ態度を我々一人一人がとれば彼らも何を感じるはずだ。

A ただ、問題はそれだけでは片づかない。ああいう行為をする彼らを駒場から追い出せばそれでいいかというところではない。自分の庭だけ静かならいいというのではだめだ。駒場から出ていっても他の所で同じことを繰り返したり無意味な内ゲバを続けるだろう。だから多くの人が声をあげ行動し、ああいうやりかを改めるように抗議していかなければならぬ。もっともこれは実際には非常に難しいことだ。だが、先の例で言えば、明瞭の

## 2.9 総代会決議の背景

駒寮の之を総代会決議「革マル派、解放派などの入寮、寮施設使用を拒否しよう」についてその判定の背景を説明したい。この決議に対し「解放派」から「革マル派」からという事、思想信条の自由を否定しているのとは、思う人もあるかもしれない。しかしそれは全くの誤解である。この決議は思想信条の自由を守り、寮生活、寮の自治を守る為のものなのである。駒場寮には自主規律三原則「1 寮内でテロリンチを行わない。2 寮内に武器を持ち込まない。3 不法占拠をしない。」という規律があり過去何度も総代会（寮の最高決議機関）で確認されてきた。何故こんな当然な事柄を明文化する必要があったのか。それは寮内でテロリンチ、武器持込み、不法占拠が何度となくくり返されてきたからである。

例えば中寮の118は現在使用不能の状態であるが、ここは昔「歴史研」という革マル系のサークルが使っていたが、解放派の襲撃で完全に破壊されたのである。77年12月には寮生の兵頭君が一体と二体の間で解放派に虐殺された。78年4月には寮のマル研という革マル系の部屋が火事（放火の可能性大）になりその焼跡から鉄パイプが多数発見された。その後、寮の懲罰委員会などでマル研を擁護していた人たちに、「そんなことしていると命の保

障はないぞ」という脅迫電話があるという異常な事態まで起きている。又、おとしの12月8日深夜には明寮仮宿部屋を選対部屋として使っていた解放派に対し寮委員会が武器を持込んでいないか確かめる為に入室を求めた所、彼らがこれを不当に拒否し抗議に集った寮生二百名ほどに暴行を恣にしたという事件もある。79年の2月の時は正門前に解放派が、明寮前に革マル派がそれぞれ完全武装で対峙するという一触即発の状態であったがこの時も革マル派は明寮の108を拠点としていたのである。

このほかにも、昔、革マル派も解放派も両方とも寮に部屋をもつていた時代には、相互に部屋の襲撃が頻発し寮生の生活が脅かされていた。革マルの完全武装兵が寮に大量動員で常駐するという異様な事態まであったのである。

このほかに、昔、革マル派も解放派も両方とも寮に部屋をもつていた時代には、相互に部屋の襲撃が頻発し寮生の生活が脅かされていた。革マルの完全武装兵が寮に大量動員で常駐するという異様な事態まであったのである。

このほかに、昔、革マル派も解放派も両方とも寮に部屋をもつていた時代には、相互に部屋の襲撃が頻発し寮生の生活が脅かされていた。革マルの完全武装兵が寮に大量動員で常駐するという異様な事態まであったのである。

このほかに、昔、革マル派も解放派も両方とも寮に部屋をもつていた時代には、相互に部屋の襲撃が頻発し寮生の生活が脅かされていた。革マルの完全武装兵が寮に大量動員で常駐するという異様な事態まであったのである。

(文責・駒寮委の石野真子)

前でもし彼らが何か言ってきたら自分の思うことをすなおに言えはいいと思う。これもさやかだが、ただ教にまかせて追いつけずだけでない一つの方法だろう。またこういう小さな行動が自治の根本だと思う。

C 原則があちこちでぶつかり合い、かつ現実はどう進んでいくか、この問題をどうとらえるかは非常に難しいが、ともかくまずは我々一人一人がこの問題を自分の問題としてとらえることだ。それは、大学を単なる通学点としてではなく、自分の生活の場としてとらえていくことから始まる。

### 《労働通信》

◇さる1月22日の編集大誌大徹夜（社内称「ドッホ日」）において労働使トップア間に許される妥協が成立した模様である。

◇当初、社長Kの資金持出本郷逃亡を追求していた労働委員長だったが、社長Kが労働による職場の自主管理を示唆するや、態度を極度に軟化した。どうやらトップア間下裏取引が成立したらしく、一時あれほど上手に出ていた労働委員長、節操もなく社長Kにこびへつらう有様だった。

◇酒が進むにつれて、流石に後ろめたかったのか労働委員長、酔いの廻りが速った。しまいに社長Kに「捨てないで、捨てないで」と懇願する始末、全く社長Kと重なりを混同しているとしか思えなかった。

—時鐘労働通信—

駒場生が授業には出ずとも必ず利用する生協書籍部。今回はその店長、打田さんを取材してみた。まずは自己紹介。

打田 昇、昭和年生、北海道夕張市出身。大学時代東京にきてこれより9年め。なお、家族は奥様1人。6年前に生協入社。駒場の書籍部に3年いた後、理学部天文台の方へ（購売部と倉庫のみ）去年の3月からこの店長をしている。

生協に勤めた動機は？  
「当時は就職難だね。それと大学で社会教育専攻して、生協もその一環ではないか、と思っただんですよ。組合員の作る組織ですから、買っぱかりでなく、商品のできる仕組とか購入の仕組とか教育的作用もあるんじゃないかと、現実にはなかなか難しいですが、学生の本の好みの変化について、私たちが学生の頃は、右派新書って1つのシンボルだったんですよ。あれはほとんど書きおろして新しい知識という感じで新鮮だった。あれを讀まない人と友人と話を通じなかつたし、学生じゃ無い、イメージがある、でも今じゃ同じ点で新刊10冊あるのさ、せいぜい20〜30冊。教授の方は来ると思わないのかい、ハストセラーといっつも10冊あるのはめづらしい。学生の好みも多様化してきていますね。」

# 人物

## クローズアップ

生協書籍部 店長

# 打田さん



「恒河沙も結構、売ってんじゃないですか（笑）あと『ひあ』はすごいんですね、10人に1人は買っ行く。値段が手頃なのか話題についていけないのかなのか。ある意味では右派新書が『ひあ』にかわったのかも知れない。お仕事について聞かせて下さい。

「やはり本の供給というところが一番ですね。昔、教科書を買えない学生がリマカーンってば、この神田のあたりの本屋へ共同購入しにいって、たのが生協書籍部のはじまりなんです。それこそ昔は、資本金が足りなかつたり、割引きをするんです。近所の書店から圧力がかかって版元が本をいれにくくなつたり。東大に對してはわりと好意的だったんです。早稲田なんて最近までもめこまましたよ。この2つの教科書専売は常にきらきらめようにしています。」

「フェア等の企画も今はこちら主体でやっています。来年からはかえようと思つてます。学生に棚を開放したり、主体的参加を求めようと思います。趣味、楽しいことは？」

「趣味は将棋。楽しみは…お酒飲むことかな。」

「学生への要望、ありましたら。教養課程にいる間にいろんな本を讀んで、専門以外の雑学を豊富にしごほしいですね。新しい文化を創っていく、ご意味で。」

他、購入の際、手持ちの本は袋帯に入れる事（割引と間違えちゃう）組合員証の提示などがあつていた。

「すいてる時にゆっくり見に来て下さい。」  
正社員7名、アルバイト4名、嘱託1名の計11名の上につ打田さん。とにかく忙しうである。つかまえるまでひと苦労であつたが取材には快く応じて下さつた。取材中にも頻繁にかかってくる電話にテキパキと答える。しかし、話をうかがううち、初めの「ヤリ手の店長さん」のイメージは「話せる先輩」のそれへとかわつていって、インタビュアーと初めてご対面して下さつた私に、更にやさしく要領よく答えて下さつたのです。（コーヒー「ごちそうさま」）

我々か学生として書籍部からうける恩恵ははかりしれない。打田さんの話ぶりからは、常に生協をより「組合員のもの」にしようとして工夫していることがわかつた。私達も感謝の念とともにそれに応える気持ちでいたいものだ。

【凡】



# ブツブツ

今回編集部では、特集の一つに「恒河沙叩き」というのをやりました。そこで私も、それにひっかけて、日頃のうっぷんを晴らしたいと思います。

だいたい、恒河沙は編集委員に加わっているはずの私の理解を越えた記事を掲載するんだ……（ははは、とうとういってやっただろ、）どうも、自分自身に直接関係のないような記事ばかりのように思う。抽象語の羅列によって構成されているような、崇高(?)な理論、これじゃあどうもねえ……抽象語を全面的に否定しようというのではないのです。以前この欄で書いたとき、つぎのようなことを言っている。

——理解するということはどういうことであろうか。思うに、考えたことを、イメージ、具象物として、具体的な事柄として把握することではないか。だから、抽象語ばかりで構成された考えというものは理解できないもののようにだ——（第6号に掲載）

抽象語というのはどういう言葉なのだろうか。思うに、抽象語とは、数多くの経験によって定義されているのではないだろうか。例之ば、「ここに「美しい」というごくみじかな言葉をとってみよう。ある人は、虹を見たとき何かそこにひかれるものがある。また、桜の花がちるのを見たとき、そこに感情の昂りを感じる。また夕日を見た時立ちすくむこういつた経験をしたという経験を「美しい」と形容する。だが、この「美しい」という言葉が、この経験を定義するのではない。経験が「美しい」という言葉を定義しているのではないだろうか。こういう経験が豊富であればある

ほどその言葉ははっきり定義されてくるのである。したがって「美しい」という言葉にしても、人それぞれによって定義される方もちがうしその言葉の輪郭がどの程度はっきりしているかもちがってくるだろう。同じように虹をみる。櫻の花が散るのを見る。夕日を見るといって経験をしても、その三者に、共通した感情の昂りを感じたという経験をするとはいかざらないのだ。それでも、言葉を定義する経験の数が多ければ差は少なくなる。ただ、抽象度の高い言葉はこの数がよほど多くないと個人差はちがまらない。この経験の数は、かなりその人の関心や興味向きによって変わってくるわけである。

こんなことを考えると、さまざまな性格や興味をもつ多くの人々の間でのコミュニケーションの場をはたそうとしている恒河沙で、抽象度の高い言葉ばかりで構成されている文章が大部分を占めているのは、向題があるのではないだろうか。もっと、肉心の方向がちがう人がよんでも理解できるように抽象度のひくい言葉をもっとつかってもらいたいものですねえ。

なんと、抽象度のひくい文にして下さいと、ぼやいた文章が……なんと……抽象的な文章的なものになっていくのではないかと、そして最後に、こんな矛盾した文章をかかないようにして下さいね。

こんな文章はかかないようにという悪い手本をしめしたのでした。はい。

### 【巻】

コラム題説明！ 読み方・ジダイサクゴケ(吐か)一社家族主義(?)をとる時代錯誤社の心情的偏狭的原始共同体的ナレアイの方針を示している。のかなあ。

一周年記念

# 恒河沙

# きたたき



『恒河沙』もおかけ様で一年を迎えることができました。最初は社員4名、手刷りのページ足らずだった『恒河沙』も今や社員十数名(兼重部員も若干いますか...)の手刷りといえど印刷は外注、読者の層も広かりました。しかし、その中で時代錯誤社は何か大きなたれものを生じたのではないのでしょうか? 発刊の辞にうたれぬ『コミュニケーションの手段』「我々の時代の文化を最後辺から支えるもの」、『恒河沙』は本当にその役割をはたしているのでしょうか?

我々は、一周年記念をかねて、時代錯誤社、並びに『恒河沙』への批判を募集しましたか...寂しいことに文章として集まったのはゆががる通。しかし、あけてはいけない、またならぬ批判、文章にならぬ要望もあるはず!! 心からクロソワード解を権ウラの一ロメ初め、あらゆる批評を虚心にうけとめていくつもりです。それでは普通の原稿を紹介します、心から永々とつづく『恒河沙きたき』の発端として。

## 『恒河沙』考

山部京輔



恒河沙も創刊以来もう一年。創刊時からは想像もできなかったほどに衰へも整い、駒場でもその名が定着しつつある。この一年間さまざまな試行錯誤をかさねながら螺旋状に進歩してきたように思う。

しかし恒河沙の中には内容的に不満におもゆるべきでない原稿が多いと思う。もう一つ(いや、もう二つぐらい)迫力が感じられないのである。具体的にいえば生活臭のようなものが感じられないのである。頭で考えた文が多くて、生活体験・生活実感にゆづいた体の奥底から湧きあがってくるようなものにおめにかかれぬ。編集部・読者みんまで、恒河沙の存在意義について考えなおしてみる必要があるのではないだろうか。「自分が身を置いてある場所を直視しよう」。ここから恒河沙は出発する。駒場をみつめ、その文化をたどるゆずかなものでも、自分自身の基盤として大切にし、みいでは駒場の文化を積極的に形成して「こう」という発刊の辞をもう一度認識しなおすべきではないか。恒河沙に必要なのは芸術的文章でも、学問的記述でもないと思う。それはその方面の雑誌が扱えばよいし、読者もそちらを読む方がはるかに有効ではなからうか。恒河沙に必要なのは自分自身の基盤、即ち生活の場合みつめていく中で感じたこと考えた事なのだと思う。自己とは全く無関係に社会や芸術や学問などについて述べても、そこから表面的なコミュニケーションしか生れてこないのではなからうか。これは投稿の内容を理解できない(又、内容は理解できたとしても、そこから何を伝えようとしているのか理解できない)人間の心がみただけではないと思う。しかし、生活の場を中心にといいたらいい、それは駒場の中とかいう狭い生活領域に閉塞することを意味するのではない。何について述べるにしても、それを自己とは全く無関係なものとして第三者的に見るのではなく、あくまでもそれを自己との関係においてとらえよう。自己とは別世界に客観的に存在するものとしてではなく、自己の生活の中に主観的に位置づけて、再構成して考えていくべきだと思う。そうゆうところから、表面的でない真の共感が生まれてくるのではなからうか。

それから私を含めて大多数の読者は、なかなか原稿を書いて、すすんで投稿しようという気にはならないのではないでしょう。私

にいたっては、書く事自体に抵抗があるほどだ。身近に鬼の編集部がいなければ、この原稿を書いたりしてはいないだろう。そこで、一つの提案なのですが、特集をくんだテーマについて編集部が積極的にみんなどの中にはいつて意見を取材するという形をとってはどうか。又、ある程度の原稿を書くとなるとやはり肩をほってしまおうと思うので、気軽にかける四百字程度の新聞の投稿欄のようになすスペースを作ってはどうか。編集部の方々にたいへんとは思いますが、一考してみてください。

かなりなまいきな事を書いてきましたが、私自身について考えてみると、生活の場をみつめることによって、否応なく自分の醜さ・弱さが目にはいつてくるのである。この自己のどうしようもない内面までも露上で、不特定多数の人々の前に出すのは無理なように思う。また、それが恒河沙の雑誌としての限界ではなからうかと思うし、そこまで求めるのは酷だと思う。だから読者は情報のお客様とだけではなく、生活の少しでも感じられるものが恒河沙にあったら、恒河沙を種にして仲間同士でも議論してほしいと思う。今はそのような積極的姿勢がかけているのではないか。そうだったならば恒河沙は十分な役割をはたした事になろう。とにかく、現在のドツボ状況の中での一明の光である恒河沙をあたたく見守っていかうではないか。(81)

## 恒河沙 への一提案

葦舟

昨日編集部員から恒河沙を「叩く」原稿の依頼を受け、元来人を誉めるよりは貶す方が好きな僕は軽い気持ちで引き受けたものの、いざ原稿用紙に向ってみると、これが案外難しいということに気がついた。というのも、一応僕はこの雑誌の愛読者かつ支持者であって、

採点を求められれば90点位をつけたい位だからである。しかし二二では敢えてマイナスポイントのところを独断的に述べてみたいと思う。よって当然のことながら以下の文章は多少理論論的なものになり、「批判」というよりは「提言」といったものになろう。

さて、恒河沙はその「発刊に際して」の言葉の中で「コミュニケーション」の中から新たな文化を建設していきたい」と言っているのであるが、その「駒場にいる個人」間の「コミュニケーション」という前提は果して十分に満たされているであろうか？ 読者は、投稿された種々の文章や詩を読んで何らかの感想をもったり視野を広めたりできる。その意味では「コミュニケーション」は成立しているとも言えるが、果たしてそれで十分と言えるであろうか？

そう、確かに恒河沙は結構面白い、と僕は思う。中には全然面白くない記事もあるが、それは僕個人の興味・関心の対象の問題であって、編集方針のまずさによるものではなからう。各号の「特集」にしても、身近な所からタイムリーな問題をとりあげている。要するに仲々面白いのである。誦んでいる段には、ところどころに、恒河沙に何か文章を投稿しようかと考えると、どうもどうという気がおきない。(実際、依頼を受けて書いているこの拙文が最初の投稿である。)これは僕が文章を書くのが嫌いだからでもなければ、投稿することが嫌いだからでもない。寧ろ全く逆であって、僕は文を綴るのは大好きであり、それが他人の目にふれるのも、大好きとまではいえないが別に嫌いではない。なのにこの雑誌には投稿意欲をかきたてられないのは何故であろうか。

理由の1は、次号の特集のテーマが何なのか明確にはわからない場合が多いということ。別にテーマにこだわる必要はないというかもしれないが、何でもいから書けといわれると却って書きにくいということはあると思う。

理由の2であるが、二二で再び先に提起した問題に戻ってみたい。

文化形成という目的の前提である「コミュニケーション」は果して十分に達成されているか？ 僕個人としてはこの点に少々不満が残る。というのは、どうも「一方通行」の感じがするのである。つまり「投稿者」⇨「読者」という一方通行である。このような一方通行的なものでなく、できる限り「諸者相互のコミュニケーション」を求めていくべきだと思う。しかるに、この雑誌には誰かの投稿に対する反論や意見の類が全くといっていいほど載らない。(現在バックナンバーのうち数冊を友達に貸していて手許に三冊しかないのに記憶違いがあるかもしれないが、第3号に載った「独所感絶文」くらいのもものではなからうか？)これでは少々寂しい。新聞の投書欄などでも、時折「何月何日付の某氏に反論する」なんてのが載るでしょうが、もっと極端な例をあげると、某通信添削社の旬報の諸者欄では、一つの意見なり主張に対する反論が3、4も載り、それから一ヶ月もするとそれらの反論に対する反論がまたいくつか載る、というようなことがたびたび生じるのだが、こういう「誌上での討論」がないと面白くない、というか、少なくとも自分の投稿に対する意見や反論を期待できないようでは投稿の醍醐味に欠ける、と思うのは僕一人であろうか？ 人が自分の意見を述べる時には、他人にきいてもらいたいという欲求だけでなく、それに対する相手の意見をききたいという欲求もあると僕は思うのだが……

こう書いてくると「何だ、それならまずお前が誰かの投稿に対する反論を書けばいいじゃないか」と言われそうであるが、恒河沙の記事の中には「意見」「主張」というよりは寧ろ「感想文」「体験談」的な記事が多い。(別にこの傾向が悪いと言っているわけではない。)この類の記事を除外し、さらに詩・創作の類を除外し、残ったうちで自分の興味・関心のあるもの、かつ知識の及ぶものを抽出しようとする、皆無とは言わないまでもそれに近いのである。

以上二つの理由を裏返して考えて頂ければ、今後の編集方針に多少なりとも参考になるうか。もっとも、それで投稿が激増するとは

全く保証し難いが、(と、遂に部外者の無責任さを暴露)ともかく、最も必要なのはやはりいかなる手段を用いても販売部数を伸ばし、より多くの人に読まれることではないか。

(牙工)

## 「恒河沙」は寂しい存在である

落ちこぼれ

「恒河沙」さんも、何と周年を迎えらる(尊敬と可能の意)ぞうで、まきはあめどうふさいます。しかし、一体、何かめだいたいのだろ。二人は不届雑誌は本来、全学の学生の糾弾により廃刊に追い込まれるべき存在なのである。それかこのうとうと1年間も発行しつづけるのは……。今後更に「駒場の文化を継承」される貴誌への縁として「恒河沙」を、お贈りしようと思っただけ、堅いたたきならともかく、私のような不真面目な料理人が作った「恒河沙」たきなら、煮ても焼いても食えたものではないだろう。どういふ点が不真面目なのか。早い話が熱心に読んでいないという点である。これは、貴誌の記事の内容云々の問題というより、「つん読」を趣味とする私の性格の問題であらうから、何故読まないのかという点まで分析するのはやめよう。では、なぜ恒河沙が本来あつたはならない存在なのか。

文学部問題やセクト、学生運動について、「一般学生」の素直な感想や意見が載っているのを、読んでいておもしろい。自宅生だとセクトからの熱心な訪問勧誘も受けないので〇〇派がどうで、XX派が何をや、こいるというところさえよく知らない窮乏入りの「一般学生」だからである。

我が大学の学生運動の沈滞ぶりとい、たらひどいもので、まさにいさちちゃんのおまげ様ランチ型のおぼ、ちちゃん、お嬢ちゃん学生が

いい成績をとっていいところに入るようにちは、二さんと座席にすわり、空っぽの頭に、しこと訳のわからぬ知識をつめこんでいる。そして「高校の授業とち、とも変わらぬ」と嘆き、要領のいい学生は、日々麻雀やパチンコに勤しみ、コピーを讀んでうまく単位を頂戴するのである。十年前、全学を揺がしたあのエネルギーは、どこへ拡散してしまったのだろうか。爆発してしまい、今となつては残骸が残るのみなのだろうか。あの頃は、直接「学生運動」に参加してない学生までも政治や大学の本質について考へていたという。

「学生運動」とは何か? 「学生運動」——私にはヘルメットをかぶりタオルを巻き、火炎びんや角棒をふりかざして暴れ回る学生イメージがある。学生運動は内ケバのイメージがある。二に、セクトが一般学生に「悪い」というイメージを植えつけている原因の一端があるのだから。だが、「学生運動」を一部のセクトに「私物化」させてはならないのである。(二のようなき、回し自体、「私物化」されはならないだろうか。今、考へなくはならないのは、「学生運動」とは何か、「学生」とは何か、である。恒河沙はその活性源となり得る。

だが、わざわざ雑誌で二のような問題が取り上げられなければならないという状態は本当に寂しいものである。二人の問題は学生が常に考へ、討論すべき問題だからである。故に恒河沙の存在価値があるとするは、そこにコミニケーションが発生したときのみである。しかし、その恒河沙が在陣の山(失礼)という噂も寂しい。二の状態が、駒場生がコミニティマがシンを必要としない程。日々、問題意識をもち考へている故に発生しているのならよいのだが……。

そして、駒場のコミニティマがシンにならんと欲する恒河沙を、わざわざ郵送してこもら、読んでいる私にも、と寂しい存在である。

(Q) 大法学部一年)

# 駒場祭に見られる 学生映画の状況(2)

愚鈍者に対する教育論的考察

文進 3A 宮口真司

○コジヤム(邪夢) (東大映画研・和住洋一郎監督)

技術論とは一つのイデオロギ―を形成するのが常である。ところが愚鈍な感性はそれとは知らず、例えば前号の東大映画研の魔界詩人氏のように「映画の基本はモニタージュである」などと、一知半解に、単なるイデオロギ―を形成することに参与するしかないモニタージュ理論を振りかざしてみせ、その上「技術では東大映画研にかなう者がない」などと愚賢な冗談をほざいてみたりする。(これじや映画の底が割れるというもんだぜ) 技術とは基本的には表題行為に飽くまで戦略論的に組み込まれるのだが、いかなる戦略(=技術)がより正当であつたかは、作品と観客との関係を媒介した結果として一時的に検証されてくるにすぎず、従つて無邪気におれの戦略論(例えばモニタージュ理論)は正当で、他は邪道である、などという議論にふけ、ては、のんきな人間のする事だ、と言つておこつ。

ダシに使われる魔界詩人氏は哀れだけれども、読者諸氏に判り易

くするために、あえて彼の記事に触れつつ述べさせてもらえば、彼が技術と呼んでいるのは或る規範体系として捕えることができ、例えば、露光が一定すべきこと、ピントが合うべきこと、パンは無闇に多用すべきでないこと、画面のブレを防ぐべきこと、テンポのいいカットつなぎを心がけるべきこと、録音の際に映写機の駆動系の騒音を排除すべきことなど、全てそうした全体的規範の構成に組み込まれていると言ひ得る。そこで魔界詩人氏が「最近の自主映画」(正確には学生映画と称すべきだ——筆者注)の技術的拙劣さを指摘する際には、反対の極に「完璧な規範体系の踏襲」が想定されていることになるわけだが、果して問題はさういふ所にあるかと言えば、実はどうではない、技術的拙劣の指摘は規範の安直な対置で済まず、というよりはわざわざ規範概念を導入する程の事もなく、実際の映像の貧困が蓋然的に、制作主体の「技術=戦略論的」貧困にある、と言つてしまえば済む。ひらたく言えば技術を対象化してないってことよ。

とまあ前置きをいってもならず堅苦しい文体で述べてしまつたが

たいていは映像とが自然的にした結合せぬ技術論に本気でたわもれてしまうと、我々は眼前に展開する光と影の交錯に手ひどく裏切られる、という事実を幽止めとして揚げておきつつ、和住代の『ジャム』を見ていく事になると、この映画は、魔界詩人氏が非対自化的に賣場している規範体系とは一定の距離を置きつつ、それとの緊張した関係を耐えている、学生映画としては稀有の作品である、という二点がわかる。

①音と映像は同調すべきであるか？

誰でも映画を製作するときには、いかなる方法論を選択するかに關らず、一応はふまえて検討するところの規範としては、原則として人が歩くときに足音が聞こえ、人がしゃべるときに声がかきこえ、物が落ちたり、衝突したりするときには衝撃音が聞こえる、という音同調を行う事になっているが、『ジャム』はそうした手法は用いない。この映画は、殆んど場面ごと、新聞紙を部屋の四方の壁、床、天井に貼りつけた部屋を背景に据えて、半裸、或は裸の二人の男のからみ合いを撮っているが、重要なのは、画面を説明する音、画面に従属する音が全く排除され切っていることだ。まず、この40分の映画のはじめの部分のみは例外的であり、夜の街を手持ちカメラで、おそくは意図的にユラユラと揺すりながら撮った画面に、ゲームセンターから聞こえる電子音や、雑踏の音や、どこかから聞こえる音乗が見じり合っただけだが、それともゲームセンターの画面にゲームの音が付随する、といった一対一対応的な音響ではあり得ず、本オンサインのユラユラとした交錯と、音のモヤモヤとした交錯とが、まさに両者ともに「交錯」しているという一点で共通するが故に、結合させられる、といった方が、当たっているような具合である。この夜の街のユラユラ、モヤモヤ、という感じの長回わしが、例えば、この映画をテーマ主義的に裁断せんとする者にとつての、

見逃してはならない部分なのだが、その話は後に述べることにしよう。また更にこの部分、三脚を用いないことが必要だったことも、確認しておこう。

次に、場面変って例のからみ合いの密室と相成るが、ここには何と新宿駅のプラットホームで生録したとおぼしき、電車の音、構内アナウンス、群衆の声や足音がかきこえる。ここでは、再音の不同調による異化効果などというにとどまらず、それがとりも直さず、空間的なパドックスを形成しているという事実には注意すべきであって、その事實は、様々に我々の想像力を刺激し、例えば或る者は駅長室を占拠してそこを他人を排除する私的密室と化することが出来れば、などと思っただかもしれないし、或る者はまた、寺山修司の「田園に死す」のラストシーンを想起しつつ、もし画面の中に壁が倒れたら、その向こうにはどんな風景があるのだろうか、などと考えたり、もしカメラが今後ろを振り向いたなら、そこにはもしかして電車が止まっているのではないか、などもありもしないことを思っしてみたりもするかもしれない。寺山の映画もそうだったが、こうした部分は、テーマ分析者に恰好の比喩を提供している。が、ここでは「空間の読み替え」が成立していることを指摘するにとどめよう。この映画にはこうした再音不一致を通じて「空間の読み替え」を行わせる部分があふれかえっている。そこか何れを眺むかは、全く自由だが、映画の規範を熟知する者にとつては、そこに制度との間に異様な緊張を耐えているフィルムムの姿を見出すのは必然である。

②美しい画面には美しい音がふさわしいか？

何か非常に美しい画面に陶然と見つめるさなかに、突如として卑猥な連想を伴う「トイレの音」を聞く、というのはどんなものだろうか。例えばそれは美しい恋愛映画に酔っているときに、隣りの席の痴漢の手がおもむろに融れてきたならば、女性はどう思うかを

するか、といった問題にも通ずる。「映画に酔うこと」と「現実  
に覚醒すること」との二律背反的關係を示唆的に開示する。(酔う人  
間が同時に覚醒できぬのは当然だ)この事實は、何かすぐそばに居  
るような、テーマ主義的分析やストーリー主義的分析と本気で戯れて  
しまふ愚鈍な人間達への痛棒となるはずなのだが、まあそれはたな  
あげにしておこう。

ところで実は、この『ジャム』の画面、実に美しい部分が多々あ  
る。というよりは酔いそうになる画面が多いわけだが、それは出現  
する俳優の二人がフェイヌもよく、スタイルも良く、肌もきめ細か  
く美しい。しかもそのうち一人は体の線が曲線的でエロチックであ  
る、という事実を支えられて、演劇用フィルムターや、魚眼フレネ  
ルレンズの使用、著とし気味の光量などの技術的処理にも依つてい  
るのだと思われる。が酔いそうになる瞬間、あるいははげだるい、も  
の憂い感じに包まれてきた、瞬間、いきなりガッ!!というトイレ  
の水光の響きが鳴りわたる、という次第である。紙数の關係で詳述  
しかねるが、先程の空間的パラドックスと並行する形での、この美  
学上のパラドックスの過激性を想う時、この映画の特色は、「パラ  
ドックスの戦略性」という言葉で表わし得ると思うが、とにかく音と  
画とは我々が考え感じて以上以上に緊張した關係にあるということ  
を、我々は先ず確認し、例えばピストルの引き金をひく画に、爆発  
音をかぶれば、現実には弾が発射されたかのように前提し、ぎゅっ、映  
画を本気で論じてしまふような、一枚腰の批評者の頭がイの中で構  
成されている「画と音との野合」を、我々は、一度対象化してみる  
べきなのだ。

### ③ モンタージュ理論は踏襲されるべきか?

結論から言うと、モンタージュ理論は批判的に摂取されるべきで  
あるが、踏襲するか否かは自由である。例えばこの『ジャム』では

モンタージュに関する無知が戦略的に装われているのであるが、こ  
うした仮装が我が日本商業映画界を極く少数の例外を除いて久しく  
禁じられている事実を省るとき、こつした仮装の自由が唯一残され  
ている自主映画とりわけ学生映画の作者に対し、わけ知り顔に、  
「映画の基本はモンタージュである」などというイデオロギーを即  
自的に一枚腰で押し出してくるような人間は、反動のとしりをまぬ  
がれまい。

つじつまのあわぬ編集——具体的には『ジャム』に於てどう表れ  
ているか。冒頭の夜の新宿の部分を除くと(イ)例のからみ合いの部屋、  
(ロ)二階立てのアパートを外側から眺めたところ、(ハ)何十階かわから  
ぬがどこかの高層マンションの長い長い階段の場合、(ニ)どこかの小  
さなバー、の四つの場面が登場し、そのうち先述の如く部屋の中の  
からみ合いが時間的には主になるわけなのだが、この映画ではこれ  
ら四種が錯綜する。先ず主人公の二人の男のうち一人がジャムを買  
いに部屋(イ)から出、(ロ)の何十階かの長い階段を降り、途中で階段を  
昇ってくる黒衣の女とすれ違い、更に降りて降りて、(ハ)のバーに入  
ってきて、そこでマスターからジャムを受け取る。すると先程の黒  
衣の女がバーに現れる——第一のパラドクス。次にジャムを受け取  
ると男は部屋(イ)に帰るわけだが、その際、行きに降りたはずのビル  
の階段(ロ)を昇らずに、何故か(ハ)の二階家の屋外階段を昇って、その  
まま部屋(イ)に降りつく——第二のパラドクス。また更に、先述の如  
くジャムを取りに行った男とは逆に階段を昇ることによりバーにた  
どりついた女は、今度は男と同じく二階屋の屋外階段(ロ)を昇って、  
例の部屋にたどりつく——第三のパラドクス。ややこしくして読ん  
だだけでは判りにくいだろうが、つまりは、主なる舞台である部屋  
(イ)がマンションの上の方にあるのか、アパートの二階にあるのか不  
明となり、同時にバー(ハ)がマンションの上にあるのか、下にあるの  
か、はたまた全く別の場所にあるか不明になるのである。空間的身

元確認の無効化である。これは①で述べた画音の不同調に基づく空間的パラドクスとのアナロジーを成立させている。従つて論者はここに主題論的な一貫性を発見することもまた可能である。だがあの四つの場所の空間的錯綜は、先ず我々の規範的モニタージュ論を前提とするからこそ、『錯綜』とされるのであつて、私が先に定立した「モニタージュ理論リイデオロギー」理論を受容してもらえればそんなものは、『フィルムに写された四種の空間』にすぎぬ（いや空間と捉えること自体も錯覚かもしれぬ）のであつて、空間的に上だろがどうでもいいわけである。私としては、ここに作者の無意識に抱いているのであろう上下感覚への奇形的執着を見出すのであり、我は和住式奇形的上下過敏症に、ひそやかな憧憬を感じるのみである。私としては、このような讃辭を吐かせしぬる映画を、常に待ち望んでいる。和住代よ、『ジャムPARTY』の、更なる奇形を期待してやまぬ。

#### ④例えは、テーマ主義的論考

世の中には、「これが主題だ」と取すかしげもなく秘部を開陳するストリップ的特出し映画があり、それは、学生映画に於てはだいていの場合、前号で扱った『自殺志願』のように見るも無残な墜死をとげてしまつ。それは何故なら映画をつくらうなると考ふる者の大半が思想的に貧困そのものであり、ある批評家の言を借りるなら、「記念碑的に無知」であるからなのだが、無知は無知なりにそれを秘めやかに覆いかくす、或は無知を逆手に取る術があるわけで製作者の無毛症の秘部をもるに開陳されては、びくつきするじゃないか。（安易な比喻へのもたれかかりだ、という批難の声が聞こえる。）さて、……ところで、下着の向こう側の秘部を想像する、というのは、実は官感の予想に反し、実物の秘部を眺めるよりも、数倍の猥褻性を伴つ、という性欲論的な事実があつて、

それは例えは野坂昭如じゃないけれど、実際にオ○ンコするよりもオナツている方がキモチイイという事項に関連しもするわけだが、映画の主題論的分析に関しても、このことはアナラジーするのである。つまりそこにこそかの小川徹の裏目読み批評の成立する地平があるのだ。映画とのエロティックな、フェティッシュな戯れとして、それなりに成立するのだ。前に確か批評したかとも思つが、「いちご白書」を見て、反戦青春映画だ、などと思つたり、「ハーツアンドマインズ」を見てベトナム反戦映画だ、などと思つたり、対映像フアシズム敗北主義とは、一応区別しておくことが可能なのだ。なぜなら、小川式裏目読み主義は、本気で映像を信じぬところから生ずるからである。だが半畳を入れておけば、裏目読みが垂れ流す害毒は、純真その人気な観客がホントにその読みを信じてしまつところに於て媒介的に発生するのである。意識的裏目読み主義者同志の戯れ台はいとも楽しいのだが、今日の映画批評界（と、とりあえず呼んでおこう）の悲劇は、裏目読み批評家が、意識的裏目読み主義者に依つて支えられているのでなくて、むしろ愚鈍な批評信仰者によって支えられている、という事実と、そついつ事実を対象化し得ない愚鈍な男（或は女）が、われは批評家ぞごぞい！と信じこんでいるところにあるのだ。（勿論何事にも例外はつきものだが。）だから、意識的な裏目読み批評家は、「俺の読み方など信じろ。信じるな。」と絶えず言いつつながら批評せねばならぬ、という奇妙なことになる。まあ実際はこんなことをわりつつ批評する男もいないが、だが小川徹がえらく、松田政男がその友にえらく、そのエピソードも、対映画的不真面目度の高さの順にランクされることになつていくわけだ。無論、蓮寛重彦氏などは、このランキングに載せるのが恐ろしいのはスーパーマンぶりである。

と、大げさにことわり書きを書かねば、おいそれと裏目読みさえ

出来ないのだが、さて『ジャム』を読んでみようとする場合、①で述べた空間パラドクスII空間的読み替え、書き換え、と、②で述べた多元宇宙論的複数空間の錯綜、と、③で述べた、冒頭に見られる画面のゆれ、更に、全編を通じて三脚を一度も用いない事も手伝つての画面の横ゆれ、フィルター効果による夢幻的な感覚、部屋全体が新聞でおおわれている事、黒衣の女が登場して男たちをムチ打ち最後に一人を切りさざむのに、何故か相棒の方は消えてしまふこと、ラストシーンで魚眼フレネルレンズを用いることによつて出された球形の情景、などを抽象してきて、それを前号の恒河沙の『若者論に異議なし?』に見られるような情況論と御都合主義的に野合させれば終わりである。その際、恐らくは作者が影響を受けているであろう劇作家、宮西計三のホモ漫画へと、呼んでおく。『ピッピ』を読んだことがあれば尚さら裏目読みはスムーズに運ぶであろう。英文研の合評会全盛時代に、痴人である裏目読み人間として勇名をはせたこの私の手際を開陳してみせるのも悪くないし、そうすれば、前号の『若者論に異議なし?』で、「全共闘の大衆論」「マルクスの母性回歸論」「高橋和己の心情論」「吉本隆明の自立論」「廣松革命論的前衛論」等々の誰もが知っているような論議の中に存つて、批評家的なエニ性を戦略的にか知らぬが押し出していた我が高校時代の友人D氏(Dというのには前号で使用されていた仮称)も、欠々に私の情況論が聞けておどろきの半畳打ちの機会が出来、喜んでくれるとも考えるわけだが、そうする為にはあと二千字のスペースが必要となつたから、今回は『ジャム』主筆兼監督の和住洋一郎氏の邪夢ぶり及びD氏の批評家ぶりに敬意を表するにとどめておこう。

○前号の約束を履行しなかつた事の陳謝  
前号では今号で四五本の作品と自らの『ミクロコスモス』に閉じ込めると書いたが、以上の記事が長くなり、今回は中止します。

(文進5A)

時代錯誤社からの

# アピール

我々の生活をおびやかしかつ国立大学の門を一層狭くする

## 学費値上げ反対!

ただでさえサークルスペースが不足しているときになんてこった!

物理倉庫とりこわし

断固阻止!!

### 主張欄 住民参加のアセスメント制度を!

昨年10月18日、鈴木都知事は環境アセスメント条例案を撤回し、その後住民を参加させないアセス条例を制定しようとしています。アセスは環境影響評価などと記されますが、公害を未然に防止しようとする点で画期的なものであるといえます。が、これも住民参加が抜け落ちると、乱開発促進剤として機能し、全く正反対の役割を担うものとなります。その意味で住民参加は不可欠なものです。我々は住民参加によるアセス条例の都議会上程めざしての直接請求運動を進めています。多くの皆さんの参加と支持を訴えます。詳しくは下記まで。 中定ESS南要気付 東大アセス期成同盟

# 物理倉庫問題によせて

後藤 嶺

あの老朽化した物理倉庫が、取り壊されようとしています。物理倉庫などいっても知らない人が多いかもしれませんが、学館の西側にあるプールのそのまた西側、9本の裏にある見るからにボロボロの建物で、その名と全く関係なく実はサークル部屋の集りなのです。ニューフォーク研、フォーク研、コロソノ、FDC、白バラ、琴曲研等の音楽系サークルや美術部などが入っています。いろんな所がいたんでいて、例をあげれば雨もりがしていて楽器類の保管ができない部屋があるし、昨年の台風20号の時など木の葉や枝が床一面にまきちらされたという部屋もある程です。実際、もしも建てかえてもらえらるというのなら喜んで賛成したいものです。

しかし、現実には建てかえてもらえらるどころか、そんな部屋でさえも取り壊し9本の書庫を建てるという計画があるそうです。では、なぜそんな老朽化した部屋にこだわるのか、といわれると、まず第一にあんなに自由に使えらる部屋が見あたらない、ということがあげられます。ニューフォーク研などでは、他に迷惑がかからないように、授業の終わったのちの午後6時から深夜まで、毎日バンドが練習しています。日曜日などは朝から晩までといっても言いすぎではありません。フォーク研も同じようです。駒場祭や五月祭の前になると徹夜で練習する人達もめずらしくないような状態です。百名近くあるいはそれ以上をかかえらるサークルですから、当然そのようになつてしまふのです。これがもし、一部でいわれているように、第二学館に移るとか、プレハブの部屋に移るといふようなことになつたらどうなるでしょう。まずプレハブなどということになれば、練習は不可能ということになるでしょう。現在でも他に迷惑がかからないように音を小さくして練習している人達が多いのです。それ

がプレハブのように外に音が響き放題の建物になれば、もう練習どころではありません。もうクラブ活動、サークル活動などやめてしまふというのと同じです。また現在つくられるといわれている第二学館に移つた場合のことを考えてみても、音楽練習場が二十も三十もできるわけはありません。それに練習場が困っているロック系やジャズ系のクラブ、サークルは、音感やB/R研など物理倉庫内のクラブ、サークルの他にも多くあります。そのうえ音楽練習場となれば、当然オーケストラの人達とも共同使用となることでしょう。そうなれば、現在物理倉庫に入っているクラブ、サークル全体の練習時間は当然減少することになるでしょうし、自由に使えないということも考えにいれれば全体としても減少する、ということになりかねません。聞くところによると、二日に一度、二時間だけというサークルなどもでてくることになりかねない、という状態たそうです。これを学外のスタジオなどで練習して埋め合わせるとなるとクラブ一つで何十万という出費になつてしまふます。現在でも練習時間が少なく困っているバンドは多いのですから当然のことでしょうが、そんなお金が出るわけがありません。駒場祭や五月祭でのロックやジャズの演奏——もちろん、グラウンド、フェスティバルのような催しも含めて——は望めないということにもなりかねません。

第二に、クラブ、サークル活動の意味、いちづけの問題です。たとえば、実験室や図書館や教室等が取り壊される、などということはどうも考えられませんが、たとえば教室が取りこわしになり授業ができなくなるなどということが想像できるでしょうか。なににクラブ、サークルでは同様のことが現に起こらうとしているのです。大学にとってのクラブ、サークル活動というものは、研究・授業等よ

りはるかに劣っていて、なくてもよい。というもののなかででしょうか。あるいは大学のおなさけやおめぐみにより、学生がやらせていただいているものなのでしょうか。そう考えていないのなら、取り壊しがあるとは考えられません。現に物理倉庫跡には、9本の書庫が建てられるそうですから、9本横に旧化学実験室といわれている現在使われていない建物があるにもかかわらず。

第三に、もし物理倉庫内のクラブ・サークルが全て第二学館に移ったとすると、第二学館内の多くの面積を占めることになってしまいます。音楽系サークルについては先に触れたとおりですが、ロック系ジャズ系に限らず、オーケストラや合唱団の人達にとっても喜ばしいことではないはずです。また美術部の人も自由に使えないということでは同様でしょうし、何よりも今まで部屋を持たなかったクラブ・サークルがまたもや締め出しをくうということになるでしょう。物理倉庫内クラブ・サークルの人達もそんなことを嬉しく思はずがありません。

現在、取り壊し反対の署名を行っており、またこの問題に関する連絡会もできましたが、それも個人参加でそれほど大規模なものだといえない状態です。しかし、一度良く考えてみて下さい。明日はあなたの加入しているクラブが、サークルが——もちろん文化系にかぎらず体育系にしてもです——部屋を取りあげられ、練習場を失うかもしれないという事態になってしまうわけです。前例を作ってしまうわけですから、問題は身近にあるのです。決して他人事ではないはずです。同じ駒場のクラブであり、サークルなのですから、それでもいい、しょうがない、という人はかまいませんが、そうでないあなた——この恒河沙を読んでいる殆どの人が含まれると思うのですが——はこの問題をもう一度よく考えて、意志表示をしていただきたいと思います。

(79) Ⅱ

## 募集

### 編集部員

ならびに

### 原稿

この度、時代錯誤社でも2年生4人が本郷へ去ってしまうことになりました。

そこで、どうしても新人社員を求めたいのです。編集の仕事はシビアだけれど、できあがった恒河沙を手にした時の感激は毎月胸熱くなるものがあります。読んでみて面白いなど思った方、やってみようかな、なんて思った方、昼休み、生協前で販売している社員に気軽に声をかけて下さい。家族的ムードの我社で生きがいのある暮らしを。(労組あり、賃金獲得闘争中)

時代錯誤社では皆さんの原稿を募集しています。馬向場の地に1年向暮してきて、ふと考えたこと、感じたこと、腹がたつたこと、皆さんの経験としてぜひ残しておきたいこと、何でも結構です。又、今回の全社あげての特集記事に対する感想、支持のお言葉 etc……もぜひお寄せ下さい。お待ちしております。

- ・400字詰原稿用紙の使用希望
- ・メ切は3月20日です。
- ・宛先 〒157 世田谷区岡本1-3-5-101  
住所変わったよ 鎌形方 時代錯誤社

# 結婚しちゃおうかな♡♡♡♡ 小野孝子

人が働いて自分の生活費を得て生きてゆく……あたりまえのことじゃない。でも今の日本ではこれはかなり異常という事になって  
いるらしい。こと女の肉題となると。

女が働くってそんなにふうじゃないことなの？女が働こうと思  
うとどうしてこうも障害が多いのか。

職種は限られ、給料は男の半分、臨時雇いやパートタイマー……  
働き続けようと思えば結婚を、子育てを諦めざるを得ない  
職場……段々現実の壁がみえてくると、結婚した方が楽かなあ、  
と思えてくる。

女なんだから早く結婚して幸せな家庭をつくって……という行き  
方は、私はしたくなかった。幸せな家庭、なんていうもののギマン  
性を知っていたし家にいたってつまらない。男と同じように社会に  
出て活躍しなさい、と母は勧めた。結婚を最終目的と夢みている友  
だちをみれば、家庭でくすぶっている主婦といわれる人たちをみて  
は、何てバカなんだろうと軽蔑していた。

だけど、最近とても甘かったんじゃないかなあ、と感じるようにな  
ってしまった。自分が頑張ればそれですむんだらうかって。小さ  
い頃からことあるごとに感じていた女の身の受ける差別。自分だけ  
はそこから脱け出せるといった幻想を追って、自分が脱け出せた時  
差別は見えなくなるからそれでいい、と思っていたんじゃないか。  
そんなふうに悩むようになってしまった。

大学のことだった。女で大学に来られるのはごく限られた層  
だったことは初めからわかっていた。女に学内はいらない、女なん  
だから短大にしなさい、そういう世間の攻撃に敗れた女は、そして  
自分からそう思っている女は、初めから大学にいない。戦前は男だ

けのものだった。大学が女にも内戸を開いたからって、決して男女平  
等だ、機会均等だ、なんていえない。受験の時から、女は理系には  
むかない、とか花嫁修業の学校にしなさい、とか親に言われたり教  
師との面持ちで言われたり、級友に言われたり。入学してみれば、そ  
う、女はそもそも大学にいるはずのないものなのだ。女子トイレの  
少なさ、教師の差別発言、サークルに入れればお茶汲みや洗濯……そ  
して女の感じる独特の居心地悪さは、結局、学内、教育から女が排  
除されることに原因するんじゃないか、と気がついた。すぐに私  
も、「家庭科」に代表される男女差別教育体制の中で女が大学に行  
けるのは特殊なこと、と思わされてしまっている。「女の子はかわ  
いければいい」などと言う教授に人権の定義なんかきいて、どうし  
ようもない矛盾を感じ、私の求めていたものは何だったのか、と悩  
まざるを得ない。

いわゆる優秀な女は男に伍してかっこよく活躍しているようにみ  
える。だけど女の上昇はむずかしい。並の男の倍働いてやっと認め  
られる。私の描いていたのは、男と同じ給料、同じ待遇の得られる  
数少ない職をめぐって、努力するといえばきこえはいいけど、結局  
は他の女を蹴落とすことじゃなかったのか。男と同じにやっっていく  
ためには、結婚もしない、子供もじゃまだからいらぬ。そんなふ  
うに、女を差別する社会にまんまとのせられてたんじゃないか。女  
子学生は努力して能力をのばすか、成績が悪ければ、そしてがんば  
れる自信がなくなると、諦めて結婚してしまおうか、と一人、で苦心  
する。そんな状況の中で、社会の構造がおかしいのに目をつぶって  
自分だけはエリートとして上昇しようとしていたんじゃないのか。  
家事も子育ても老人の世話もすべて主婦の責任、そういうつくられ

た通念の上でしか回転していかない社会はおかしい、と口では批判しながら、私はそうならずにすみ安全地帯に避難しようとしていたんじゃないのか。そんな反省が出てくる。

### 今労働基準法改正、男女平等法制定のことが問題になっている。

初めは、政府もやっと本気になってと大きくみだしたと思って喜んで来たけど、どうも見方が甘かったんじゃないかと思うようになってきた。政府のいう男女平等っていったい何だろう。現在ある女だけを対象とした保護規定は、男女平等の妨げになるから妊娠、出産に關するもの以外は廃止するべきだ、というのだ。「残業制限、深夜業禁止をやめる。危険有害業務制限をやめる。生理休暇を廃止する」初め私がこれをきいて歓迎したのは、本来労働条件の上で男女差があるべきではないし、労働の場に限らず社会のあらゆる面で性別だけを理由とした行動規制は性差別だ、と感じていたからなのだ。

しかし、どうやらこれは理想状態ではこうあるべきだ、という先走りすぎず、現実を見ていなかったようだ。

結論からいえば、保護撤廃で恩恵を受けるだろう層は女の中、でもごく一握りのエリートで、大部分の女にとって働きにくくなるだろうということだ。

政府は保護をなくす理由として、働く女、特に既婚者がふえ、就業分野も拡大したから、といつている。確かに全労働者の三分の一から二分の一を女が占めるようになり、その6割は既婚という数字が出てくる。しかし、働く女がふえたといっても、ふえてる中味の多くは、パートタイマーとか臨時職とかいわゆる不定雇用で給料の安いもの。就業分野が拡大したなんて、まわりをみてもそんなの疑わしいことはすぐわかる。実際働く女の8割以上が事務(いわゆるOL)とかライン労働(ベルトコンベアの工場労働)とかサービス業のどれか。

今女の一生は「ライフサイクル論」とやらにまともめられている。

学校出たての若いうちに働いて、結婚あるいは出産で家庭に入り、あるいは何とか独力で仕事と家事を両立させ、子供の手がかりからなくなったらパートに再就職……。今ある保護がなくなったらますますこういうパターンにはまらざるを得なくなるだろう。家庭責任が女の一方的負担となっている今、労働条件の悪化、たとえば長時間の残業は、子持ちの女を働けなくし給料の低いパートに行くしかなくす。深夜業解禁は、今でも繊維産業や電気器具の工場では、二交替制のひどい労働条件で、勤続2年とかる年とかで、若い女の労働力が使いすてられている状況を、悪化させるだろう。

こうした中で政府の考える平等法というのは結局、家事とか育児とかの心配のない「能力」ある女が男と「平等」に働く一方、子を抱えた女を「能力がないから」と、しかもそれは差別ではない、と法的にも認める形だ、ますます無権利、低賃金に追いやるものではないか。

今、男は働きすぎ、家庭生活にかかゆる負担は女にかかりすぎている。男が無理な労働をして生活をすく破壊されているのに、そういう認識がなさすぎる。女も男も健康を破壊されるほどに働かされるのが「平等」なんておかしいと思う。

自分一人で頑張るつもりでも、障害にぶつかって一人で悩んでしまふ。自分の「能力」を頼って競争しても、こんな競争が自分を抑圧するものだとかわかってても、大学の肩書きを武器に世渡りをしていこうとする私たち。こういう分裂をのりこえようと、大学を向い直し、自分のあり方を考え直してみよう。

………でもやっぱり、結婚しちゃおうかな。

# オモロイことはないのかね。

N氏のらくがき帳

そのI

駒場にたたずみ、ふと思っっている皆さん、明けておめでとうございませう、なんて、ずいぶん流行遅れのことばを、の。けから言わしていただいたのですが、本当に年は明けたのかね、年が明けて何か変わった事でもあったのかねー駒場が女子大になってるとか、さあ、(こまてい)かなくとも現有勢力の質がもうチラッとして向上するとか、男にした。てワタシの心をときめかしちゃうような奴が現れ出るとか何とか、授業も少しは面白くなるとか、授業も少しは面白くなるとか、原理が解放派と内ゲバをやるとか、コープが少しはうまくなるとかー何ぞ変、とらんじやないの、それでおめでともないわいな、何かオモロイことはないのかね、こんなダライイ日々から我らを連れ去ってくれるようなオモロイことは、何も無いのかね、なんて声が駒場の中に、渦巻いているようなので、明けておめでとう、を言うのも思わず気がひける駒場のこのごろです。

だけと考えてもご賢なさいな。オモロイことなんて、ボケツとしてたら降ってくるもんわけじゃない。オシの生活何か変わらねえかなあなんて言うだけで何かスバラシイ事が起こるのだ。たら、筆者にもピンクです。(ウウツ)つまり、何かオモロイ事をお捜しの方はそれなりの努力をせよあかん。と言ってもちよっとした努力なのです。ちよっこの好奇心とちよっこの俗物根性。それで十分。あとはいつも鼻をくくんくさせて、ここぞ!というときに世界の裂け目を天の岩戸よろしく「えいやッ!」と開ければよろしい。そうすれば遠く世界が目の前に開け……というふうに行きたくても

必ではななくバラ色の未来が訪れてもいいはずなの(スイマセン)

ないのですが、ここに、駒場においてけなげにも、そのようなことをやろうと試みていつも失敗ばかりしている人間もおりますので、その男、N氏をご紹介して皆様のご参考に供する次第です。

このN氏、掛け声だけは勇ましいのですが、ときどき空回り。好気心は人一倍強いのですが、その俗物根性も鼻につくといった手合。これから始まりますN氏のらくがき帳からの写し、皆様でよく取捨選択して、皆様の生活を豊かにする糧にしてください。ばとN氏自身も願っております。

へスモウ中継をFENで聞こう!

FENという名前を聞いて良いイメージを思い浮かべる人は余りいないのではないでしょう。うか。いわく、進駐軍(この名残り、軍用放送、アメリカ帝国主義の手先、そして日本で唯一の英語放送。この英語放送というのが曲物で、だいたい何を言ってるのか良くわからなくて、聴いていても欲求不満になる。てくる。思い出さなくてもいい語学的劣等感がニキニキと芽生えてきて、聴いているうちに腹が立ってくる。ところが、日本人のくせに「オレ毎朝FENのニュース聴いてるよ」なんて得々と鼻高々に言う野郎がいて、ぼくなどは語学的劣等感の裏返しもあり、「このメリケン野郎、非国民。それでも日本人か?」なんて三島由紀夫先生(そう言えはあの人も劣等感の裏返しだった)も真青な事を言ってしまったくなるので、へも、とも、FENはアメリカ人にも馬鹿にされているのであて。

以前よくアメリカ人の知人に「FENをバイブルのように崇拜して聴いておる日本人がいる」と言つた時、そのアメリカ人はしたり顔で答えたことには「FENとバイブルとどっちがクダランが微妙なところだね」

ところが、そのFENが相撲中継をやっているのを御存知でしょうか。これは数有る相撲の中継の中でも群を抜いて面白いものと言わねばなりません。FENといつても英語力は余り必要無し、テレビがあれば良いのです。(国技館で見れば、だいたいからして解決など無いのだ)それに英語と日本語がチャンホンなのであって、(力士の名前だ、て英訳できないわけではないが)例えば、千秋紫 *the Mienoumi* tries to establish the *Rensho* record as well as *Zensho-yusho*.なんてかなり珍妙な英語もあり、相撲中継の中では最もハナモケラ的な面白さを持つ、たものと言えそうです。あと、結びの一番目 *Wakanohana* has a *Problem*. と言つので若乃花が土俵上でいった何を悩んでいるのかさては、若狭父か、と思つと、*He can't grip the belt at all.*

何だマワシが取れないという *problem* かなんて大笑い、こつこつ楽しみも尽きません。ただ、この放送はオジサンが二人でやっているのですが、どうも相撲ファンの「変なガイジン」二人という感じで、アナウンサーとしてのプロ意識が足りないのが玉に傷。北の胡が貴ノ花を押し潰した(らしい)時も、NHKの北出アナ(ちなみにこの人は去冬まで教養の助教授、今年から教育学部教授の堀尾輝久氏の実兄)なう「寄り倒し」とか、大迫力と言つたところを、二人揃つて北の胡の余りの迫力に「*オー、オー*」と感心しているばかりで聴いてるほうは何が何だかわからず、「や、ぱりテレビと一緒に聞けというわけか。軍用放送と国営放送との黒い癒着か」などと、要らぬ勘ぐりもしたくなつてしまいます。しかし、それだけに本音が出やすく、チェコスロヴァキア友好杯の授与の時など、「あんなどにかいクリスタルガラスを本当にあげるわけがない、本当はすげー小

さいのを渡しているに違いない」などとNHKでは、とても、味わえぬ面白さがあり、まさに「同じ土俵の上に立って」比較文化を志す人には絶対のお勧め品。FENに「君が代」が流れるのも実に感動的で笑い転げてしまつこと請け合ひ。なお次の放送は五月場所。(FENは30kHz)

へ先生もさみしいのよ！  
さて、試験も迫つてきて、皆さんコピーにまたコピーに、そしてまたコピーにとお忙しいと思いますが、その中で強力な試験対策を一つ伝授致しましょう。これは理工で起こつた実話なので心して聞かれたい。

ある理工のクラス、四月に時間割を見たところが解村が何とオニオニ撃墜王のN教授。先輩に聞いても、どの先輩に聞いても、どの先輩も「思い出したくない」と言うように首を横に振るのみ。クラス中は下パニック。とここまででは良くある話ですが、この先がこのクラスは違つていたのです。「先生をクラス合宿に呼ぼう」と誰かが言い出し、最初は「オニと一緒に」と言つていたクラスの面々も「よしイチカバチか、火中で乗を拾う覚悟だ」と全員一致で教授を合宿に呼んだのです。ところがこの教授「今まで何年も教授をやつていたが、ここまでよく受け入れてくれたのは君たちだけ」と涙を流さんばかり、そしてテストには四十点のゲタノ(こんなうまい話が本当にあるのかね)

でも、良く考えてみてください。誰も知らぬ教室にはいつて行つて、ひとりカツカツと黒板に向かう教授の孤独さ。そして、そんな教授と生徒の関係を最初から敵対するものだとか決めてかかる想像力の貧困さ。「ぼくたちをひとつの人格として見てほしい」という前に教授を一つの人格として見ることを。

まなごしを向けて敬しいと叫ぶ前に自分がひとにまなごしを向けていたかを問ふこと。背水の陣の試験対策の裏には、そんな人間関

彼の真意が秘んでいたのです。ちよ。と言つた話だと思いませんか。

〈出た、恐怖の人間カラオケ〉

今月のお勧めレコードはこれに尽きます。昨秋来日した英国のキングス・シンガーズを「驚異とするならばこの少年探偵田の演奏は手に「恐怖」サウスポー・与作など大曲を収めたこのレコードは芸術性では劣るかもしれませんが、それに代わる強烈な下品さがあり、この下品さは何物にも替えがたいものでこれが600円とは実に安い。革マルとの対決で全くユーモアの無さと動脈硬化を晒け出してしまつた民衆の諸君たちは、こういう視覚教材で、鈍磨しきつた感性を鍛え直すべきなのではないでしょうか。

レコード番号はCBS・ソニー OOSH 648

(着道2年)

### ☆読者より☆

クロスワード裏の御意見も最近とみに充実にうれしい限りです。

当のクロスワードに關しては「はるばる九州から商品くれ。」

「クロスワードの難度が低下した」此、今回はいかかです。編集部は自信あるんだけど、内容に關しまして。

◆原稿をもつと広範園の方に書いてもらつたら良い。社会系サークルの方、ミタカ定タテカン製作者此。

◆解放派と革マル派と民衆(ついでに原理研も)をよんで討論会を開くには、もろもろなぐりあいにたらないように代表1人ずつで、おもしうと思ひますよ。まあ、これは不可能でしょう。うから彼らに之れを自分達の主張してゐる事、他派と争つてゐる理由などを適当な長さを書いてもらつては、彼らが確固とした主張を持つてゐるかどうかがよくわかると思つてゐるのですか。

等々、革命的(?)提案。

◆いろいろ面白いことかいてあるのですが、もつと未だつ二人だ

鋭さに欠けているように思ひます。それと恒河沙としての意見をもちと率直に述べた方がよい気がする。

女は長いのが要約ですか。

◆恒河沙はある意味では駒場の小世界への被筆者意識に安住してゐるのではないか。恒河沙に求めらるゝてゐるのは詩人たること、即ち時代の見えない部分を掘りおこすことではないのか。恒河沙が意図的にコマバ内の世界に閉じこもつてゐるのはわかるが、そこに「新宿の公衆便所の下に満開の桜をみる想像力」を導入しないのなら、まさに「自分のしがらみの中に埋没」してしまひ、「新しい文化の建設」等単なるお題目になるのでは。刺激的なことを何げなく書く真の大胆さが欲しい。そう考えると駒場の中のみをみつめていくのはどうなのだろう。コマバの中を掘り返すことによる、もっと大きな世界のひっくり返してはごまかす可能だろうか。読者をもしのご取知らすと、掘返といふことをせよとしたかさが問われたい気がする。鋭い指摘、どうもありがとう。なまこの方は、我々が「誰もよんでくれない」と泣いてた「東大を闘う」を評価して下さいました。

最後に衝撃の事実、社長Kに対する女の熱い愛の告白は男であつた。

◆「前號で珍妙な便りを出したために、私とK氏とがあの關係だとの噂が流れて困つてをります。世の中に男は星の數程あるといふのに、なせ、この面喰ひの私がヨリにヨツてK氏ナゾ……Kさん、とにかく辯護してヨ。」  
「學友會加盟 御目出度御座い」  
「ふも、意見が學友會の影響を受けたリせぬよう。」  
「學友會評議會でヨリ算じんかどうでもイイヨ」といふG氏に対し、學館でヨリ算じせぬとすりサインインタと叫んだ。氏の行状は恒河沙の個性を如実に感じました。うれしく、モウ、アノン!!」  
「元、掻くめえ左派委員長現、K氏ファンクラブ初代会長(略称KH)」

なま、個々の原稿への批評もおまちしこびります。では又、【尺】

# 雑感

。。。。。

# SHO

僕たちの世代っていったい何だろうと思う。今年成人式を迎えた職場生も多いことだろう。

——原宿ファッションとかデイスコとかアメリカ文化とか、マスコミに現れぬ若者像には大きな空白部分がある。いまいわれる若者文化は、商業主義が市場創出のために描いた虚像であり、そういうものではなく、現代のふつうの人のものの感じ方であり、ふた生活があるんじゃないか——とは、ある映画監督の感想。

ではも、とありふれた生活かどんなものか。

——最近の若者は自立心がなく、親の過保護のもと、ひ弱に育っている。冒険ニ若者の証明だと感じても、競争の激しい世の中を目の前にすると親の家にはたろかいと考える。理想よりも現実を大切に。就職についても「寄らば大樹のかけ」の気持ちで、時代の急激な変化から守るだけ身を守ろうとする姿がみられ、生まれ故郷に職を求める傾向が多い——とこはある新聞の若者の意識調査。

僕は自分というものを通して考えこみたい。

僕たちの世代は、いつも自由を求めこいると思う。しかし、その自由といつても、自分の何かを犠牲にして勝ちと、た自由なんかの意味では決してこない。要するに自分で自分の好きな事を決め、好みをは、きりとさせ、それを他人に邪魔やいびきにせりたいたいのだ、と思う。そこでは、好みと同義の価値という言葉が用いらぬ、自分の価値判

断に基づいて、自分の最も価値を認めるものには好むを惜まず、価値を認めないものには全く関心がない。

僕のことについて書いてこみよう。

自分の思うままに生きたいと思う。それは、冒険心に富んだ既成のものからはがれた、という意味でもなければ、親からおしつけられたものに対する反発からくるものでもない。自分が好きな道を自分で選びたいと思う。将来の設計をたこる時に、それはどんなに安全でかつ平穏なものであろうと、反対に収入も一定せず住むにも困るかもしれないものがある。でも、あまり関係がない。

ただ、例えは何かになりたいたと思った時に、自分の頭が悪く暗記能力に欠け、その試験に通らないからなれない、なんでもかいいいだから、そんな事のない様に勉強してきた。自分の探求の範囲は、まぶさくもたない。その中から本当に好きな道を選べたら、と思う。でも自分の本当に好きな道、何だろう。自分かやりたい仕事、何だろう。そんな疑問を解決するために本を読みたい。いろんな人生と関わり、こみたい。勉強したい。

親父が僕に何を希望してこいるのか知らないし、知ろうとも思わぬい。おれ自分、身勝手なものだと思ふ。でもやはり、自分の人生だ。ただ、親の老後の面倒くらいはこせらるくらいにはなりたいたい。

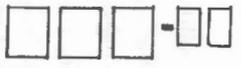
自分の判断で何をも決めたいと思う。そのためには、いろんなものの見方を知り、いろんな価値判断の基準を知、こおく方がいいと思う。確固たる自分と確固たる自分の判断基準をみつけるために、



年賀広告

劇団

夢の遊眠社



謹んで新春の御慶びを申し上げます

昨年中は多数御来場いただきまして

あつく御礼申し上げます。

来年も夢の遊眠社の公演に温い御声援

をお願い致します。

尚、次回公演は3/22(土)の毎週土日の

野田秀樹作・つばねおじよす「三万七千光年の旅」

と決定致しましたのでここにお知らせ致します。



みかけは押しつけられた勉強もするのだ。  
 “自由”という言葉には、他人や条件などに拘束されてたくない  
 というニュアンスがある。他人が言った事に対して、すぐ自分をい  
 るかえしたりはしたくない。それは、ある場合には意地となり、自  
 分なりのもの、いいと思ふものを見失わせてしまう。  
 でもそんな風に好き勝手な事をしているらぬのも、やはり学生た  
 からだ。親の仕送りに支えられた一人暮らしのせいだろう。自  
 分の自由のうすべらさをし、ているだけに、もっと自由を求める  
 のかもしれない。好き放題の事ができて、好きなだけ食べべ寝る、  
 音楽をいこ……そんな事を考えると、自分のちっぽけさ、夢のな  
 さを痛感する。僕たちは小さな幸福を望んでいる、と言われるけど  
 小さな城の主人でありたいと思ふことは、そういうことなのだろう。  
 (53生教養進学内定)

- 1等 為ヶ井強 サマ
- 2等 高田ハ州夫 サマ
- 3等 萩尾珠美、堂前雅史、得丸公明、友安昌幸、上田紀行

以上の外、張寿川、加藤和彦、宮地貴子、野坂佳生、大橋一裕、宮崎恭介の皆さまも正解でしたが、残念ながら選外になりました。1人だけ答がまちがっていましたがみなさま気を落さず、No.10に挑戦してみて下さい。

近頃クロスワードが易しくなりすぎて、当社にも、もっと高級でムズカシイのを出せ! という声が届いていました。そこで、今日のNo.10では昔のムズカシサではないにしても、正解者が10数名もは出ないように、適度のムズカシサにしました。知性と感性に自信のある方、一つ挑戦してみてください。

ウ	マ	ノ	ミ	ミ	ニ	ネ	ン	ブ	ツ
イ	ガ	ミ	ア	イ	/	コ	/	タ	イ
ノ	リ	/	イ	チ	ミ	ヤ	ク	/	シ
オ	カ	ミ	/	ヤ	マ	ナ	シ	ケ	ン
ク	ド	ウ	リ	ン	/	ギ	/	ル	/
ヤ	/	ラ	イ	/	シ	/	タ	ン	カ
マ	ハ	ト	マ	ガ	ン	ジ	イ	/	タ
/	ス	モ	ン	/	ビ	ヤ	ホ	オ	ル
オ	カ	カ	/	ニ	ガ	ツ	/	ニ	シ
ク	イ	ズ	グ	ラ	ン	プ	リ	/	ス

奇怪 クロスワードパズルNo.9

# ぱらあろがす

## 茶坊主

セミの帰りに電車の中で、書評を書かないか、と大ちゃんか言っ  
もんだからつい、うん、と答えてしまっただけだ。困った。何を書

こうか。向こうから書いて下さい、と頼まれたならまだしも、ちよ  
っと水を向けられた位で引き受けてしまふ。それで呻いていた所で  
全くサマにならない。こうしてゐるうちにどんどん時間がたつてゆ  
く。夜型の生活なんぞ阿片みたいなもんで、一遍やり出すと止まら  
ない。また明日から送戻りか。せっかくな朝型の生活を取り戻したの  
に。といつてもきのうのことだけだ。大ちゃんは頼りに似合ひすい  
やさしい男で、自分の友達が万一挫折した時のことまで考えて、ち  
ゃんとス・ヘアの原稿を書き上げてゐる。それを徒勞に終わらせるの  
も何だが悪い。だからといつて書かないのはもっと悪いんだ、と  
彼は言う。あんまり無駄な事はかり埋め草みたいは書き連ねるのも  
飽きたから始めた方がいいかな。

初めは南高健について書く気だった。は、キリ言つて南高健なん  
てもう大したことかない、と気がした。ところかど、こい。したた  
かな。そして充実した存在だ。巧まざる之間からほとぼは熱え  
うらむと唸つてしまふのだ。思ひます。どうしても鼻につくところ  
あるのだけれど、それでいへば自分から離せなくなる。とこもじや  
ないか。一は書評などと称して見解にお付き合ひ願へる相手ではな  
いのだ。参。た。とにかく南高健はこのまま読み続けるとして。代  
役を授けねばならん。南高から受けたショックの、いわば緩和剤と

して着て着いて読めるような、僕の趣味に合つたものを選んでみた  
らしいんだらう。

セルトンの短論に「チップス先生さようなら」というのがある。

MGの映画化されたはずだけれど言うまでもなく甚だよろしくな  
出来である。原作に感ぜらる雨の午後にいれた紅茶の香りの様  
な雰囲気をもつくり土砂降りの日のゴム長の中の匂いに換えたのか  
あの映画である。従つて原作を読まねばならない。内容を簡単に説  
明すると、第ユ次世界大戦前後イギリスのパブリック・スクールを  
舞台に、1人の男の教師の退職とそして静かな死までを描いたもの  
である。語り口は落ち着いた風格を備え読者を惹きこむ周囲の喧嘩を忘  
れさせるに足る。(ついでながら菊地重三郎氏の訳は大変な名訳と  
言つていいと思ふ。)といつて読みながら胃のもたれるような重さは  
なく、あくまでも軽妙洒脱、"かみ"の境地そのものである。脂

気の全く無いところか更によろしい。それから例へば「罪と罰」  
みたいは全身こけブタの脂身といつた様な大作と違つて、こつこつ  
ちよつとシツクな小説に没入するには無台装置ともいへばきものか  
揃つていなくてはなりません。季節は仲秋、憂うつな午後、外は驟  
雨。本の傍らには紅茶など置かひて観望としたダーシリンの香りが  
鼻をくすぐるわけだ。(もういへば文中にチップスか何種類もの  
紅茶をフレンドし客に供する場面がある。紅茶研究会を主宰する  
私に言わせてもらへば、紅茶のフレンドというのは難しいのです。

珈琲なんかの比ではない。そういう雰囲気の中でこの小説を楽しんでこそ、擦り減らされた心の埋め合わせも出来るというものです。一度試してごらん下さい。

向だが最初の企みとまるで違ったコトを書いこしまったけれど、これではよいかと思うのです。僕は。大体、皆が読んでいるとも限らない本について書評と称して、自分にもは、きりぬか、ちやいな漢語外来語を操り、本について一かどの事を論じた様なつもりにな、てい書評予という輩がどうも気になぬわいのです。(皆が皆ぞうだといふ暴言は吐きませんか。予定通り開高健について論じていければ僕も知らず知らずその弊を繰り返しているかもしれません。ヤッキ読んだ開高の毒かもう回って来たのかしら。眠くな、て来ました。今日は体首更技があります。もう寝ることにします。

(女生工)

お詫びとともにお願い

申し上げます

今号10号は、緊急特集、駒祭以来の解放派をめぐる一連の動きについて、他、大幅にページ数が増加いたしましたので、やむを得ず特価180円にて販売させていただきました。諸物価値上りの折、これから文字通り必要最小限の価格を努力いたしますゆえ、今回は御容赦頂きたくお詫びとともにお願い申し上げます。

時代錯誤社 敬白

## 発刊に際して

駒場にたらずみ、ふと思つ。自分は一体何なんだろう。何故ここに居るのか。駒場てどんなところだろう。実はこんなあたり前のことを知らないままに我々一人一人は通り過ぎていく時に身を浮かべているのではないだろうか。

「自分が身を置いている場所を直視しよう。」ここから恒河沙は出発する。駒場を見つめ、その文化をたとえわずかなものでも、自分自身の基盤として大切に、ひいては駒場の文化を積極的に形成していこう。これが時代錯誤社に集まった我々の考えである。

もちろん、文化はそこで生活する我々一人一人が支えていくものであり、決して、政治的なアジェンションや、行動によつてのみ創り得るものではない。それでいて文化は、それらすべてを包摂し、溶け込ませてしまう総体として存在する。一人一人のささやかな行動、それが実は文化の最大の担い手といえるだろう。

しかし現状を考えると、一部の党派や、大きなサークルを除いて、駒場にいる個人にはコミュニティ、ニケーションの手段が与えられていない。これでは充実した文化内容は維持出来ないのではないだろうか。恒河沙は駒場の文化を、ひいては、我々の時代の文化を最底辺から支えるものとして、無検閲、無修正を原則としてその誌面を広く公開し、コミュニティの中、新たな文化を建設していきたいと考えている。

(一九七九年一月)

☆正解者の中から抽選で7名様<sup>に</sup>超豪華賞品を差上げます。

1等  
超高級目覚し時計 (1名)

恒河沙名物 奇怪のクロスワードパズル No.10

1	2	3	4	5	6	7
8					9	
10			11		12	
13		14		15		
	16		17		18	19
20	21			22		
23		24		25	26	27
28			29		30	
		31		32		
33				34		

2等  
超高級パーカーボールペン (1名)

3等  
恒河沙オ11号 (5名)

☆正解はP.67の解答用紙でお送り下さい。締切は3月31日です。

⊕ ACROSS

1. ボイコット?
6. 胴うー?
8. やけ酒
9. まつ
10. だるまのおメメ
11. から。風
13. KDD
15. アリと幻の大勝負
16. 大統領選挙
18. 牛豚の末路
20. Culture Shock
23. バルカン半島
25. 神マの断罪
28. 飴。飴。飴
30. 変法自強の康サン
31. 火木金日じゃない
33. くりいも
34. 田淵がやると大地震

⊕ Down

1. みっちゃんか自らの排泄物をなめる理由
2. ネギだけ
3. 女王の諸いたずら
4. 三回転
5. コンチネンタル
6. ランドリー
7. 一切含まれておりません
9. トウキョウトクキョキョカキョク
12. 二百海里時代の蛋白源
14. のみ
17. 学生街の喫茶店
19. 風紋
21. 景気づけ
22. 元。清
24. 小枝を大切に
25. メキシカンスピリット
26. 13~14才
27. 狐独なポールマッカートニー
29. 澄んだみず
32. 呼ばせてください。

新社屋完成

送り先

住所が変わりました。

〒157 世田谷区岡本 1-3-5-101

鎌形方 時代錯誤社

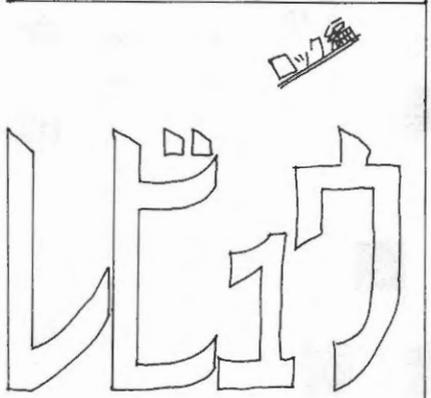
<55>

ジャパンという点、髪の色を極彩色に染めあげたアイドルロックの旗手というイメージがあつて、また「ジャパン」という名自体、チープロックのように日本市場を意識しているのが露骨に見えてあんなに好きじゃなかつた。

そこで今度の3枚目のアルバムである『クワイエット・ライフ』を聞いてみると、彼らのまつしたイメージがどうしてもあらずもがなのように思えて仕方がない。ミーハーバンドのイメージが正當な評価を妨げるおそれがあるのだ。このアルバム、非常に良いのである。

まず、ミーハー人気を中心であり、同時に音の面での中心でもある(順序が逆かもしれないけど…)デヴィッド・シルヴィアンのヴォーカルが実に心地よい。低音が実に魅力的であり(フランク永井みたいだ)それを生かしたユニゾンのバックンクがおもしろい。また起伏がおもしろい、ヴィブラートと音の抜きさへに特徴があつて、中世魔術的というかタロットカードのイメージというか、そんなものを与える。

ところで、A面1曲目はシングルカットにもなつた「クワイエット・ライフ」であるが、その冒頭などはもうクラフトワークであり、



ら疎外されていた音楽評論と偏見にもとづき、今ミスの巻。ではどうぞ!

# ジャパン クワイエット・ライフ

全体を通して、シンセサイザー(或いはシークエンサー?)とギター等による同じフレーズの繰り返し、というクラフトワークお得意のパターンが、ほうほうに見えられて、たいへん興味深い。(デヴィッド・シルヴィアンのヴォーカルがクラフトワークの亜流たることから救っていることは確かだけれど…)

もう一つ印象的なのは(たぶん)フレットレスのベースである。ポルタメントを多用して、アルバム全体を支配している不気味なるムードを盛り上げている。(要するに音程の不安定さがよいのである。)

私が最も気に入っている曲はB面4曲目(ラスト)のジ・アザ・サイド・オブ・ラヴだ。後半、ストリングスの上にファゴットとオーボエが乗っかるあたりは圧巻である。クラシックとの融合をねらつたものであるが、かなりの成功度をおさめていると言えるだろう。前にも書いたとおりテクノ・ポップ的な、非人間的というか機械的な印象が全体にかなり支配的である。彼らがクラフトワークのようにロックンロールする部分をなくしてしまうとは思われないが、その方向があることは確かである。バックの音の完成度(つまり中で自由に動ける部分の小ささ)とデビッド・シルヴィアン(へそしてフレットレスベースの人)の不安定なヴォーカルが実に奇妙な対照をなして、(つまりそれが彼らの社会的取り合いなのか?)そのアンバランスさを売物にしているといえるだろう。

残念ながら(或いは、素晴らしいことに)シングルヒットしそつなポップな曲が見当たらないというのは、彼らがアイドルからの訣別を打出したものと言えるだろう。しかしアルバム全体としての完成度は高い。売れてしかるべきアルバムであり、ベストセラーたる事を期待してやまない。

まあ、金があつたら聴いてみて下さい。

〔夏〕

行きあたりばったり

# エアロスミス

今まで、恒河誌誌面上が  
が遂に登場しました。独  
回はジャパンとエアロス

エアロスミス   
ナイトインザリッツ

前作は「ライア・アートルック」だったからスタジオ録音は「ド  
ローザライン」以来二年ぶりである。聞いてみて一言「すごいハイ  
ドロックの80年代にかけて、ロック全体がポップな、軽い、ソラ  
ヘビメタルという言葉に対して言えば、アラステティックの音に  
なっていく潮流に反して、まさに長髪族の反乱、いや巻き返しと言  
った印象が強い。(ジョーペリーがこのレコーディングを最後に抜け  
たそうだが、彼のラストアルバムというところでギター中心でケン  
ゲン押している。彼はすでにジョーペリープロダクトという新パン  
ドを結成しているようだから、彼の今後にも興味をそそられる。)サ  
テ、テクノポップにしろパンク系にしろ、皆短髪というのが一般的  
ルックスになってきている。特に77年ころからは、もうロング  
ヘヤーは時代おくれというのが感覚的であった。ロングヘヤーでキン  
キラ模様のジーンズに上着の前をはずけて汗タラタラというスタイ  
ルは70年代前半という共通認識が今や定着しようとしているこの矢  
先にこのアルバム、彼らの意識としては、ハードロックが崩壊しか  
けている中、何とか孤軍奮闘していかなくては、というところだろ  
うか。でも、ストーンズみたいに、楽天的ロックンロールとして用  
き直るわけにはいかず、かつブルースっぽくいじりやることもで  
きず、相当悩んだ結果として、このアルバムが出て来たのなら、ま

さしく正解と言いたい。(ロックシーン全体との連関でとらえた場合、  
はつきり時代錯誤的であるけれど) そういう過程でジョーペリー脱  
退ということが出て来たのならまさに皮肉である。すなわち彼ら自  
身の存在価値を自己に照射しつつ、確信をもって表明出来たアルバ  
ムだからだ。まとめて言うと、確かに昔に戻ったみたいではあるが、  
単純なワンパターンオールドウェイブとしてではなく、現在のニュー  
ーウェイブを意識しつつ、自分らを良質な、70年代後半の正統的リ  
ードロックとして再認識すると同時に、我々のシエネレージョン(ハ  
ツエツペリン、パープルで育った)に対して、アグレッシブな向い  
かけをなした、と言えるだろう。まちがいにエアロのベストアル  
バムである。

さて、注目されるのは、ジミーペイジのいたころのヤードバズ  
ナンバー「シンクアバウトナイト」である。ヤードバズ在いのジ  
ョーペリーらしく一心に弾きまくっている。エアロでのジョーと言  
えば、私はなんとむくつつかかるような、心地よくないリフのイメ  
ージがあったのだけれど、この曲では、ハードロックファンにはま  
さに気持ちよいフレーズを弾いている。今まで言われていたエコー  
のかけすぎというところもあまりないみたいだ。「キキータ」のイン  
ト口は何かストラングラーズみたいで、このあたりはやはりパンク  
を意識しているのだろうか。

「ドローザライン」は、売上げがかんばしくなかったみたいだ  
けれど、今回は日本でも売れそうである。もはや、確固とした自己意  
識を持ったハードロック最後の若とも言えるエアロスミス。ヴァン  
ヘイレンは音のかたまり的だし、キープトリックは音の流れると言  
える。よって二人称的意識を感じさせるのはエアロくらいだろう。  
皆さん買いましょう。

それにしても、ジョーペリー脱退は、ストーンズで言えばキース  
リチャード脱退だからなあ。どうなるのか、次作が心配だ。

# 同人誌座談会

## 今我々が書くといふこと

駒場には今、いくつかの文芸同人誌があるのだが、その状況は余り知られていない。今ものを書くこと或いは同人誌を発行することはどんな意味を持つのだろうか。11月29日、6つの同人誌のメンバーが集まっていた。

出席者(発言順)

- 田中 修 (駒場文学 78Ⅰ)
- 上村 進 (薔 78Ⅱ)
- 酒井 啓子 (童夢 78Ⅱ)
- 塚本 昌則 (東大文芸 78Ⅲ)
- 上野 一孝 (道祖神 78Ⅳ)
- 花岡 敬造 (腐触土 78Ⅳ)
- 司会 片桐 弘子 (本誌 78Ⅱ)

### 何故書くのか

司会 まず自分は書くこととどのよう  
に接しているか、を伺いたいと思います。

田中 今小説を書いているのは文章の幅  
を広げたからです。評論だけ書いている  
と表現の柔軟性に欠けるのではないかと思  
うのです。文で食っていくかはわからない  
が何らかの形で書き続けたい。

上村 自分の持っている世界を他の人に  
知ってもらうためには僕の場合小説の形が  
一番いいような気がする。文を書くのは他  
の連中が音楽やスポーツやったりするのと  
同じことで、文学の場合だけ「何故書くか」  
と言われるのはわかりません。薔にも  
特に文学によって身を立てようとするメン  
バーはいないと思う。

酒井 言葉の使い方を之通り考えている。  
一つは現状否定的な使い方、混沌の状況  
を切開く理解の手段としての言葉。もう一

つは現状肯定的、自分の理解したことを他  
の人に伝達する言葉の使い方です。

塚本 読書会をやっていたのだが、言葉  
がたわむれているだけで空しいのではない  
かという危惧が出てきて、それが同人誌を  
出すきっかけとなった。各自が自分の作品  
を持ち寄り、それを基盤とすることによっ  
て議論が噛み合い始めたわけです。

上野 最初俳句を作っていたのですが俳  
句とはワンショットの写真の様な凝縮され  
たもので、それをもっと広げてみたい。連  
綿する前にもっと若いドロドロしたものを  
書きたいという欲求にかられて詩を書き始  
めました。詩の語と俳句の語が同じ重さに  
なるような詩を書きたい。

花岡 中学の頃、死ぬことも生きること  
もイヤだった。だから死ぬことも生きること  
もない状態を保つことはできないかとい  
うことで詩にのめりこんだ。言葉の中に自  
分の生を密閉することに憧れたわけです。

# 各誌紹介

＊駒場文学……「文学研究会」が発行。メンバーは20人強。現在7号。庄司薫氏が昔初期の「駒場文学」を発行していたことは有名。

＊盗(たび)……メンバーは4〜7人。現在4号。特に方針はなく、自由に楽しくできぬはいいという感じで発行中。

＊童夢……KDK(駒場童話研究会。昔は駒場代返協力会)が発行。メンバーは20人強。現在10号。文芸雑誌ともいえず、劇画も載ったことがある。"Word"な面を使いっています。

＊東大文芸……三鷹書の読書会からできた。去年の駒祭で創刊、メンバーは7人。季刊をめざしている。

＊追祖神……「朝の会」が発行。メンバーは7人。現在4号。広告を取らない事を誇っております。

＊腐融土……「現代詩研究会」発行の純粋詩誌。メンバー7人。現在2号。生き方とかかかせる所で詩を書きたい。

大学に入ってから。社会への関心が今まであった社会への嫌悪と結びつきました。

現代詩研究会について言えば、クラスの間が原理研のデッチ上げ告訴に反対する立て看を出したことから始まった、それで随分と誤解もされたんですが。メンバーは詩を書くことは自己否定、広い意味で自分の位置を变革することに肉わって行くのではないかという点で共通しています。単に政治的なものと直結するのではなく、思想的に詩的に消化した形で取りこんで、沈化した文学的社会的状況乗り越えていきたいという、文学の外に対する欲望があります。

司会 「ことばへの生の密閉」と「社会への方向性」とは矛盾ではないのですか。

花岡 僕の場合、ことばによっての否定と政治・実社会への働きかけを2つに分けている。学生運動は華やかだったが文学的思想的に何も残っていない。それを理論的に取り入れて、新しい時代に対峙していきたいと思っています。

上野 森ぐための「職業」と生きることに関わる「仕事」の兼ね合いを書くことについてみんなに聞いてみたい。文学部へ来れば創作をめざす人に会えると期待していたのに実際は違った。上村君はさっき、音楽等と書くことを並列したが「書く」ことには特別な意味があるのではないか。自分

としては、仕事と職業を一致させたい。

上村 書かなくちゃいけないという動機が無いという意味でそう言ったんです。小説を書くには自分に蓄積された経験が必要だがそれがない。我々の小説は、現実離れしている。

上野 そこが書かなくともいいのに、何故書くのか。書くことが楽しいなら日記帳にでも書けばいい筈なのだ。活字にする事は全く違った意味を持つのだが。

花岡 今は切実感のある体験が持てない、小説の書けない時代だと思う。書くことと体験の背中合せの密着、つまり「書くこと」が体験」というような。昔は「文学」と。状況の2分法があったが今はそれが壊れたのではないか。今は、体験は無いがにもかかわらず書くこと以外何の確実性も無い時代だと思う。

塚本 その言い方でいくと、書きたいものがある。言葉はその媒介であるという感じだが、僕は始めにあるのも終りにあるのも言葉だと考えている。その中間は考えようがない。

上野 小説は内容と言葉の二面性を認める。詩は言葉が優先している。

花岡 小説の場合、言葉だけで純粋に行うことはできないのではないかと思う。言葉はもともと伝達の手段であり社会性を持つ。詩で言葉だけを純粋に構築しようとし

たら、マラルメのように意味を排除しなければならぬ。

**塚本** 言葉が社会性を持ち得る地点は、言葉が誰でも触れえるものとして存在する時だ。言葉の外に内容を探ろうとするのはおかしいのではないですか。

**上村** 意味を持たない言葉だけの純粹な構築とは言葉の持つ音やリズムの配列の芸術ということになるが、それでは音楽と同じことではないのか。

**花岡** いや、一つだけ違う。言葉は観念を選ぶから、意味を排除すれば言葉が原初的に持つ否定性が働か出す。例えば、記憶の中のコトバは意味を持たないわけです。

**酒井** 現代の詩なり小説なりが向題にしてきたところは、共通の存在感・概念に対する疑問だと思う。共通概念を排除した時何が出てくるかと言えは言葉そのもの。言葉そのものが一人歩きをするか、或いはもつと確かな共通概念を探すしか、ない。

**塚本** 何故詩と小説を分けるのか。それを分けたいのが僕達の立場かもしれない。例えば、自分が書くこうとする時言葉を自分の思い通りに使うことはできない。

**酒井** それは各自の姿勢の問題じゃないのかな。

**上村** 花岡君は、イメージを持って創作したり、或いはイメージを伝達しようとはしないんですか。

**花岡** 言葉を自動的に動かすことが多いですね。伝達したいイメージはあっても、アジビラの或いは新聞記事的に表現してはいけない。無意識から、論理的な言葉で伝達できないものを表現するためには。

**上野** 内なるものを伝達しよう、というよりもまず表現しよう、という意識だな。僕の場合は、言葉の持つ社会的系路を、僕は遠った風に使いたい。

■ 「状況」から日常性へ

**花岡** 文学と状況の二分法が壊れて、日常性と自然がモロに見えてきたという気がする。かつての状況も作られたものではないかという気はしますが……。

**上村** 僕らが「書くことが楽しい」と言ったのは個人的なものであって、あなたの言うような意味でいえば、状況から分離している」とは言える。しかし個人の世界を知ってもらいたいというのも人間の自然な欲求だ。状況を考えなければいけない、というのをもそれだけで文学が成り立っているのではないと思う。

**花岡** 現在状況を追及しようとしたら昔の「安倍反対」とかいう形ではいけないから、状況なき状況という風に設定しなければならぬ。

**上村** 状況を追うというのと、あなたの

言っていた、意図なくして言葉だけを追及しているというのはどういう関係があるわけですか。

**花岡** 結びつくものではない。一つだけあるのは、言葉だけを追っていくと自分の生活とか社会を遮断しなきゃならなくなるわけですね。永久革命、ユートピアは現実には無いもの、無限の未来にあるものを探ろうとするわけですから、言葉によるラディカリズムと政治によるラディカリズムが重なる側面があるように思う。

**上野** 状況は包括的に社会科学或いは哲学の方法で分析できると思う。対して文学の方法は個的な所から振りかおす。例えば戦争で夫を失った女の生き方から視るとかね。状況を見る目は必要だが方法論としては個を。しかし現代詩は日常へ埋没していると言っているほど日常へ固執している。60年代にあった、包括的なものへのベクトルが現在は失われていると感じる。

**花岡** 状況なき状況、の中では詩による言葉のラディカリズムの方がやりやすいのではないか。

**上村** 状況が無い、と全てを否定するという立場ですか。

**花岡** そう、要するに全共闘の感覚として、でもないわけですね。

**上野** いや、腐蝕土を読んでいるとね、否定じゃないわけ。腐蝕なわけ。東大解体

が叫ばれていた時代では、「解体」という迷  
持的な建設的な意味での行為であったと思う。  
が、腐蝕土の巻頭言では、壊すのでもない、  
腐らせるわけ。で、何が覚えてくるのかとい  
えば僕としては何も見えなかったんだけど。  
それが非常に80年代的吗というか……。

花岡 日常意識それ自体が崩壊していく時  
代が80年代には来るのではないかと思う。我  
々の今信ずる日常性とか中流意識とか、対  
して距離をとりたい。

酒井 先程から聞いていますと、その否定  
というのが非常に個人的でしかないような気  
がするんですけどね。状況と言っても實際は自  
分の内に向かっているような……。内へ向かう  
ことに限界性を感じませんか。

花岡 一つには、内へ向かわずに外へと連  
帯できるような時代じゃないと思うんです。

司会 その「時代」という言葉の使い方が  
安易なような気がするんですが、時代という  
言葉でくる前に、それが何故そうなのかを  
探っていかなければならぬと思うんです。

酒井 内へ向かうこと、例えばアメリカの  
フラワームーブメントなどは、行きつく所ま  
で行かずに終わってしまった。内面へ向かう  
ということはどうしようもない混沌、どろ沼  
の中へ足を引っ込むことだと思ふ。

花岡 だけど、意外にその内面が無かった  
りして。それに、状況がその変革とかでできる  
ようなものじゃなくなって……

酒井 そうかしら。それは内面の方から  
来るものじゃないですか。

花岡 でも、あの学生運動にはお祭りみ  
たいなところがあったと思うんですよ。その  
外側には今と同じように堅固な日常性がシ  
ーンとあったという感じで、だからそうい  
うお祭り性に気がついたということもある  
んじゃないかと思うんですよ。だから、単  
に内面の内題とも思えない。

上村 状況を把握するのは各人の、個人  
の認識だし、逆にその個人の認識の集積が  
状況を作っているとも言えるはずだと思う  
んです。状況と内面を完璧に2分すること  
はできるのか……。

花岡 それはそう。例えば昭和10年代の  
荒地派の、傍観者の文明評的な立場は、戦  
後のものでもあり現在のものでもある。  
つまり時代性のみではなく超歴史性、普遍  
性を考慮しなければならぬ。

酒井 私の場合、詩を、言葉そのものに  
よって確実なものを成り立たせていこうと  
いうアプローチとして見ている。

花岡 うん。詩の「否定」とは2つのタ  
イプに分かれると思うんです。批判と現実  
逃避、どっちにもころんじやうというか……  
だから僕自身復讐されてます。状況に。

酒井 だからそこで、否定するばかりで  
ないのがすごくまじろっ。こしくないのか  
なあと考えるわけです。なんで自分の手で

確実なものを作ろうとしないのか」と。  
花岡 確実なものと言いますと……？

酒井 すべて既成のものには不確実なわけ  
でしょ。

花岡 まあ、転換期であることはたしか  
でしょうね。

酒井 昔からそう言われてきたことだと  
思いますが、それを打開したものは無いと  
思うんです。

司会 打開はできるんでしょうか。

酒井 できないですか。

上村 少なくとも文学の力だけでそれを  
どうこう、っていうのはちよっと……

花岡 僕は文学ってのはいくらやっても  
状況に対する批評にしかならぬと思うんで  
すね。

酒井 そうかなあ。そこで何とかしてい  
けないかって……

花岡 一般の人達の無意識の所へ働きか  
けて無意識を変革させるって力はあると思  
うんです。

上村 結局、媒体にはなり得ても直接的  
にはできない。

花岡 そう、だから僕は反原理とかいろ  
いろやっていますが、そういったものとは全  
然別のものとして見えますね。一番遠い所  
で接する、という感じですね。

□ ことば—詩と小説

**塚本** 語を戻すことになりませんが、何かの形をとって、つまり表現された時そこにあるのは言葉だけなのであって、その背後に動機とか意図とかを探ろうとしても自由に見つけられないかもしれないし、何も見つからないかもしれない。最後まで言葉にとどまるべきではないでしょうか。言葉に作者の意図をとって云々するのは、文学から全く離れていくことにしかならないと思う。

**花岡** 詩と小説は言葉の次元が違うと思う。小説は現実の似姿的な所もある。

**塚本** 現実社会として受けとられる言葉と、いうのではなく、そこに書かれていたことが現実なのであって、その他に現実は無いんじゃないですか。詩的とかナニナニ的という風に分けるのは便利だけれど本質的ではないんじゃないでしょうか。

**花岡** 小説の言葉というのは意味するものと意味されるものがわりと分れるでしょう、ところが詩の場合は何かできごとがおこったというイメージは起こさせない場合が多いんです。

**塚本** 言葉から離れた所で事件が起こっているのを言葉が模倣するのでなくて、言葉が先においてその言葉を模倣する観念なりイメージなりが……

**上野** となると新聞記事と小説はどうい

う違いがあるわけですか。……言葉というものは社会的なコミニケーションの手段としてあるわけで、小説なり詩なりっていうのはそれを利用した形での一種の芸術だと思ふ。言葉をそのままの形で使うかどうかは意見の分れる所だけれど。

**塚本** 僕がわからないのは、小説の場合だけ言葉の持つ社会的な意味をとらえて詩の場合は違うという……

**上野** いやだから、小説の言語には二面性があるということですよ。

**塚本** 言語の偶性の一つとして社会性があるけれどもその社会性だけが言葉の持つ全てじゃないわけで、社会性だけをとりえて云々するのは言葉から離れたことじゃないですか。

**花岡** 小説の方が用かかれていくというのは、例えば小説的な詩を書くときこれは詩じゃない、とハネられますが詩的な小説を書いても小説だ、と見られるわけです。究極的な詩というのは、例えば「花」という言葉があったとしたら花というイメージを思い浮かべてもいけない、現実のものとして考えてもいけない、単に言葉の形と音だけで勝負することだと考えています。

**上野** 僕はちよつと違う。社会的な概念としての花を思い浮かべてもいい、と。でもそれは一部であるということ。

**塚本** 僕の言いたいのは、内容を言い出

すなどのような議論もできる、ということですよ。

**酒井** 塚本さんは、書く側と受け手の側のコミニケーション不能、安易にわかり合えるできないということから考えている、という気がしますか。

**塚本** 書く前に自分がある、っていうのは信じられないですぬ僕は。

**司会** 表現、ひととのコミニケーション、社会的な行動それ自体がそういう性格を持っていて思うんです。その状態を一番極限的に表わすのが言葉による表現だということか……

**塚本** 疑似現実という言葉が誰かが言われましたが、既にある現実を言葉で模倣するのではなくて言葉の作る世界が現実だと思ふ。

**司会** それはあらゆるかかわりに言えると思うんです。例えば会話する時でも……

**塚本** いや、会話するということは生きているということ、自分の形をとる表現とは別だと考えたい……

**花岡** でもそうになると、言語と生きることっていうのは関わってくるんじゃないですか。

**酒井** 書く意図があるかどうか自分をつかめないのなら、なんのために書くわけですか。

**塚本** その理由だっていくらでも考えら

れると思う。或いは全然無いかもしれない。

**上野** あなたの言う。言葉の中に現実がある。って言うのは、僕の言葉で言えば、言葉の中に真実がある。現実という所とはちよつと別だと思ふんです。

**花岡** 文学が言葉であるってことは僕も認めるんだけど、でもその言葉の形態のとり方で詩と小説は違ってくる。というのが僕の立場なんです。詩の場合だったら、意味が余り透明に見えずぎちやうと言葉の形が見えない。

**田中** 言葉そのものに対する問題と、詩と小説の区別の問題が混ざって話されているが僕は一般的なのから話をしたい。最近には詩と小説の区分けがつかない所が多分にあるのではないか。小説自身、多様化してジャンルがふくれあがっている。小説は出発点では詩とかなり接近していたと思う。叙事詩のように。でも今は小説が独自に形態発展してその中で詩と接近したものもある。一般論としては、小説はポイントだけでなく、詩は一行一行が他の行と関連せずに鋭い、ということですか。

**上野** 僕は俳句をやっていた時形式ということを非常に考えさせられたんです。自分がどの形式を選ぶか、狭い意味では有定型か自由律か詩か小説か、広い意味では音楽か文学か、そういう選択こそ一つの思想である。

**上村** 文学が言葉、ていうのはその通りだが、そこで言葉を工夫して、作者の伝へようとする意図を少しも受けずのイメージに近

づけようと努力する過程が、文学として芸術としてあると思う。

□ 状況のない情況：

**司会** 花岡さんは伝達を否定するのですか。

**花岡** 伝達できないことを表現しようと思つたら曖昧な表現になりますね。小説は具象画、詩は抽象画に近いと思うわけです。詩の場合は内容が表現を規定して。

**司会** 表現というのは、個と社会コミュニケーションのせめぎあいの場だと思つ。さきほど花岡さんは、究極的な詩とは言葉に意味が無いものだと言つたが、それは個にこだわり続ける姿勢だと思つわけです。対して、ふつう小説はどちらかといえば社会性の方を向いている。

**塚本** 僕が言葉そのものについて話をしたのは、さきほど、状況を変える。とか言葉を駆使して何かをする。ということに對して反感を持つたからです。

**花岡** 塚本君は言語以前に状況は無い、と考えているが僕の考へてるのは言葉となつた状況、文学の中の状況なんです。つまり、言葉は伝達させる要素があるから場を設定する。で、言語の中の世界は若干現実的な社会と写像的な対応をとりますからそこに影響は現われてくるんじゃないか。

**司会** もとへ戻りますが、もともと詩は個と社会性の両方を持つていたんじゃないかと思ふんです。小説というのは近代的なもので、詩も今では近現代のものですが元来は詩しかなくて、しかもその詩は内容と韻律を兼ねていたと思う。ところが今はそれが分断されてきて、個が社会性と結びついていない状況だと思つ。で、さきほど花岡さんは状況と文学の二分法を言われましたが、かつてそういう二分法があったと考へるわけですか。

**花岡** それにはネタがありまして、第一次戦後派は状況と文学、政治と文学という分け方をしていた。ところがこの二分法を疑つて、文学には文学の本来の目的があるんじゃないかと言ひ出したのが吉本隆明等です。この頃になると状況が情況になります。情況というのは、人間の内面に表わした状況のことです。人間の内面にある限りに對して、言語的なものと社会的なものとは交流すると思ふんです。だからそういう点において二分法が崩れたと言つてるわけです。塚本君の言つた、状況と文学が一致しないんじゃないかというの状況の方を言つてるんだと思つ。僕が言つた、言語の中にある状況というのは情況の方を言つわけです。

**上野** 政治或いは文学を内面的に包括した所に情況がある。

花園 状況が無い情況——だからかえって情況が突出してくるわけで、それは最近、日本の感性の復活等と現われてますね。

上野 現代詩、現代小説が日常・個に固執している。状況にはむしろ背を向けているという情況がある。

花園 かつては文学は政治のため、という例えばスターリニズムとかの影響があったわけです。

上野 中国における現代小説が全く面白くないのは、それがマルクス主義と毛沢東思想を広く押しつけるために使われていて、個的な所での掘りおこしが全く認められていなかった所から来る。

花園 スターリンでも毛沢東でもそう、すけど、言葉っていうのは意味を伝達するものだと決めつけていて、だからシニールレアリスムなんかをブルジョワの退廃とか言っちゃたら排斥するんですよ。

上野 絶対音楽は排斥されて標題音楽だけが公式な音楽として認められる。だからベーターヴェンが批判されたっていうのがあるでしょ。

酒井 しかし情況において個にとどまるから堂々めぐりで変わっていかないんじゃないか……

花園 そうですね。それに制度とか社会意識を支えているのは外側の、例えばマスコミやなんかやっつてるように思えてもそれは実

は我々の意識自体じゃないか。個に向かうにしてもそこらへんに気がつくべきだと思いますね。

司会 ただ、状況つまり制度とか国家とか政治とかは個の情況を越えて肥大してゆくなって所があると思うんです。それはよく言われている言葉で言えば個人の疎外、ということでしょうか……

花園 それとファシズムの問題ですね。僕としてはそれを内部から食いとめたいて所があるんですが……

上村 今の我々の情況は状況のない情況だ、と言うわけですか。

司会 離れている、というか

花園 もっとすべっちゃって、情況のない外側の状況というのもありましてね。マスコミ操作など……

上野 はっきり言えば体制の側から状況が無いっていう風にさせられている、というか恣意的にさせられているような中での情況だと思つう。

花園 うん。モラトリアムとかね。

上野 その中で、現代詩、小説は日常へ向う。鈴木志郎康とか三田誠広とかね。ところで、童夢の座談会で酒井さんは日常が本事だと言っているけれど

酒井 そういう意味での日常じゃないです。

司会 昔酒井さんは「まな板で刻んでい

る時原爆のケロイドが脳裏にあるような日常」と言っていた。

上野 花園 それはすごいな。

酒井 そんなこと言ったっけ。(笑)

司会 で、理想的に見てくるのかもしれないけれど、原初的な詩っていうのは個体性と社会性、意味と韻律を同時に含んでいたと思うわけです。

花園 でも神からの言葉としての他動性がありましたね。例えば言葉とか。意味をこっちで一義的に決められないという……

司会 ああ、それはあるでしょうがしかし詩の中に状況と情況を含んでいたと思うわけです。

花園 情況の根源にはそれがありますね。

上野 原初的には無名性があった。読み人知らずの和歌とか平家物語等にしても個性が抹殺された所に文学が成立していたわけですよ。ところが近代文学においては、作者の名前は必ず出てくるわけ。しかも、一つの作品を見るより一人の作家を見る傾向がある。

司会 そういう個の向題との関係で、さきほど上野さんが体制から状況が無いようにさせられている、と言ったが私はその、体制という言葉自体を言えないと思うが。

上野 でもそれは二分法的体制の最もぬらいとする所じゃないかな。各個が、体制の中に引き入れられていゆる中流意識と

か言ってるが実は圧殺を受けてる所を危惧したいわけ。その中でどうして俺達は書いていくんだって所を話題にしてほしかったんだだけ……

**花岡** 僕はいわゆる中流意識とか日常性とか全然信用したくないわけですよ。醒めていきたくないという所があるんですよ。

**上野** 僕達は高度成長期に育ったわけ。で僕らが幼児の時どういいう世紀のイメージを思い描いたか。ていえば、鉄腕アトムのなつまり機械文明がもたらす幸福なイメージだったわけ。ところが次第に公害とか経済停滞とかで、今の子供達は或いは大学生も、明るい未来は思い描かず趣味に合った生活をしたくないなんて答えてる。

**酒井** 日常性やなんかを否定的にとらえるのはいいんだけど、その次の段階でね、だからどうなんだ、と言いたいわけですよ。

**花岡** わかります。「だからどうなんだ」の側面では僕は反原理共斗やったりしてるわけですよ。(笑)

□ 文学としての根源性 ラディカリズム

**司会** 一番最初、花岡さんが言葉によるラディカリズムと言ったけれど、それは例えはナキほどの「体制」に關して言えば、その言葉の持つツワを崩していくことではないかと思う。言葉として、或いは文学としてのラディ

カリズムをどうお考えですか。

**花岡** サドは牢屋に入れられちゃって、政治的にはなんにもできなかった。でもその牢屋の中で書き続けた作品が革命の聖典みたいになったわけですよ。そういう逆のフィードバックもあると思うんですよ。サドがフランス革命に参加して、例えばロベスピエールみたいなおもちゃとして、果して今ほどの影響力を持ってるかは疑問ですよ。

**上野** かつてはろく人寄せば同人誌、だったが今は薄削、という時代で、駒祭の企画を見てもそうですよ。文学の方でも水平的な時代のような気がする。池田満寿夫とか村上龍とか、ジャンルのに水平だ。でも僕はそれへのアンチとして、古めかしく垂直的にやっていきたい。地中に埋もれてもいいと思う。

**酒井** 垂直的なものもいいのだけど、奥底の段階でいるんなものを巻き込んでいくことがラディカリズムじゃないかと思うわけですよ。むしろ上野さんの言う垂直志向は上へ伸びようとする志向のように思う。童夢の場合だったら、下、根っ子まで下がってね、演劇等も含めて、やりたいと思う。まあ、枝葉の所で止って回りの所をひとめするだけで終わってるって批判もありますけど。

**上野** 受ける所では芝居とか政治状況と

か広く受けて、それを凝縮した所で昇華したいという所ですよ僕らは。

**塚本** 今話されていたことが文学と全く関係ない所で行なわれていたなら僕は認めますが、文学の場合は、文字以前の考えが鋭ければ鋭いほど表現も深い、というような考え方は危険なものに思っんですよ。言葉を自分の自由に操れるものという風に考えちゃうのは危険ですよ。

**花岡** 意味に対する不信で言葉に対する信頼

**酒井** そう、でもね、そこを何とかして乗り越えていかなきゃ文学として成立しないと思っんですよ。

**田中** 塚本君の理論をうまく使つと、批評に対して逃げられるな。自分に対して厳しく使う場合はいいんだけど……

**酒井** 言葉は一番信頼されやすく、一番不確実な手段であると。だから難しいと思っただけだな。

**花岡** どのような解釈も許すけれども言葉としては言葉自体としてしか求められない。それでも流通できるし誤解もされるというね。

80年代に向けて時錯社新社屋に告 移転/住所が変更になりましたの社 びよろしくお願いたします。  
P6等参照(新住所については)

◆編集に初めてたずさわりの、編集とは酔  
払ってやるもんじゃと痛切に思う。でも  
時代錯誤社は有能な新人社員を得て前途  
は明るいのですぞ。断乎阻止。取締役四  
名本郷逃亡。

【戌】

◆時錯社のニューフェイスとして編集に  
携わった訳ですが、早くも幽霊社員にな  
るのではないのかとおそれが……。これ  
からは皆さんの声の代弁者として頑張ら  
ます。俺は若いのだ。宜しく。【雀】

【雀】

◆長い間お世話になった時錯社ですが、  
今回限りで退社することになりました。  
いろいろどうも有難う。

【頁】

◆この頁というのは新入社員としてこ  
のようにヒネクレタ社員他4名の強カ社  
員(?)も入り時錯社の未来も安泰と言えま  
しよう。私は安心して隠退します。いろ  
いろいろも有難う。

【狸】

◆今まで病気、怠慢で編集の際のテッ  
記ヤにとことんつきあ、たのは初めて。字  
後は覚えてっつ、「剣菱」に酔っ払いいつ  
集しかし社員の奥感マウカカンバン

【鼠】

◆新入りです。編集の仕事がこんな楽チ  
ンだとは思わなかった。スギヤキ食って  
酒飲んで、グースカ寝れば「イイ」

アリノ。いやあ、世の中、バカが多く  
て助かります、ハイ。

【釘】

◆寒いすね。きつと冬だからなんぞしよ  
ね。からっ風のうちのそびえる赤城山が懐  
しい季節です。恒河沙もいよいよ10号に  
なり、さあ春だ。ソルバンが。

【鳥】

◆カゼを言い訳に連続サボターシユを続  
けた結果、「いつもの通り」みなさんに迷  
惑をかけ、とうとう最後の原稿を1人わ  
いしく(ふもないけど)書きました。し  
かし寒いのはほんといやです。体も足  
もドックケ入り、いまかしただけが変わり  
ません。

【邑】

◆すももももももももももももももい  
ろあるそう。ははははははははははは  
のはははははははははははははははは  
んじやおれは!

【奥】

◆今年の風邪はバカがひくとか誰がさん  
が言っておりました。ちなみに小生は風  
邪ひとつひいておらず若さに満ちあふれ  
て毎日を送っております。我社にもここ  
も新人とは思えない。たいが奴らが入って  
きまして、のし歩いております。

【酔】

◆素面のときは、あれはひどい女と言っ  
ていたのに、酔払うと、亜紀子ほとい  
女はいないと言っつづれました【蝶】

の代筆

恒河沙 こうかしゃ No.10

特価 180 圓



1980年1月25日発行 (第1刷)

編集発行：時代錯誤社

(〒157 世田谷区岡本 1-3-5-101 鐘形ネ)

印刷所：ギンショウ



ナマモノデスノデ オ早目ニオ読ミ下サイ。乱丁落丁はお取り替えします。



時代錯誤社及び恒河沙に対する文句  
や意見その他原稿に対する反論や共感、  
「アホワサ」、「絶賛」etc. ----- 何でも結構です。  
お気付の事をお書き下さい。

---

---

---

---

---

---

---

---

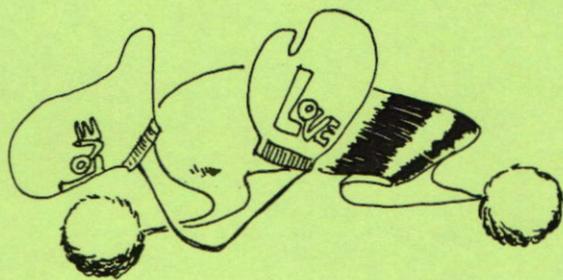
---

---

御名前:

御住所:

(よろしかったら電話番号もお願いします)



特価 180 yen